

135.48

135.48-R76-3ウ



1200500726298



始



135.48

R76-31

(1)

岩波文庫

690—692

懺悔錄

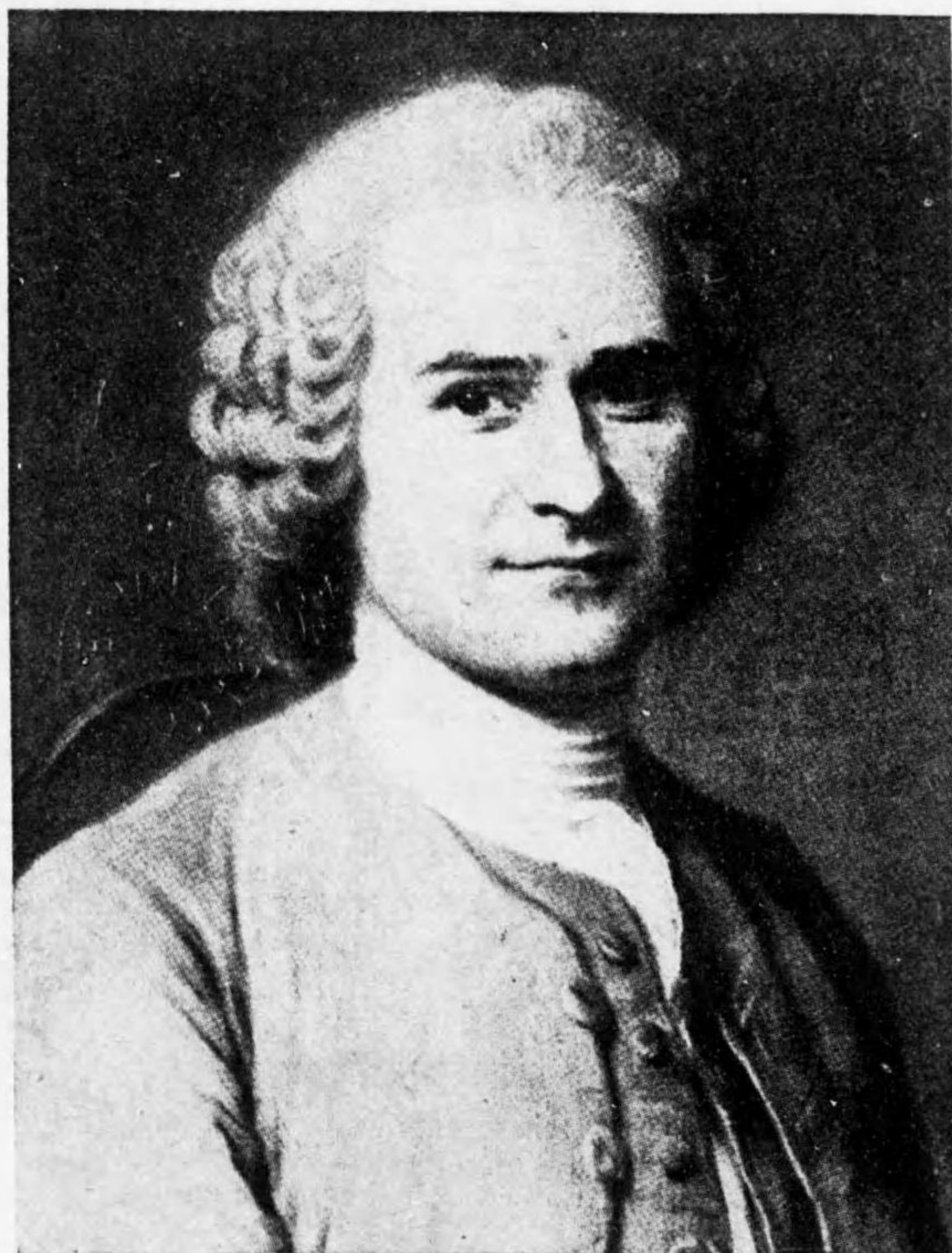
上卷

ルソオ著
石川戲庵譯



岩波書店





壯年のルソオ

序

ジャン・ジャック・ルソーは近代思想の一大源泉である。政治、道徳、文藝、其他現代文明の各方面に深大なる感化を與へて、今なほ其餘響を曳いてゐることは、隠れもない事實であつて、東洋諸國の覺醒についても、この天才の思想が否定すべからざる動機を供給したことは、後世の史家が必らず注意する所であらう。而してかれ一生の述作いづれも皆世界の人心に影響してゐるが、就中、此「懺悔録」は天下の一大奇書、近世文學の名著であつて、「新エロイズ」よりも「民約論」よりも「エミール」よりも、永く百代に愛讀せらる可き文字である。時恰もルソー生誕二百年に際し、石川君が佛蘭西の原文より、寸毫の省略も無く、この名著を國語に翻譯して出版されたことは、明治文壇の一大事業であるといふも過言では無い。

ルソーの性格と閱歷と事業とは、この「懺悔録」中に餘蘊無く述べ盡されてゐて、そこに非凡の人格が躍如たる自敘傳の面白味が充分ある。然しもしそれだけなら、聖アウグスチヌスやベンエヌウト・チエリニの告白を讀んで、かういふ珍しい性質の人が、藝術家の中にあるのか、又は信仰の經驗とはかうしたものかといふ、大部分は知識上の興味を受けるのと大差は無いが、ルソーの場合は、それ以上に更に大きい深い痛切な興味を感じるので面白いのである。全體此「懺悔録」が文藝として不朽の生命を有つてゐるのは、何も百世の師表たるべき精神界の規範を

4
教へてある爲でもなく、萬人の據つて以て行を正す可き手本を示してゐる爲でもない、否、寧ろ清濁美醜雜然とした一生の腹藏のない告白を、著者が力強く述べ立てた爲だ。情熱の焰はあらゆる汚濁を焚き盡して、讀者の眼に映り、胸に響くものは、ただ一道の靈光である。知識よりも行爲よりも奥深く潜んでゐる生命の叫は、一大長篇の抒情詩ともいふべき此書を貫いてゐて、萬人の心に共鳴を生じる。近代人はこの書の裡に、世と共に新らしくなつてゐる「自我」の影を見出すであらう。煩惱も執着も妄念も我意も、力強く美しい情熱の煉金術を経て、正義となり同情となり理想となり愛となる不可思議の變化を、ルソオの一生について會得しない者は、まだ其真相を穿つたとは言はれない。

序
ルソオを指して情の人といふのは素より當つてゐる。然し寧ろ創作の人といふ方がなほ適當であらう。新らしい感じ、新らしい道を拓いて進む創作力は、強く、執ねく、禁め難く、行く所まで行き盡さねば止まらない、恰も水火の如き自然力の風がある。此創作力が性格の奥に潜んでゐて、殆ど二重人格ともいふ可き彼の性質を刺戟し、或時は壯烈なる智力の活動を促して、理智の白光を前人の究め盡さなかつた所までも及ぼし、又或時はこれが反動として、何物も抑へ難い感情の波に全人格を没して了ふ。此時創作力は情熱の熔爐中に在つて、沸騰し、泡起すること暫く、忽にしてまた清新の思想を發射する。生長にはいつも刺戟が要る。生みの苦みが伴ふ。ルソオの創作は常に反抗の産物であつた。冷然たる理智の論理を進めて、分析し解説して行く尋常の法とは異がつて、常に實際又は虚構の論敵を眼前に控へ、或は宥め或は壓して、終に之を心服せしめ

ねばやめない。生きた人間を前に廻して置いての對話である、勧誘である、説教である。例へば「エミール」は絶えず二個人格の對立を思はしめ、「サザア牧師の信仰宣言」は熱烈なる法話の一種、「民約論」は壯烈なる新政の布告である。ルソオは更に明らさまな直接の手段を執つて、書を論敵に送り、之を納得せしめなければ説破し粉碎しようとした。ダランベール其他に送つた幾多の書翰がそれである。而して「懺悔録」に至つては、一見して素より獨語の體裁を具へてはゐるが、實は著者のめぐりに、眼に見えぬ無数の瑕あり、罪あり、弱みあり、愛し且つ惱める人間の群集があることを忘れてはならぬ。「懺悔録」はまた一種の解嘲として書き始められた、而も理を述べ證を擧げて世間の誤解を晴らさうとする辯護ではない、眞を眞とし自分を在の儘に現すと稱して、無數同胞の群をして、わがこの汚辱に悲の叫を揚げしめ、わがこの窮苦にその顔を赧らめしめよと、捨身になつた所に非常な強みが生じてゐる。「懺悔録」は、はじめ一書肆の勸に從つて、モチエに居た時書き始めたのだが、もし後半生の迫害が無かつたら、恐らく完結しなかつたかも知れない。いつもルソオは障礙に會つて、更に反撥力を加へる。物平ならざれば鳴るとは、特にこの天才に當嵌まるやうだ。

序
屈しては伸び、伸びては屈し、更にルソオの創作力が一大飛躍を試みる時、情は常に理に先きだつて進む。又明晰なる談理の間にあつても、生氣のややもすれば衰へようとする時、必らず情性の活動が加はつて、彼の思想を指導して行く。故にルソオの述作は悉く皆一種の小説である。と評する者があるのも無理ではない。なるほど「エミール」は教育の小説「民約論」は理想國の小

説「懺悔録」はかれが一生に關する小説であらう。然し、かれの一生そのものが、かれの思想と同じく既に始めから小説である以上、これは自然の事である。而して、この小説の如き述作は、語を換へて言はば、また一種の音曲であつて、新らしい感じ、新らしい思想が、單に記るされ、語られるばかりでなく、實は始めから朗らかに、はた染々と歌はれてゐる。ルソオの作品は一の交響體樂である。彼によつて、近代の思索には音樂の情緒が入つて來た。オペラ・コミックで演じたルソオの作曲はいふに足りないが、それよりも深みのある大音樂は、自から彼の思想に行き互つてゐて、理智の光覺束なく、言語の道が斷つ所にまで、近代人の情緒を誘ひ行くのである。

情緒を揺る者は、すべてを動す者である。規範は廢り、形式は壞れ、理智終に惑ふ時、新らしい生命の勇を鼓して人の躍進する所以のものは、情性の誘致あるが爲である。近代の人は皆靜に安んぜずして動に生きる。唯生きるのでは眞に生きたのではない、動くのが生きるのであるとは、現代の智者が自から曉り得た所だが、かかる思想と氣分とを夙に創作し得た者は實にルソオである。理智を過重せず、情性の價值と權威とを認めた點が、かれの最も偉なる所だ。「懺悔録」が永く幾代に互つて價值を存するだらうと思ふのは、如何にもルソオが人格の奥に潜む創作力が強烈であつて、近代人の重んずる生命の冒險を試みてゐるからである。現代の大抒情詩人エミール・エルハアレンの作「錯誤」といふのに、沙山陰に古るくからあつて、月無き磯を、暴風の沖を照らしてゐた燈明臺の火が消えたことを咏んである。其時心ある者は、頰杖ついて沙山の隅に坐しながら、夢の迷宮に手さぐりしてゐる。稍強い者は、日常の業に勤しんで、空しき夢に耽ら

ず、忠々しくも他所より火種を求め來つて、新らしい光を作らうと苦心する。而も最も偉大なる者は、心に堅く誓ふやう、今は前後を顧みる時で無い、この渴したる心を抱いて、何はともあれ前進しよう、力と命とは實に眞と偽とのあなたにあるからと。ルソオの創作力とはこの力と命とのことである。

明治四十五年六月ルソオ生誕二百年祭

上田 敏

序

石川君の此「懺悔録」譯本は、友人上田敏君の序を得て足れりと云つて好い。上田君は慣用の婉曲文字で、此書の來歴、性質、効果を遺憾なく、痒い所に手の届くやうに説いてゐる。それから此書を譯するに、石川君がどれ丈適してゐるか云ふことも、大抵上田君が讀書家に對して紹介してゐる。私は唯懺悔録と自己との關係を一言附け加へる丈に留めて置きたい。それは私が一度此書を譯することを企てたことがあるからである。まだ森田文藏君が存命してゐた時であつた。森田君が主宰して「譯府」と云ふ翻譯ばかりを載せる雑誌を發行しようとした。それに私も何かどつしりした、重みのあるものを譯して出さうと云つて、雑誌の初號に載せる原稿を作つて、森田君にわたして置いた。それが此書の初の幾面かであつた。私の計畫も全譯の積りであつた。併し譯府は生れないうちに滅びてしまつて、私の原稿は空しく返されてしまつた。その後寺山啓介君が「城南評論」といふ雑誌に、私の譯稿を出すことにしたので、私は跡を書き續いで行かうと思つた。併し私が外の事業に阻碍せられて、はかばかしくも書かず、きれぎれに出してゐるうちに、城南評論も潰れた。それで私の譯本は斷簡になつてしまつた。その頃から今日までに鈔譯本が出たり、摘譯が雑誌に載せられたりしたが、皆取り立てて言ふべき程のものではない。要するに懺悔録の國語譯は石川君の此本が唯一の完本である。私の言はうと思つた事はこれで盡きてゐる。

私は此本が世間に出て多く眞摯なる讀者を誘ふことを願ふものである。俗論が或はこれを危険な書だとするかも知れない。併しルソオの書が危険なら、カントの書も危険であらう。さうなると新しい文藝も新しい哲學も一切排斥しなくてはならない。私はそんな俗論を憚つてゐることは出来ない。

明治四十五年六月

森 林 太 郎

譯者例言

- 一 本書は舊版の全譯懺悔錄の全篇に修正を加へたものである。原書は善本の稱ある *Nouvelle Bibliothèque classique des éditions Jouaust: Les Confessions, 3 vol. (E. Flammarion successeur, Paris)* に據り、二三の異本をも参考した。
- 二 本文の擲筆から著者の死に至るまで十二年間の事實と、その生前死後に互つて起つた「舊友陰謀事件の真相」とを、特に「補遺」として本書に附載した。殊に後者は懺悔錄第二部の解明のために必要と信じたからである。
- 三 著者の加へた若干の註は「原註」として本文中に挿入し、原書異本の校訂者の加へた少許の註と譯者の加へたものとは、その節の後に別行として細字で組み入れることとした。譯者の註はこの版に於いて可なり詳しく書き入れることが出来た。これは書中に出る人物、著書、事件の連繋等を明かにする外、本書の場合に在つては、著者の告白の眞實性を決定し、又その背景である第十八世紀を瞥見せしめ、且この物語を現代へ聯絡せしむる役目を負つてゐるものなのである。
- 四 本文庫の制約上、舊版の地圖と索引とを入れることが出来なかつたのは、譯者の遺憾とする所である。

五 貨幣その他は、左表に據つて我が近似値に換算したものを記入した。

As	二十五錢
Batz	八錢
Ducato	一圓七十錢
Écu blanc (ou écu d'argent)	二圓
Franc	四十錢
Kreutzer	一錢五厘
Liard	二厘五毛
Livre	四十錢
Louis	十圓
Pistole	四圓
Six-blanc	五錢
Sou	二錢
Zecchino	四圓五十錢
Livre	百六十匁
Quintale	廿六貫六百匁
Lieue	一里
Toise	六尺七寸

- 六 發行期日に迫られて尙十分に推敲しえなかつた部分は、重版の際に訂正したいと思つてゐる。
- 七 舊版本の發行所である大日本圖書株式會社が、本書を此の文庫に移すことを快諾せられた好意に對して、こゝに感謝の意を表したいと思ふ。

一九三〇年十二月

ルソオ 懺悔録 第一部

第一卷

一七二二—一七一九。【誕生—七歳】

私はこれまでに先例のない、又今後に模倣者のあるまじき一つの企圖を懐いてゐる。私は我が同胞に、自然の儘を丸出しの人間一人を見せたいのだ。そして其の人間は私なのだ。

私だけだ。私は自分の心を感じる、そして人間といふものを知つてゐる。私は自分の見て来た人達のやうには造られてゐない。現在の人の誰もと同じやうに造られてゐないと確信する。私はそれら以上の者でなくても、少くとも異なつた者である。自然が私を撮めた鑄型を割つて了つたのは、いゝ事だつたか悪い事だつたかは、此の本を読み終つてからでなくては判断が出来ない。

いつでも最後の審判の筈の鳴りはためく時、私はこの本を手にして大審判者の前に進み出よう。私は聲高に述べ立てよう。——これが私のした事、考へた事、又在つた通りのものです。私は善も悪も共に率直に語りました。どんな不良なことも隠さず、どんな善良なことも附け加へませんでした。偶々無意味な文飾を用ひたとすれば、それは單に記憶の脱漏に由る隙間を充たす爲に過ぎなかつたのです。眞實であり得ると知つた事を眞實としたことはありませうが、虚偽と知つた

ものを眞實としたことは断じてありません。私は自分を有つた通りに現しました。見下げ果てた賤しいものであつても。善良で寛大で崇高であつても。永劫の神よ、汝の親ら視られた通りに、私は自分の内面を暴露しました。願はくは私の周圍に私が同胞の無數の群を集めて、私の告白を聴かしめ、私の下劣さを悲しましめ、私のみじめさを恥ぢしめ給へ。彼等の各々をして、汝の帝座の下に、皆同様の誠實さをもつて、順次に其の胸を打ち開かしめ給へ。然うした後には誰一人でも「私は其の人よりも立派なものでした」と、言ひ得るならば、言はしめ給へ。

一七二二年、私はジュネエヴで公民イザアク・ルソオと女子公民シュザヌ・ベルナルとの間に生れた。貧弱な資産を十五人の子供に分配したので、父の所得は有るか無い位になつて了つて、一家を支へるには、唯時計職に由る外はなかつた。父の時計職はそれは巧かつたのである。母はベルナル宣教師の娘で、父よりは裕かであつた。彼女は發明であり美しくもあつた。父が此の女を手に入れるには、随分苦勞したものだ。二人の戀は殆んど生れるとから始まつてゐた。八九歳の頃から、二人は毎夜ラ・トレイユの邊りを一緒に漫歩し、十歳の頃には早や離れられなくなつて了つた。同情、兩つの魂の一致は、馴染から來た感情を二人の中に固めた。性得優しく感じ易い二人は、互ひに對手の中に、同じ傾向を見出す時期のみを待つてゐた、寧ろその時期が彼等を待つてゐた。そして受け入れる爲に開かれた對手の心の中へ、自分の心を投じた。彼等の情熱に逆らふらしい運命は、彼等の情熱を喰ふばかりであつた。若い戀人は、その愛人を獲ること

が出来ない爲に、悲みに弱り果てた。彼女は勧めて氣晴らしの旅行をさせた。その旅行も無効に終り、彼は一倍戀しさを増して歸つて來た。彼は再び愛人の優しさと節操とを見出した。この試練の後、生涯二人愛し合ふ許りであつた。彼等はそれを誓つた、すると神はその誓に祝福した。

(一) 六月二十八日。洗禮を受けたのが七月四日。この七月四日が出生の日と間違へられてゐることがある。

(二) ジュネエヴは今瑞西聯邦の内にあるが、當時は聯邦の外に立つて、一個の自治體を組織し、ジュネエヴ共和國と稱した。當時の人口二萬四千。そしてその實權は附近一帯の地方を領有するサヴワに在つたと云つていい。元來瑞西はハプスブルグ家の所領であつたが、その虐政に苦しめられてから、次第に獨立自由の民たる特色を發揮し來り、謂はゆる三州同盟の反抗から始まつて、遂に一六四八年のウエストファリア條約で、十三州の聯邦が成立した。だからルソオ在世の間の瑞西の中にはジュネエヴは加はらない。此の十三州に更に他の九州が一八一五年までの間に加盟して、それで始めて今日在る如き二十二州の聯邦國が完成したのである。前の十三州の中で本書の中に名が出るのは、チュウリヒ、ベルヌ、フリブウル、ソルウルの諸州。後の九州の中ではヴォオ、ジュネエヴ、ヴァレ、ヌシヤテルの諸州である。

(三) 巴里の一書店の子に、ヂヂエ・ルソオといふ者があつて、第十六世紀の初からジュネエヴに移つて其の移民と認められた。移民とは、當時のジュネエヴの四階級の人民即ち、一、公民 *citoyens*、二、市民 *bourgeois*、三、移民 *habitant*、四、土民 *natifs* の中の第三類で、子孫に至つて市民にも公民にもなることが出来る。だからジャン・ジャアクはジュネエヴの公民である。ヂヂエの次は、ジャンとダヴィドと二代續いて、イザアク *Isaac* 即ちルソオの父に至つた。

(四) Suzanne Bernard. 一六七三—一七二二、七月七日。

(五) 娘でなく姪である。

(六) 二人は一七〇四年六月二日に結婚した。

母の兄弟のガブリエル・ベルナルは、父の姉妹の一人に戀をした。が、女は、自分の兄弟もあの姉妹と一緒にされる條件でなければと言つた。戀はすべてを解決した。で、二組の結婚が同じ日に行はれた。斯うして私の小父は私の小母の夫であり、その子供は二重に私のいとこであつた。一年の終には雙方に一人の子供が生れた。それから後、尙別居しなければならなかつた。

(1) Gabriel Bernard. 一六七七—一七三五。

小父のベルナルは技師であつた。ウジェエヌ公の下に帝國と匈牙利とへ勤務に行つた。彼はベルグラッドの役に名を揚げた。父は私の唯一の兄が出てから、君士坦丁堡から召されて行つて、宮廷の御時計師になつた。その留守中、母の美貌と、その才智技能とは、人々の尊敬を引きつけた(原註。彼女を溺愛した小父の宣教師が、その教育にうんと力を入れたので、彼女は境遇に不相應な位立派な技能を持つてゐた。晝も描き、唄もうたひ、堅琴も弾き、讀書力もあり、詩も可なりに作つた)。佛蘭西公使ラ・クロジュウル氏などは、最も熱心にそれを寄せた人だ。その後三十年も経つて、此の人が母の事を感動して私に話したのを見ても、その情の強かつた事が分る。母はそれを拒むには、貞操以上のものを持つてゐた、即ち切に夫を愛してゐた。彼女は夫の歸國を迫つた。夫は一切を投げ棄てて歸つて來た。私の身は此の歸國の痛ましい結果であつた。十月後に虚弱で病身な私が生れた。私は母に生命を棄てさせた、そして私の誕生は、私の最初の不幸であつた。

(1) Eugène de Savoie-Carignan. Prince Eugène の名で史上に著れた當時のサヴワの名將。佛國に容れられなかつ

たために埃太利軍に入つて屢々佛軍を惱まし、又土耳其と戦つて大勝を博した。巴里に生れ維因に歿。一六六三—一七三六。

(二) 一七一七年、ウジェエヌ公が土耳其軍を破つた戦争。

(三) この人の事は第五卷、第七卷に出る。

(四) 一七一一年九月。

(五) 母がベルナル夫人を訪ねて行つたその先でルソオを生み落した。そして産後で直ぐに死んだのである。

私は此の損失にどうして父が堪へたかは知らないが、遂に慰む時が無かつたことは知つてゐる。父は彼女を奪つた者は私だといふことが忘れられないと共に、私を見て彼女に再會するやうに思つてゐた。私が父に抱かれる度に、彼の歎息にも、その夢中の抱擁にも、必と遣る瀬無い哀惜がその愛撫に混じてゐるのを感じないことはなかつた。その爲に愛撫は更に強く許りであつた。父が、

「ジャン・ジャック、お母さんの話をしようぢやないか。」

斯ういふと私は、

「ええ。それでは復た泣きませう。」

唯是丈の言葉に父はもう涙ぐむのであつた。

「ああ。」父は聲を濡ませて、「彼女を返してくれ。彼女について私を慰めてくれ。私の魂に彼女の開けて行つた穴を埋めてくれ。お前が私一人の子だつたら、こんなに可愛がられようか。」

彼女を失して四十年の後に、父は第二の妻の腕に抱かれて死んだが、口には最初の妻の名を呼

び、胸の底には彼女の姿を浮べてゐたのであつた。

斯ういふ人達が私の生涯の作者達であつた。神が彼等に授けた物のうちで、敏感な心だけを彼等は私に残してくれた。併しその心は、彼等の幸福を生み出し、私の生涯のあらゆる不幸を生み出した。

私の生れた時は殆ど半死人のやうで、助かる者とは思はれてゐなかつた。私には或る病(一)の萌しがあつた。これは年と共に高じて行つて、今では時々緩む事があつても、それはまた別な、尙一層劇しい苦痛を受けてゐる時だけである。父の姉妹の一人で、愛嬌があつて氣の利いた娘が、厚い介抱をしてくれたので私は救はれたのだ。私がこれを書いてゐる時(三)も、彼女は未だ生きてゐる。八十にもなつて、自分より年下の、しかも酒に爛れた亭主の世話をしてゐる。親愛な小母さん、貴女が私を此の世の人にした事は赦してあげます、そして私の生涯の初に貴女に蒙つた手厚いお世話の返報を、貴女の生涯の終に爲て上げられないのを残念に思ひます。外にジャクリヌといふ乳母もあつて、未だ達者で生き存(四)へてゐる。誕生の時に眼を開けてくれた手は、私の死に際して眼を閉ぢてくれるかも知れない。

(一) 尿閉。詳しく後巻に出る。

(二) シュザヌ、I. K. シュンゾン SHUNDO と云ふ。四十八歳でニヨンの人ゴンスリュ CONCERN と結婚した。一六八三—一七

七四。

(三) 一七六六年ルソオ五十四歳の時。

私は考へる前にまづ感ずる。これは人間の通性である。私は人よりも餘計にこれを経験した。私は五六歳頃までの事は覚えてゐない。奈何して本を読み習つたかも知らない。唯記憶に残つてゐるのは、最初の讀書と、その影響とである。それ以後の自分のことは切目無しに覚えて居る。母は幾らかの小説を残して行つた。父と私は夕飯の後にそれを讀むことにした。初はたゞ面白い本で讀書力を附けるぐらゐにしか考へてゐなかつたのが、纏て興味が強くなつて、それからそれと讀み續けて、それで夜毎を過(一)ごした。一冊の本の終まで讀み止(二)すことが出来なかつた。時とすると、父は隣方に燕(三)を聞いて極り悪(四)さうに、

「さあもう寝よう。お父さんはお前よりは子供だな。」

こんな亂暴な仕方では幾らも経たない中に、私の讀書力、理解力がめつきり進んだばかりでなく、欲情についても、齡には似合はず眼が醒めた。事物の知識は少しも無いのに、有らゆる感情は既に分つてゐた。何物をも解し得ないで、一切の物を感じた。しきりに経験したこれらの混亂した情緒も、私の未だ持つてゐなかつた理性を壊しはしなかつた。けれどもその情緒は、全く別種の理性を形づくつて、人生に關する奇矯な空想的な觀念を私に與へた、經驗も反省も遂にそれを癒してはくれなかつた。

一七一九—一七二三。【七歳—十一歳】

小説は一七一九年の夏で終つた。次の冬は別な物を讀んだ。母の書架は漁り悉したので、母の

父から傳はつた書物に移つた。幸ひにその中に善い本があつた。それも然う無くてはならない譯は、その書庫が事實宣教師の、しかも當時の風として學者で、同時に趣味と才智の人の手で蒐められたものだつたからだ。ル・シュウルの「教會及び帝國の歴史」、ボッシュエの「世界史論」、ブリュタルクの「英雄傳」、ナニの「ヴェネチヤ史」、オヴィッドの「變形奇談」、ラ・ブリュイイエルの諸著、フォントネルの「天體問答」と、「死者の對話」、モリエールの若干部が父の室に移され、毎日父が仕事の間、私はそれらを彼に讀み聽かせた。それについて感じた私の興味は、斷から言つて珍しい、恐らく又とないものだつたらう。中にもブリュタルクは私の好きな讀物になつた。絶えずそれを讀み返す時の興味に、小説癖が少し減じて、程無くオロンダットやアルタメエヌや、ジュバよりも、アジェジラス、ブリュチュウス、アリスチッドを擇ぶやうになつた。この楽しい讀書とその度の父との對話とから、羈絆と屈從とに我慢の出来ない私の自由な共和的精神、私の不屈な高慢な性格が出来上つて了つた。この精神、この性格が、それらを發揮するのにも最も不適當な境遇にゐた私を終生苦しめ抜いたのである。羅馬や雅典のことにのみ氣を取られて、謂はばそれらの偉人たちと共に生存し、自身は一共和國の公民と生れ、祖國の愛が最強の熱情であつた父の子と生れた私は、手本に見倣つてそれに心を燃え立たせた。私は自分を希臘人か羅馬人のやうに思ひ做した。自分の讀んだ史傳中の人物になりすましてゐた。自分の感激した不屈勇敢の事蹟の誦論に、私の眼は輝いて聲は張つた。或る日私がセヴォラの冒險譚を述べた時、その豪傑の身振をと言つて、爐の上へ片手を差し伸べたのには、皆吃驚させられた。

(一) Eustache Lesueur. 佛蘭西高名の歴史畫家。一六一六—一五五。

(二) Jacques-Bénigne Bossuet. 宗教家、路易第十四世の太子傳。「世界史論」も太子の爲に書いたものである。一六二七—一七〇五。

(三) Plutarque. 一三五年頃に歿した希臘の史家。その「英雄傳」は、ルソオが一生を通じて最も愛讀したものであつた。

(四) Nani. ヴェネチヤの駐佛大使となり、後に史家として圖書館長となつた。その歴史は *Histoire de Venise de 1613 à 1671*. 一六一六—一七八。

(五) Publius Ovidius Naso. 羅馬の詩人。前四三—後一八。「變形奇談 *Métamorphoses*」は希臘、羅馬の神話から變化現の物語を選出して敘説したもので、屢々「亞刺比亞千一夜物語」に比せられる。

(六) Jean de la Bruyère. 佛蘭西の教訓作者。昔のテオフラストに倣つて諸種人物の性癖を書き分けた *Les Caractères* に依つて文壇に知られて居る。一六四五—一六九六。

(七) Bernard Le Bovier de Fontenelle. コルネイユの甥で佛國の學者。第十八世紀學界先驅者の一人で *Entretiens sur la pluralité des mondes*, *Dialogues des morts* の著がある。前者「天體問答」は通俗科學の名作と稱せられる。彼は後にルソオの益友にのみならず、百歳まで生きた。一六五七—一七五七。

(八) 本名は Jean-Baptiste Poquelin. 佛蘭西最大の喜劇作者であることは知らぬ者が無い。作者の外に俳優をも兼ねた。一六二二—一七三三。

(九) ラ・カルプルネエド *La Calprenède* (一六一四—一六三三) の小説「カサンドル *Cassandre*」の主人公。

(一〇) スキュテリ嬢 *Magdeleine de Scudéry* (一六〇七—一七〇一) の小説「アルタメヌ *Artamène ou Grand Cyrus*」の主人公。

(一一) 英吉利のアヂソン *Joseph Addison* の古典劇「カトン *Caton*」(一七一三) の主要人物。

(一二) *Agésilas*. スパルタ王。前三九七—前三六〇。

(一三) *Marcus Junius Brutus*. 羅馬の共和主義者。セザール殺害者の一人。前八六—四二。

(14) Aristide le Juste. 雅典の將軍且政治家。前五四〇—前四六八(?)。
 (15) C. Mucius Scaevola. 羅馬の勇士。エトリュスクの王、ラルス・ポルセナが紀元前五〇七年に羅馬を攻めた時、彼は七首を齧りて竊かに敵陣に忍び入り、ポルセナを刺さうとして誤つて其の従者を殺した。彼は、其の場に縛せられて王の面前で拷問を受けた。其の時セヴォラは祭壇上に燃え燭つて居る神火の中に左手を突き入れた爲に、王はその不屈の氣象を愛でて、彼を宥した。

私には七つ年上の一人の兄(一)があつた。彼は父の職を學んだ。私が竝外れて可愛がられた爲に、兄は幾分疎略(たはざり)にされた。私はこれは宜しく無い事だと思ふ。兄の教育は此の疎略の影響を受けた。未だ眞の放蕩者になる程の齡でもないのに、放蕩をやり出した。彼は別の師匠の處に預けられたが、其處をも父の家での様に抜け出した。私は滅多に兄を見たことがない。彼を識つてゐたとも言ひ兼ねる程だ。だが私は彼をやさしく愛する事を忘れなかつた。彼も亦遊蕩兒にしては、よく私を愛した。或る時父が腹を立てて、酷く兄を折檻した事があつた。私は矢庭に二人の間に飛び込んでしつかり兄に纏り附いた。斯うして身をもつて兄を庇つたので、兄への毆打を私が引き受けた。それでも私とその姿勢で押し通したので、私の叫びと涙とで我が折れたか、それとも兄よりも私を宥めまいとてか、父も遂に彼を宥さない譯に行かなかつた。終に兄はひどく自暴(やげ)を起し、亡げて姿を隠した。その後獨逸に居るとか聞いた。彼は一度も手紙を寄越さなかつた。それからもう消息が絶えて了つた。私が獨息子になつてゐたのはこんな譯からである。

(1) 名をフランスワ François と云ひ、一七〇五年三月十五日生。一七二二年頃に時計職を學んでゐたが、その終を詳に

した。

この憐むべき少年は疎略(たはざり)に育てられたが、弟は然うでなかつた。帝王の子といへども、私の幼時に受けたよりも以上に心を籠めて育てられることは出来ない。周圍の人達には偶像視され、殊に一層珍しいことは、始終皆が私を祕藏子扱ひにして決して氣隨者になかなかつたことである。私私が父の家を離れるまで、一度でも往來で餘所の子供と一緒に飛び廻ることを許されなかつた。その夢幻的な氣質は、制止されもせず、満足させてもくれなかつた。此の氣質を、天稟に歸する者もあるが、一に教育の結果なのである。私には年齢相應の缺點があつた。饒舌(おしやべり)家で喰ひしん坊で、時には虚言者(うそつき)でもあつた。私は果物や、ボンボンや、食料品などを盗んだとしても、決して悪事を働き、損害を與へ、他人に迷惑を掛け、罪の無い動物を宥めて快を貪りはしなかつた。唯一度クロといふ隣の内儀(かみさん)が、説教を聴きに行つた留守中、その鍋の中へ小便をし込んだ事があるのを覚えてゐる。詰りは人のいい媼(おば)さんなのだが、滅多に無い喧し(やかま)やだつたので、今でも思ひ出して可笑しくなる。以上は幼時の悪戯(いたづら)の、簡單ながら眞實の話である。

眼の前には柔和の手本ばかりがあり、周圍には世にも善良な人達ばかりがあるのに、奈何して私が悪者になれよう。父、小母、乳母、親戚、友達、近所の人々、私を取り巻いてゐる人達は、決して私の言ひなりにはならなかつたが、私を愛してくれた。私も亦彼等を愛した。私の欲望は、殆ど唆(そそ)られもせず又拒まれもしなかつたので、欲望を起す氣になつた事もなかつた。或る主人に事へる迄は、斷じて我が儘といふことを知らなかつた。父の傍で讀み且書き、乳母に連れられて

散歩する時の外は、始終小母と一緒にゐて、その傍で立つたり居たりしながら、縁飾するのを見たり、歌を聴いたりしてゐた。それで私は満足だつた。小母の快活、その柔和、その氣持のいい姿は、餘程強い印象を私に残したので、今でもその風采や眼ざしや態度が眼に見える。その情愛の籠つた言葉をも思ひ出す。どんな着物を着てどんな髪飾をしてゐたかといふことも私には言へる。あの黒い髪が當時の流行を追つて兩方の顛顛の上に、二つの巻髪を作つてゐたのも忘れてはゐない。

音楽に對する私の興味、寧ろ熱情は、彼女に負ふ所のものと云つていい。但しそれが發達したのは遙か後になつての事であつた。彼女は小唄や歌謡をどつさり知つてゐて、ごく優しい纖細な聲でそれを唱つた。此のすぐれた娘の心の爽々しさは、彼女と彼女の傍に居る人々の妄想と哀愁とを拂ひ去つた。彼女の唱歌の力によつて、多くの曲が常に私の記憶に留まつてゐたばかりでなく、記憶の失せた今日、子供の時から全く忘れてゐたものが、齡を取るにつれて言ひ難い魅力をもつて思ひ出される程である。心配と苦勞とに害なはれた此の老耄の私が、時をり皺腹れた顛へ聲で、然ういふ小唄を呻いて見れば、突然子供のやうに泣き出す事があるとは誰が思はう。その小唄の節に一つ善く覺えてゐるのがある。歌詞の後半は奈何思ひ出さうとしても出て來ないが、押韻だけはどうか斯うか思ひ出せる。次に掲げるのが其の前半と、後半の中の覺えて居る所丈である。

Tircis, je n'ose

Écouter ton chalumeau

Sous l'orneau ;

Car on en cause

Déjà dans notre hameau.

Un cœur s'expose

A trop s'engager

Avec un berger

Et toujours l'épine est sous la rose.

Tircis, je n'ose etc.

わたしは厭ぢやチルシイス、
小楡が下で

お前の笛を聴くことは。

でも村中で此の頃は、

とかくの噂をするものを。

〔羊飼ふ子と深間になれば、〕

際さいどい目にも遭ふ心。

薔薇の裏には刺とげがある。(一)

(一) 括弧の中は後半の歌詞である。

私は此の歌の何處に自分を感動させるやうな魅力が潜んでゐるのかと考へて見る。それは私には解らない一種の氣紛れである。が、涙に遮られる事なしに、この曲を唱うたひ終はることは到底出來ないのである。歌詞の缺けた部分を誰か今でも知つてゐる人はあるまいかと思つて、幾度巴里へ手紙を出さうとしたか知れない。けれども此の歌の回想に伴ふ感興も、若しそれが傷ましい小母のシュヅンの外の人達までが唱つた歌だと知れたならば、その半は消え失せるだらうとも思ふ。これが私の生涯の門出に當つての最初の感情であつた。高慢に柔和を兼ねたこの心、女々しくてそれで不屈なこの性格が、斯うして形づくられ、若しくは現れ初めた。この心と性格は、常に弱味と勇氣との間を、放逸と徳操との間を往來して、全然私を自己と矛盾させ、禁欲と享樂、放縱と謹慎とを同様に、私から離れるやうにしてつたのである。

斯うした教育の徑路は、一つの出來事に妨げられた。其の結果に私の生涯は影響せられた。父は佛蘭西の陸軍大尉で、議員達に縁故のあるゴチエといふ人と喧嘩をした。ゴチエは卑劣で無恥な人物で、自分が負けたのを、父が往來で劔を抜いたのだと言つて、復讐の告訴をした。監獄に護送されようとした父は、法規どほり、原告も一緒に押送されることを固く主張した。希望が達

しなかつたので、父は名譽も自由も踏み潰されさうなのを忍ぶよりは、ジュネエヴを去つて生涯脱籍する方を選んだ。

(一) 一七二二年十月中の出來事。

私はジュネエヴの築城工事に出てゐる小父おぢベルナルの後見の下もとに居留つた。小父の姉娘あねは亡つたが、私と同一齡の男の子(二)が一人あつた。私とその子とは一緒にボセの宣教師ランベルシエ(三)の宅に塾生として預けられ、此處で羅甸語ラヂオンと、教育といふ名に附隨する色々な下らない事を教はつた。

(一) アブラム Abraham と云ふ。一七一一年十二月生。

(二) オト・サヴワの山麓に在る小さい村。當時はジュネエヴ領であつた。

(三) Jean-Jacques Lambercier. ジュネエヴのアカデミイに學んだ。一六七六—一七三八。

二年間の田舎住居で、羅馬風のごつごつした所は幾らか取れて、復た幼兒の狀態ありさまに戻つた。ジュネエヴでは何も言ひ附けられなかつたから、私は勉強と讀書とに耽つた。それが私の唯一の楽しみであつた。ボセでは苦學のために、息休めの遊戯を好むやうになつた。田園は私に此の上も無く珍しく、それを楽しむのを止めることが出來なかつた。これに對する嗜好は、永久に失せることが出來なかつた位強いものであつた。此處で送つた幸福な日の追懷は、その在舎、その愉快を、何時も私に偲しのばしめ、果ては再び私を其處に惹き附けるまでになつた。ランベルシエ氏は事理に明るい人で、私達への教育は抜け目なくしてゐて、それで無茶に課業を強ひるやうな事もしなかつた。教育法の良かつたことは、束縛嫌ひな私ですら、勉學の當時を想ひ出しても些とも不快に

思はず、博く物は教はらなかつたにしても、習つた事は樂に覺えて、而も少しも忘れなかつたのでも分る。

純朴な田園生活は、私の心を友情に目ざまして、測り知れない利益を與へてくれた。その時までの私は、思ひ上つた、しかも空漠な感情の外を知らなかつた。平和な状態で共同の生活を續けてゐる内に、從兄のペルナルと親しく結び附いた。暫くの中に私は嘗て兄に對して抱いてゐたよりも、一層情深い感情を彼に抱いた。そして此の感情は何時までも打ち消されなかつた。彼は背の高い、ひどく瘦せてひどく華奢な、身體が虚弱なだけ精神まで柔和な少年で、宅では私の保護者の令息として偏愛されるのを、そんなに鼻に掛けなかつた。私達の課業と娛樂と嗜好とは同じであつた。兩方とも獨法師で同じ蹄で、互ひに一人の友達が欲しい所であつた。二人が離れてゐるのは、二人とも死んでゐるやうなものだつた。互ひの愛着を見せ合ふ機はなかつたが、その愛着は非常なものであつた。片時も別々に居ることが出来なかつたのみでなく、何時か離れられるものとは想像もしなかつた。二人共人の親切に甘え易く、他から強制さへされなければ腰の低い方で、何事につけても兩方がびつたり合つた。監督する人達のお蔭で、縦し彼が其の前では私に對して或る優越を示しても、二人ぎりの時には私の方に優越があつて、それで平均が保たれた。勉強してゐて彼がまごつく場合には、私が勵ましてやつた。私が問題を濟まして了ふと、彼の分を助けてやり、娛樂の時には私の方が熱心なので、いつも先棒になつた。結局二人の性質がうまく一致し、二人を結びつける友情が眞實だつたので、ジュネエヴとボセとで、五年餘り殆ど一緒

にゐた間に、實際喧嘩も度々やつたが、二人を引分ける必要もなく、喧嘩も四半時と續いたことがなく、一度として吩咐け合ひをしたことがなかつた。こんな話は子供じみてゐるかも知れないが、兒童の間の事としては、恐らく珍しい例になるのである。

ボセでの生活状態は、如何にも私に相應しいもので、唯その時期がもう少し續きさへしたら、私の性格が全く固まるところであつた。温かな、しみじみとした、平和な感情が其の土臺になつてゐた。私はどんな人間でも、天性私よりも虚榮心の少いといふ者はあるまいと思ふ。私は興奮して崇高な態度になることがあつても、すぐ復た元の無氣力に落ちるのであつた。自分に近づくすべての人に愛されたい、これが私の一番強い欲望であつた。私は温和しかつた、從兄も然うだつた。保護者達も皆その通りだつた。まる二年の間、私は狂暴な感情に出會つたことも無く、その犠牲にもならなかつた。一切の物は、自然から得た私の心の特質を育んだ。私は人々が、私なりすべての事について満足してゐるのを見る程嬉しく思つたことはない。會堂の宗義問答で、私が答に行き詰まりでもして、ランベルシエ嬢の顔に不安と苦痛の色を見た時程、困つたことは無かつた。私はこれをいつも思ひ出すだらう。これだけは多勢の前で失敗る恥かしさよりも幾倍辛かつた。と言つてその失敗にもひどく心を痛めたのだ。といふのは、私は賞讀は氣にしないが、恥かしさが無上に氣になる質だからである。そして實のところ私はランベルシエ嬢に叱られるといふ豫想よりも、彼女に心配させるといふ懸念に惱まされたのである。

彼女とても兄と同じやうに、必要に應じて嚴格を忘れる人でなかつた。が、多くは正當な此の嚴格も、甚だしいまでには至らなかつたから、つらくはあつたが反抗はしなかつた。私は罰を受けることよりも、人に不快を興へるのがいやだつた。不満の色を眺める苦しさは、體罰以上だつた。もつとよく自分のことを説明するのは困るけれども、それをせずには置けない。大抵は無差別に或は不用意に行はれてゐる懲罰法の遠い結果が、もつと善く分つたら、少年に對する方法も改まることであらう。不幸なことだが亦世に有り勝ちな一つの事例に、大なる教訓が見出されると思つて、これを話すことに決心する。

ランベルシエ嬢は母の情愛をもつて私達に臨むと共に、又母の權威を帯びて、私達に不都合の所爲があると、兒童相當の罰を加へることもあつた。かなり長い間、彼女は嚇かす丈であつたが、私には珍しい此の罰の嚇かしは、餘程怕いものに思はれた。併しそれを受けた後は、豫期したよりも怕くないものと知つた。殊に不思議な事は、この懲罰は、それを加へた女に對して、今までよりも一層の愛情を感じしめた。のみならず、この愛情がごく潔白で、私の生來の溫和しさが十分でなかつたら、幾度も不都合を仕出來しては同じ懲罰を受けたがるのを止め兼ねたらうと思ふ。何故なら、苦痛の裡、羞恥の裡にすら、性欲が混じてゐて、同じ手で又しても懲罰を受ける怕さよりも以上の欲情を私に残したからである。其の中には疑ひもなく、早熟な性の本能が混じてゐたのだから、同じ罰を彼女の兄から受けたのでは嬉しくも何ともなかつたに極まつてゐる。併し兄の氣質から見て、此の代理も、そんなに恐れる程のものでなかつた。そして若し私がこの處分

に觸れないやうに自制したとすれば、それは一にランベルシエ嬢の不快を買ふことを恐れてであつた。といふのは、私の同情、而も肉感から生れ來つた同情の力が如何にも強くて、始終私の心の中で、その肉感を支配したからである。

此の再犯を私は怖れるでもなく遠ざけてゐたが、それが出來た。それは私の過失から、即ち意志があつてではなかつた。そして私はそれを利用したが、斷じて良心には恥ぢなかつた。が、此の二回目はやがて最後であつた。その譯はランベルシエ嬢が、何かの様子からこの懲罰も目的を達しなかつたと見て取つて、もうこれは止す、如何にも面倒だと明言したからである。その時まで私達は彼女の部屋に寝た。多なぞは彼女のベッドに寝た程だつた。二日後から二人は別の部屋に寝させられた。それからは有り難くもないのに、大供の取扱ひを受ける名譽を荷つた。

八歳の時に三十歳の婦人から受けた兒童の懲罰が、私の嗜好、欲望、欲情や、それ以後の私の全生涯を、而も當然に結果しなければならなかつたものは正反對の方へ決定したとは誰が信じよう。肉感が燃え出すと同時に、私の欲望の模様がすっかり變つて了つたので、その欲望は、私の經驗して來たものだけに限られて、その外の物を求めようとしなかつた。殆ど生れ落ちるから性欲に燃える血を持ちながら、ごく冷かな、ごく緩慢な氣質の發達する年頃まで、あらゆる汚穢から純潔に身を保つた。何とは知らず長いこと悶えた私は、眼を光らして美しい女達を飽かず眺めた。私は絶えず其の女達を想ひ出しはしたけれど、それは唯自分流儀に細工して、幾人ものランベルシエ嬢を造り出すために外ならなかつた。

年頃になつてですら、此の奇妙な偏向はいつまでも續いてゐて、墮落、狂愚にまで近づいたが、純潔な徳操を私から奪つて了ひさうで、却つて私を保護してくれた。若しも純良な教育といふものがあるならば、私の受けたのが正しくそれである。三人の小母は手本とすべき淑女達であり、又久しく婦人達に忘れられてゐた内端の人達でもあつた。父は歡樂の人であつたけれど、昔風の通人で、最も愛する女の傍でも、處女の顔を赧らめるやうな冗談を口にしたことはなかつた。で私の家庭ほど、私の前ほど、子供に拂ふべき注意の行き届いた處はなかつた。ランベルシエ氏の宅でも、此の點について私は同様の注意を見出した。大へんに善良な一人の女中が、私達の前で猥褻がかつた事を言ひ亘らした許りに、家を出された。私は青年期まで兩性の結合についてはつきりした觀念を持たなかつたのみならず、然うした曖昧な觀念は、私には忌まはしい不快な幻影としてのみ見えた。賣女に向つてはいつまでも消えない嫌惡の情を感じた。私は侮蔑なしに、否恐怖さへなしに遊蕩兒を見ることが出来なかつた。それ程私が遊蕩を嫌ふやうになつたのは、或る日抜け道からブチ・サコネへ行つて、あの人達は戯れてゐるのだと教へてくれた洞穴の兩側を目撃してからであつた。それを考へるといつも大の振舞が思ひ出され、此の回想丈で胸が悪くなつた。

是等の豫備教育は、それ丈で燃え易い氣質の最初の爆發を引き留めるのに適して居り、更に前にも言つた通り、性欲の目ざめから起つた彼の自慰に依つて補助された。惱ましい血の沸き立つにも拘らず、私は自分の經驗した事実を想像して、欲望を自分の知つてゐる淫樂と言つたもの

方へのみ向け、自分の嫌に思はせられた淫樂の方へは決して向けなかつた。而も私は全く氣附かなかつたのだが、此の淫樂は一方のものと極めて近いものであつたのだ。たはけた妄想や色情的の狂暴や、又それらの爲に度々引き込まれた不自然な行爲の場合に、私は空想上にこそ異性の補助を借りたけれど、その異性を、自分の熱心に利用してゐるより外の用をなすものとは決して考へなかつた。

それ故、熱烈な、淫縱な、早熟な氣質を持ちながらも、ランベルシエ嬢から無意識に教はつたものの外に、肉感の快樂を求めもせず、氣附きもしないで、私は春機發動期を経過したのである。それ許りでない、年が経つて成人となつてからも、私を破滅させる筈だつたものが、却つて私を保護してくれたのも、矢張それからである。以前の子供としての好みは消え失せるどころか、一方の好みと緊乎結び附いたので、何時までもそれを肉感に喚び起された欲望と引き離すことが出来なかつた。そして此の愚かさは、性來の臆病と合體して、一切を言つて了ふ事も出来ず一切を成し遂げる事も出来ないで、婦人に對して殆ど私を野心の無い者にして了つた。此の類の享樂——一方のものは私には唯最後の段階に過ぎなかつた——は、それを欲求する者も取ることが出来ず、又それを聴き入れる筈の女も推察する事が出来なかつたからだ。斯うして私は最も愛する女に對して、堪へられない思をしながら唯黙つて一生を過ごした。自分の思を打ち明かす事の出来ない私は、纔かにその思を私に持たせた親交丈で心遣りにした。慳貪な愛人の膝下に伏し、その命に聴き、その宥恕を乞ふ事が、私には一番快い樂みで、激しい想像に血が燃え立てば燃え立つ

だけ、いよく私は萎けた戀人のやうになつて了つた。斯う言つた戀の仕方は、進行も遅々としてゐて、對手の女達の徳操に對しても大した危険がない。だから得る所は殆ど無かつたが、それでも尙自分流儀の、即ち想像上の享樂は少からず得られた。つまり私の肉感が、臆病な性質や空想的な精神と結びついて、純粹な感情と純潔な徳操とを全うせしめたのである。そしてそれは、私がかう少し厚顔だつたら、甚だしい肉欲に私を投じたかも知れないその同じ嗜好の力に依つたのであつた。

私は自分の懺悔の茫漠とした、そして不潔な迷宮の裡に、先づ最も苦しい第一歩を進めた。告白に最も骨の折れるのは、罪惡の事件で無くて、莫迦げた事、極りの悪い事である。もう私は大丈夫だ。今迄のやうな事が言へる程なら、もう何物も私を妨げる事は出来ない。私は生涯中、幾度か愛する女に對して、目が眩み耳が聾ひ、一切の感覺を失つて、全身に強い痙攣を起す程の狂暴な欲情に逆上せながら、自分の心を打ち明けて、其の深い馴染の間で、未だ許されてゐなかつた唯一つの好意を彼女達に乞ふ決心さへ出来なかつた位だから、斯うした懺悔の私に取つての苦しさは、誰にも推察されようと思ふ。そんな事は幼時に唯一度同い齡の女の子との間にあつたのだが、それとても彼女がかまづ口を切つたのであつた。

斯うした感情的な私の生活の初の頃の事を顧みると、一見兩立しがたいやうであつて、それで一樣な單純な結果を力をこめて生み出す爲に、互ひに結合した要素が見出される。又外觀は同一であつても、或る事情の協力によつて、その間に何等の關係もありさうで無い、異なつた結合を

作つた要素もある。例へば私の魂の最も強い一種の氣力が、私の血の中に淫縱と柔弱とを注ぎ込んだと同一の源泉で養はれたといふことを誰が信じよう。この話題を離れないで、餘程異なつた印象が、それから出て來るのを見て貰はう。

ある日私は唯一人、臺所の次の間で日課を勉強してゐた。女中がランベルシエ嬢の櫛を燂燂の板の上へ乾して置いた。彼女がそれを取りに來て見ると、一枚の櫛の齒が折れて了つてゐる。誰の仕業とも知れない。私の外には室に這入つた者はないのだ。人々は私に訊す。私は櫛には觸れないと答へる。ランベルシエ氏兄妹は、共に私を諭す、迫りつ脅しつする。私は頑固に辯ずる。併し、確かに私の仕業と信じられてゐたので、私が斯う大膽に嘘を言ひ張るのは初めてだつたが、何と抗辯しても敵はなかつた。事態は眞面目に取られた。全くそれ丈の事はあつた。惡戯、虚言、強情、いづれも罰に相當するものと見られた。併し今度私を罰したのはランベルシエ嬢ではなかつた。手紙が小父おぢのベルナルへ行つた。彼は來た。憐むべき従兄も亦私より輕からぬ不都合の應で、二人は同じ罰の中に加へられた。それは恐ろしい罰であつた。若し彼等が被害その物の裡に矯正を求めて、私の腐敗した心を根絶やしする氣であつたとしたら、これに優る手段はなかつたらう。彼等は亦何時までも、私を無事にして置いた。

彼等は私に白状させることが出来なかつた。幾度も繰り返されたり、脅されたりしたけれども、私はびくともしなかつた。寧ろ死んでもいいと、然う決心した。皆が私の一徹を形容した通り、鬼の強情には、さすがの暴力も敵はなかつた。到頭私はぎざぎざになつて、併し勝ち誇つて此の

拷問から出て来た。

此の出来事から今日までに彼は五十年は経つた、そしてその罪でもう一度罰せられる恐れはない。善し！ 私は神の御前で、自分が無罪だつたこと、その櫛を折りも觸りもしなかつたこと、その傍へ近寄りもしなかつたこと、そんな事を考へてもゐなかつたことを廣言する。どうしてそれが折れたかを私に訊かないで欲しい。私は何も知らないのだし、合點も行かないのだ。私の確かに知つてゐる事は、自分がそれについて無罪であつたことだけだ。

不斷は臆病で柔順なのに、情が激すると、熱烈、傲岸、不屈になる一個の性格を想像し給へ。始終道理の聲に導かれ、常に溫和、公平、親切を以て取り扱はれてゐた一人の子供を想像し給へ、彼には不正の觀念すらなかつたのに、正しく自分の最も敬愛する人達から、生れて始めて非常に恐ろしい不正を経験する。何たる思はく違ひだらう。何たる感情の紛糾だらう。彼の胸の、彼の腦の、また彼の知的徳的小存在の全體の、何たる動亂だらう。出来得るならば一切を想像して貰ひたい。私には當時の心裡に起つた事の微細な跡を、解き且辿ることが出来さうにも思へない。

其の時分には未だ理性が發達してゐなかつたので、奈何して外観で罪を得たのかを考へたり、他人の地位に自分を置いて見たりする事は出来なかつた。唯自分の地位にのみみて、無實の罪に對する恐ろしい懲罰の苛酷さを感じずばかりであつた。肉體の苦痛は劇しくても、さほどに私は感じなかつた。たゞ、憤慨と忿怒と絶望とを感じてゐた。従兄も亦私と同じ工合で、知らずに犯した過失を、故意でしたもののやうに罰せられたので、私同様憤激して、謂はば私と同じ調子

にまで激昂して来た。二人は同じ寢床の中で、狂氣の如く抱き合ひ、互ひに息を塞げ合つた。若い心と心が鎮まりかゝつて忿怒を洩らすことが出来るやうになると、二人は勃然起き直つて、幾度となく力のかぎり、

「畜生！ 畜生！ 畜生！」

と叫び立てた。

斯う書いてゐても、私は尙脈搏の昂まるのを感じる。私が千萬年生き存へようとも、此の時の事は永く残るだらう。亂暴と不正とに對する此の最初の感情は、私の魂に深く刻み附けられて、それに関聯する考への總てにその激情が呼び醒まされるのである。そして元來私一人に關係したこの感情が、非常に強固なもの、個人の利害と離れたものとなつて、或る不正な行爲を見聞すると、それがどんな事でどんな場所に起つたものといふ區別なく、恰もその結果が自分の上に落ちて來るものやうに激昂する。暴君の殘虐や、惡辣な僧侶の非道を讀む度に、命を幾度失つても、その醜類を刺し殺して了ひたく思ふ。鶏や牛や犬などが、唯自らを強者と信ずる許りに他の動物を苦しめてゐるのを見ては、時々大汗になつてそれを追つ駈けたり、石塊を投げ付けてやつたりした。斯うした感激は私の天性かも知れない、又然うとは思ふが、初めて受けたあの不正の根深い追憶が、永く固くそれと結び着いて、餘程それを強めたものである。

幼年の生活の明るさは、此處で終を告げる。これから後は、純な幸福を楽しむことがなくなつた。今日でも、幼時の楽しさの思ひ出は、此處で行き止るやうに思ふ。私達は尙幾月かボセに滯

在した。地上の樂園にゐながらも、享樂を失つた人類の始祖ともいふべき形であつた。表面同じ境遇にゐながら、事實、その状態はがらりと變つてゐた。愛着も尊敬も親密も信賴も、最早弟子達をその指導者に結び附けなくなつた。私達は、最早彼等を自分等の心を汲み分けてくれる神々とは思はなくなつた。悪事を働くの餘り恥ぢなくなり、その代り叱られる事を益々怕がつた。物を置したり強情張つたり嘘を吐いたりし始めた。此の年輩の凡ゆる惡徳は、仇氣なさを傷つけ、遊戯を醜くした。田園までがしみくしたあの懐かしさと純朴の魅力を失つて、荒涼なものに見えて來た。恰もヴェエルでその美が掩はれてゐるやうであつた。私達は自分等の小さい園を耕して草や花を植ゑる事を廢して了つた。地面を掻き搜して、播いた種子の芽生を見附けて嬉しさに叫ぶこともなくなつた。私達は此のやうな生活に飽きて來た。人々も私達に飽きて來た。小父は私達を引き取つた。二人はランベルシエ氏兄妹と別れたが、互ひに飽き飽かれて、此の別離を名殘惜しくも思はなかつた。

ボセを去つて殆ど三十年の間、その土地での滞留を、幾らか連絡のある追憶によつて、愉快に思ひ出したことはなかつた。併し中年も過ぎて老境に入ると、その同じ追憶は他の追憶の消えると共に蘇り、美と力との日毎に増る筆致を以て私の記憶に刻みつけられる。丁度自分の生涯の去り行くのを感じつゝ、更にその發端を捉へようとしてゐるやうなものである。當時のごく微細な出來事も、それが其の時の出來事だといふ丈で私を喜ばせる。私はその場所、人物、時間のすべての状態を思ひ出す。室で働く下女下男、窓から飛び込む燕、日課を誦誦してゐる私の手に止る

蠅までが眼に見える。自分達の室の模様も然うだ。右手にランベルシエ氏の書齋、それに代々の法皇達の版畫、晴雨計、大曆、小高い庭園——その奥に家が引つ込んでゐる——から蔭を窓に投げ、時としては家の内まで匍ひ込んで來た苺の木。私は讀者がこんなことを知る必要のないことを知つてゐる。併し、私にはそれを話す必要がある。此の楽しい時代の、思ひ出してもぞく／＼嬉しい小さい逸話を、殘らず話して了へないのか。その中の五つ六つでも、……では私は五つともとは言はない、ほんの一つ丈でいい。その代り自分の樂みを長くするために、精一ぱい引き延して話させて貰はう。

諸君の樂み丈を考へるなら、私はランベルシエ嬢のお聲の話を選ぶ處なのだ。嬢は牧場の下で不幸な翻筋斗うつて、丁度通り掛つたサルヂニヤ王に裸出の所を御覽に入れたのである。併しそれよりも私に取つて面白いのは、高臺の胡桃樹の話だ、翻筋斗の場では、私は看客に過ぎなかつたが、高臺の場では、私自身が俳優だつたからである。それに實のところ、それ自體は滑稽的だが、私が母として愛し、若しくはそれ以上にも愛した婦人のために心配した災難を、假にも笑ひのめす言葉は出にくいのだ。

高臺の胡桃樹の大史譚を待ち兼ねてゐる讀者達よ、その恐ろしい悲劇を聽いて、若しも出來るなら戰慄しないで見て見給へ。

庭の戸の外の左手に高臺があつて、晝過ぎによく皆が息みに行つたものだが、樹蔭が全く無かつた。その蔭をつくるために、ランベルシエ氏は一本の胡桃樹を植ゑさせた。樹裁式は嚴肅に行

はれた。二人の塾生はその教父となつた。そして皆が土を冠せてゐる間に、私達は祝の歌を唱ひながら、片手で樹を支へてゐた。根の周圍には水を灌る盆地が掘られた。毎日從兄と私と二人が熱心に灌水を眺めてゐる中に、高臺に樹を植ゑるのは、穴に旗を挿すよりは立派な仕事だといふ甚だ自然な考が浮び、そしてこの名譽を誰にも分たず、二人限りで得ようと決心した。

で、私達は、嫩い柳の枝を切つて来て、その高臺の、彼の尊大な胡桃樹から八九尺の處にそれを挿した。その周圍にはまた盆地を掘ることを忘れなかつた。問題はどうして此處に水を満たすかといふことであつた。何故ならば、水は餘程遠くにあつて、其處まで汲みに行くことは許されなかつたからである。併し柳に水がなくてはならない。私達は二三日水を灌るために有らゆる策略を用ひた。その所爲でいい鹽梅に發芽する、幾らかの嫩葉も出て來たので、私達は絶えず行つて長を測つて見た。まだ一尺も延びないが、纏て吾々に蔭を作つてくれると喜んでゐた。

これに掛かり切りで、外の仕事も勉強もそつち除けて、無我夢中になり、私達が何をしてゐるのかが解らない爲に以前よりも一層嚴しく取り締られたので、水の斷れる一大事の瞬間が目に見えて來た。従つて吾々の樹の枯死するのを見る事と心痛した。到頭必要といふ分別の母は、樹と私達とを蘇らせるやうな工夫を授けてくれた。それは、胡桃樹に灌つた水の一部を、柳の方へ竊然引いて來るために、地下に溝を造るといふ事であつた。熱心に取り掛つたが、この企は最初思ふやうに行かなかつた。傾斜の工合が拙くて水が流れない。土が崩れて溝を塞いだ。溝の口は泥で詰まつた。散々である。だが私達は落膽しなかつた。「執拗なる勞作は一切に打ち克つ。」水

の流れるやうにと、益々地面と盆地を掘り下げた。箱の板を細く切り裂いて、その幾枚かを順次に平らに列べ、その上へ兩側からまた細板を寄せ掛けると、三角形の水管が出來た。細い木を何本も管の口へ透して挿し込むと、格子か芥止めのやうなものが出來て、水路を塞がないで泥や石を堰き止めた。私達は十分固めた土工を注意深く覆うた。出來上つた日には、樂みやら心配やらで灌水の時間を待ち受けた。百年も待つ中にその時間がやつて來た。ランベルシエ氏も例の通り手傳ひに來た。その間二人は彼の背後で、自分達の樹を隠してゐると、幸ひ彼は背後を向けてゐた。

(1) Labor omnia vincit improbus. ヴァルジールから出た諺語。

第一の手桶の水を胡桃樹に灌つたと見る間もなく、その水が私達の盆地へ流れ込むのが見え始めた。それが眼に入ると謹みは何處へやら。思はず歡喜の聲を立てたので、ランベルシエ氏は振り返つた。彼は胡桃樹の地質が如何にも良くて、存分水を吸収するのを見て大喜びであつたものを、残念な事をした。水が二つの盆地へ分れると見るや、今度は彼が叫ぶ。よくしらべて見て惡戯を見附ける。すぐ鶴嘴を持つて來させて一と撃突れる。板切二三枚匆ね飛ばす。そして大聲に、

「水道だ！ 水道だ！」

と呶鳴りながら、片端から用捨なく叩き壊す。その度毎に私達の胸はぎくり、ぎくりした。瞬く間に、細板、溝、盆地、柳、一切掘り返されたが、此の恐ろしい征伐の間、彼は一言も言はず、唯續けさまに、

「水道だ！ 水道だ！ 水道だ！」
と叫ぶばかりであつた。

此の事件が、小さい技師等の爲に良くなかつたと思つては誤りである。此の事はそれ丈で済んだ。ランベルシエ氏は一言も譴責を加へず、厭な顔もせず、それ切り何も言はなかつた。暫く経つと妹の傍で高笑ひさへしてゐた。彼の笑ひ聲は何時も遠くまで聞えたのである。殊に驚くのは、始めの恐ろしさを通り越した私達が、けろりとしてゐた事である。私達はまた一本の樹を植ゑた。そして「水道だ！ 水道だ！」と力を入れて互ひに繰り返しながら最初の悲劇を幾度も思ひ出すのであつた。私が時折アリスチッドやブリュチュウスとしての己惚れに取り着かれたことは今までもあつたが、是に至つて私の虚榮心は著しく現れた。自分達の手で水道が造れたといふこと、大木の向うを張つて壓條を挿したといふことは、私には無上の光榮と思はれた。十歳の私は三十歳のセザアルよりも一層正しくその事を判断したのである。

胡桃樹の事とその物語とは如何にも善く覚えて居り、思ひ出されもしたので、一七五四年のジュネエヴ旅行の最も楽しい目的の一つは、ボセを訪ねて幼時の遊びの記念物、殊に一世紀の三分の一をも経たと思はれる懐かしい胡桃樹と再會することであつた。私は絶えず邪魔を受け、我が身で我が身が自由にならない爲に、望を果たす機會を見出し得なかつた。然ういふ機會が又とありさうに思へない。それにも拘らず私は希望を失はない。そして萬一私が何時かあのなつかしい土地に歸つて、まだ生きてゐる懐かしい胡桃樹を見たら、必と自分の涙で瀧水するに違ひない。

(一) ルソオ四十二歳の六月、妻のテレエズや友人ゴクウルと同道で行つた時のこと。

(二) この樹ルソオの没後尙四十八年の齡を保つたといふ。

因に、この頃の事で、ルソオが「エミル」の中で楽しさうに書いてゐる一つの逸話がある。こゝに載せてルソオが省略した物語の一部を補ふ。

「従兄のベルナルは格別臆病だつたが夜は殊に甚だしかつた。私はひどく彼の恐怖を笑つてゐたので、ランベルシエ氏は私の眞言に飽きて、私の勇氣を試さうとした。ひどく暗い或る秋の晩、彼は會堂の鍵を私に渡して、講壇の上に忘れて来た聖書を取りに行つてくれと言ひつけた。私の名譽心を、る爲に、あとへは退けないやうなことで附け加へて言つた。

私は燈火もなしに出て行つた。燈火があつては尙いけなかつたであらう。私は墓場を遁らなければならなかつた。私は勇んでそこを通りぬけた。それは、戸外にある限り、私は決して暗夜を恐れなかつたからである。

扉をあけると、一種の反響が天井に聞えた。何だか聲のやうに思つた。それで私の羅馬人的の頑張りがかぐらつき出した。扉があいたので、私は這入らうとしたが、五六歩行くか行かない中に立ち止つた。このがらんとした建物をこめてある深い闇を見て、私は恐怖に捉はれ、髪の毛が悚立つた。私は震へながら踵を返して外へ出て逃げ出した。庭でシュルタンといふ小犬を見つけたが、その犬が私にじやれるので、やつと安心した。自分の恐怖に恥づかしくなつて、私は背をかけた。今度はシュルタンを連れて行かうとして骨を折つて見たが、ついて来てくれなかつた。急いで扉をあけて會堂に這入る。這入るや否や又しても恐怖が、しかもひどく私を捉へたので、私は氣を失つて了つた。そして、講壇は右手の方にあるのに、又その事はよく知つてもあるのに、それに氣附かずに向きをかへた爲に、長い間左手の方を探し廻り、腰掛の間をうろたへ廻り、もう何處に居るのかも分らなくなつて了つた。講壇も扉も見附けることが出来ないで、全く私は名狀の出来ない程動揺して了つた。詞頭扉口を探り當てて、やつと會堂を出て、初のやうに立ち去つた。でなくては二度と此處へは這入るまいと覺悟をきめて。

私は家のところまでやつて来た。中へ這入らうとすると、私はランベルシエ氏の高らかに笑つてゐる聲を聞きつけた。

自分を笑つてゐるな、と先謀りする。その前へ笑ひ物になりに行くのが極りが悪くて、扉をあけかねてゐる。その間にランベルシエ嬢が私のことを心配して、女中に提燈を持つて来るやうに言ひつけてゐる。ランベルシエ氏は、私の勇敢な従兄を連れて私を探しに来ようとしかけてゐる。此の探検の名譽の全部がこの従兄の方へ行つてしまはずにはゐないところであつた。忽ち私の一切の恐怖が去り、唯だ逃げて来た所を見附けられてはとの恐怖だけが残つた。私は會堂へと走つた、いや飛んで行つた。迷ひ子にもならず、盲投しもしないで、私は講壇の處へ来る、それへ上る、聖書を取る、扉を降る、三足ばかり飛んで會堂の外へ出る、扉をしめることさへ忘れて了つて。私は息を切らして室に這入り、聖書をテエブルの上へ投げ出す、顔色は變はつてゐたが、豫定されてゐた救助の先を越してやつた嬉しさに胸をどきどきさせながら。」

ジュネエヴに歸つて二三年間、私は身の振り方の極まるまで、小父の家で過した。小父は息子(一)を技師に仕上げる積りで、製圖を少し習はせ、又ウクリッドの初歩をも教へた。私も一緒に皆それを稽古した。面白い、製圖が殊に面白い。併し彼等は私を時計師か、代證人か、宣教師か、にしようと考へてゐた。私は宣教師になりたかつた、説教することが如何にも立派な事と思はれたからである。が、母の財産からの少しばかりの収入を、兄弟二人で分ければ、私の修業を續けるのに不足であつた。齡が齡で、未だ此の選擇を急ぐ必要もなかつたので、唯ぢつと小父の家で何の所在もなしに滞在し、而も當然とは云へ、可なり高い宿料まで拂つてゐた。

(一) 一七二四年の末。

小父も父と同じ歡樂の人で、義務の爲に自制することを知らなかつた。だから私達のこととは殆ど構はなかつた。小母はまた本物の信神家で、私達の教育に注意するよりは、讚美歌でも唱つて

るようといふ女であつた。皆私達をまるきり自由にさせて置いたが、私達は決して附け上りはしなかつた。始終離れられない私達は、互ひに満足し合つて、同じ年頃の悪戯者等と遊び耽る氣にもならず、閑散に伴ふ放逸の癖にも染まらなかつた。閑散といふのからして、穩當で無い。生涯中、これよりも閑散でなかつたことがないからである。而も幸ひと吾々の没頭し續けてゐた遊戯が、いづれも室内に吾々を引き附けたので、私達は街に出たいといふ氣すら起らなかつた。私達は鳥籠、笛、珮、太鼓、家、突鐵砲、大弓などを拵へた。祖父の眞似をして時計を拵へるためにその道具を壞した。紙を塗りくつたり、圖面を引いたり、着色したり、繪具を費ひ散らすのが殊に面白かつた。其の頃ジュネエヴへ、ガムバ・コルタといふ伊太利亞の香具師が來た。一度觀に行つた丈で、それから行かうともしなかつたが、私達はその人形に似せて人形を造つた。香具師の人形は茶番狂言を演つたので、私達も自分の人形に嵌めて茶番を作つた。向う見ずに伊太利亞茶番の聲色を使つて、此の面白い狂言を演じた。それを氣の毒な、人の善い一家の人達が、辛抱して觀たり聴いたりしてくれた。と、ある日小父のベルナルが家族を寄せて、自分の立派な説教を讀み聞かせたので、私達は茶番を打ちやつて説教の仕組に取りかゝつた。斯うした小話の面白くもない事は分つて居る。併し、こんな年若で、何をしても勝手でありながら、それを濫用する氣が殆ど無かつたために、私達の教育がどれ丈正しく施されたかといふことをそれ等が示してゐるのである。私達は友達をこしらへる必要が更に無く、それを拵へる機會すらも心に留めなかつた。二人で散歩に出て、子供が遊んでゐても羨ましくも思はず、仲間に這入らうとも思はな

かつた。友情が盛んに互ひの胸に満ちてゐて、二人一緒に居さへすれば、平凡極まる事も無上の快樂となつたのである。

(一) 前に出たダヴィド。一六四一—一七三八。

二人が始終離れない爲に、人々は注目した。從兄の圖抜けて背高なものと、私の背低とが妙な組合せになつたので一層注目された。彼のひよる長い姿、燒芋のやうな小さい顔、ぐにや／＼した様子、力の抜けた歩き振が子供達の嘲笑を買つた。方言で彼にバルナ・ブレダン(二)と綽號を附けた。外へ出れば、八方からバルナ・ブレダンとばかり囃し立てた。當人は私よりは餘程平氣でゐた。私は癩に觸つて喧嘩を買つた。それは小孩童等の望む所であつた。私は闘つて負かされた。可哀さうな從兄は一生懸命私に加勢した。併し、尪弱い彼は、拳固一つでぶつ倒された。それが復た私を狂ひ猛らせた。が、私は酷い殴打を受けたものの、彼等の殴りたいのはバルナ・ブレダンの方であつたのだ。けれども私は自分の強情な立腹のために、益々詰らない事にして、子供等が學校に居る間なくては、罵られ逐つ掛られようかと思つて、街に出ることが出来なくなつた。

(二) サワワの方言。間抜けな驢馬の義。

私も既う昔の義侠の武士だ。これで一人の貴婦人さへあれば正式の騎士だ。私はそれを二人持つてゐた。私は始終父に會ひにヴォオ州の小都會ニヨンへ出掛けた。父は人望があつたので、子の私までが其の恩恵に浴した。父の傍で暫く滞在してゐる間に、誰にもちやほやされた。中にも

ヴェルソン夫人といふのが無上に可愛がつてくれた。未だお負けにその娘までが、私を自分の情人にしてつた。二十二歳の娘に十一の小僧の情人もないものだと思ふだらう。が、すべて斯うした媚婦たちは、小さい人形を表に飾つて、大きな奴を匿して置いたり、人を惹きつけるやうな遊びの眞似事で、大きいのを誘惑することが得意なのだ。併し、彼女と自分との不釣合に氣附かない私は、それを眞面目に解つた。私は胸全體を以て、否むし頭全體を打ち込んだ。といふのは、私は狂氣になる程戀ひもし、失神や、興奮や、激情で、捧腹絶倒の光景を呈したけれど、唯頭で戀してゐる丈のことであつたからだ。

私は二種の甚だ明瞭な甚だ眞實な愛を知つてゐる。どちらも力強く、又兩方とも優しい友情とは違つたものだが、二つの間に毫も共通の點がない。私の全生涯は、こんなに相違した二種の愛の間に分たれた。しかも兩方を同時に經驗したことさへある。此の時のも現にそれで、ヴェルソン嬢への瀾り方がいかにも公開で、獨占的で、他人が彼女に近寄るのを黙つて見てゐられない程だつたにも拘らず、別に小さいゴトンといふ娘と、手短だが熱烈な密會をしてゐた。その時彼女は學校の先生の積りであつた。唯それ丈の事であつた。が、それ丈の事が、實際私に取つては凡ての物なので、無上の幸福と思はれた。それに私は最早秘密の價值を知つてゐたから、縦しそれを子供として利用しただけだつたにしろ、それとは知らないヴェルソン嬢へ、他の戀愛關係を匿す爲に私を弄んだ復讐をした。併し惜しいことに秘密は見露された、寧ろ私よりも「學校の小先生」の方がよくそれを守らなかつたのである。間もなく二人の仲は引き分けられた、暫くしてジ

ユネエヴへ歸つてクタンヌ通りを通つて行くと、小娘どもが小さい聲で「ゴトンとルソオとちんちんよ。」と私に言ひ掛けるのを聞いた。

此の小さいゴトン嬢は實際風變りな女であつた。美しくもないのに忘れ難い顔をしてゐた。今でも老耄おぼろに不似合な程度々思ひ出す。殊にその眼は、年輩や背恰好や擧止おきなに似合はないものであつた。彼女はその資格に最もふさはしい威嚴のある高慢な風采をしてゐた。これが元で二人の間に第一印象が成立つたのである。尙まだ彼女の變つてゐた點は、大膽と小心とが分りにくく入り交つてゐたことである。自分の方からは馴れ／＼しくしかけて來ながら、私には決して然うはさせなかつた。まるで私を子供扱ひにした。これは彼女がもう子供ではなかつたからか、それとも反對に、彼女の陥りはまかけてゐた危険を、遊び事とのみ思ふ程に彼女自身が矢張子供だつたからか、孰れかだらう。

私は謂はば二女ふたりの兩方へ溺れ切つて了つて、片方と會つてゐれば、片方の事は少しも心に無かつた位であつた。それでゐて二女ふたりから受ける氣持に、些とも似た點が無かつた。ヴェルソン嬢とは離れる氣も起らずに生涯を共にしただらう。併し、その傍へ寄ると、嬉しさは平穩で、激情は起らなかつた、殊に私は多勢の場所で彼女を愛した。その冗談もお世辭も、嫉妬までもが私を惹き付け、私の心を動かした。大きな競争者共を刎ね付けて、彼女が私をちやほやするので、私は誇り貌に凱歌を揚げた。私は惱ましく思つたが、其の惱ましさが好きであつた。喝采、激勵、艶笑は、皆私を熱せしめ、元氣附けた。私は激動し、興奮した。人中では戀に夢中になつたけれど、

差し向ひでは萎縮して、冷くなつて、退屈もしただらう。併し、私は彼女に對して心から同情した。彼女が病氣でもすれば心配して、其の健康を恢復する爲には、自分の健康を棄てて了つたかも知れない。私が病氣とか健康とかいふものを、經驗から善く知つてゐたのは注意すべきことである。彼女から離れてゐると、私は彼女の事を思つて、何となく物足りない。眼の前に居れば、其の愛撫が沁々と胸に感かたへたが、肉感にくかんは動かさなかつた。私は清い交りをしてゐた。私の空想は、彼女の許す範圍の外の事を要求しなかつた。それなのに、他の人々にも同じやうに許すのを見ては堪へられなかつた。私は弟として彼女を愛した、併し戀人として彼女を妬んだ。

ゴトン嬢に對しても、若し彼女が私に許したと同じ取扱ひを他の人々にもするのだといふことを、唯想像丈でもする事があつたら、私は土耳格人トルコのやうに、惡魔のやうに、又虎のやうになつて嫉妬したであらう。何となれば、それ丈の恩恵でも、跪いて哀願しなければならなかつた程のものであるからだ。ヴェルソン嬢に接すれば強い悦びはあるけれど、不安は感じない。ところが私はゴトン嬢を唯見た丈で、目が眩み、前後を忘れた。私はヴェルソン嬢とは隔ではありながら馴れ／＼しくしてゐた。反對に、ゴトン嬢とは親密の頂上に居ても氣がわく／＼した。此の女と永く一緒に居ようものなら、私は生きてゐられなかつたかも知れない。動悸が息を止めたかも知れない。私は二女ふたりの不快を買ふことを、同じやうに恐れた。併し一方に向つては主にも歡心を求め、片方に對しては主にも従順に努めた。何物に換へても、決して私はヴェルソン嬢の機嫌を損じたくなかつた。と同時に、若しゴトン嬢が火の中に飛び込めと命ずるなら、私は立ちどころに

従つたであらうと思ふ。

ゴトン嬢との戀、寧ろ密會が、暫くで中絶したのは、彼女にも私にも幸福であつた。ヴェルソンの嬢との關係は、それ程危険でも無かつたが、幾らか永く續いた揚句、やはり悲劇に終らずにはゐなかつた。斯ういふ事の末は必と小説じみて、喝采の種になるものである。ヴェルソンの嬢との交際は、比較的平穩であつたが、恐らく一層親密であつた。私達は別れる度に、涙を落さないことはなかつた。彼女を見棄てた後、私はどんな切ない物足りなさに落ちたと思つたらう。私は彼女の事でなくては、話すことも考へることも出来なかつた。私の哀惜は眞劍であり熱烈であつたけれども思ふに、此のエロイックな哀惜も、その實彼女に對してのみでは無く、自分は氣附かなかつたが、彼女を中心にして居た娛樂といふものが、その中の少からぬ部分を占めてゐたのである。二人は孤獨の悲みを慰める爲に、岩をも砕く哀切な手紙を取り交した。遂に彼女は堪へられなくなつて、私に會ひにジュネエヴへ來て呉れるといふ名譽を私は荷つた。それで私は氣が變になつて了つた。彼女の滞在二日間、私は酔ひ痴れてゐた。彼女が發つて行く時、私はその跡を追つて、水に飛び込んで了ひたかつた。そして私の叫ぶ聲は、永く空に反響した。一週間して彼女はボンボンと手套を送つてくれた。それと同時に、彼女が結婚した事、又私を出しに使つた今度の旅行が、婚禮の衣裳を買ふ爲であつたといふ事を知らなかつたら、其の贈り物はどんなに氣が利いて見えたであらう。私の憤激は書かなくても察せられよう。私は貴い忿怒の裡に、此の不實な女に二度と逢ふまいと誓つた。それ以上の怕い罰が思ひ附かなかつたのである。併し彼女はそ

の爲に死にはしなかつた。その譯は斯うだ。それから二十年も經つて、私が父に會ひに行つて、二人で湖水に遊んだ時、私達の舟の近くの端艇ボートに見つけた婦人を誰かと訊くと、父は笑ひながら、「どうしてだ、思ひ出せないのか。あれはお前の昔の愛人だ。クリスタン夫人と云つてヴェルソンの嬢のことさ。」

殆ど忘れてゐた此の名前に私はぎよつとした。けれども船頭に言ひ附けて舟の方向を換へさせた。復讐するには好い機會ではあつたが、心の誓を破つて、今更四十女と二十年も昔の言ひ争(二)に花を咲かせるでもあるまいと考へたからである。

(一) 瑞西の小説家テップヘル Rodolphe Töpffer (一七九九—一八四六) は、ヴェルソンとルソオとの戀物語から「恐怖 La Peur」と題する愉快な小説を書いた。

斯うして身の振り方の極まるまで、兒童期の貴重な時間が、詰らない事で經つて了つた。長いこと私の性質を考へ廻した末、人々は私に一番不適當なものに極めて、市の公證人マスロン氏に預け、其處でベルナルの謂ふ溜め込み屋(一)の重寶な職業を仕込むことにした。此の綽號が無上に厭(二)だつた。卑しい手段で金を溜め込むといふ希望は、私の氣位の高い性質を悦ばさなかつた。仕事は懶(三)くて堪へられなく思はれた。精勤と束縛とに到頭へたばつて了つた。日に日に高まる恐怖を抱かすには、役場へ出た事がなかつた。一方ではマスロン氏がまた私に不服で、のろ間だ、莫

迦だと口小言の絶え間なく、見くびつた待遇をした。小父が此の子は物が解る、物が解ると請け合つて置きながら、事實は何も解らないではないか、伶俐な子を約束して置きながら、こんな驢馬を寄越して、と毎日のやうに私への繰り言だ。到頭恥かしくも無能だといふので役場から送り還された。そしてマスロンの書記等には、書類を持ち運びするより外に能の無い奴だ、と言はれた。

(一) Grapignan. 代詩人 (Procureur) に附けた綽號。

私の天分はこれで見極めが附いて、弟子奉公に遣られた。それは併し時計屋へでなくて、彫刻師の處へであつた。公證人の輕蔑に私はひどく惱めて、不平を言はずにそれに従つた。師匠のデユコマンは、粗野な荒々しい若者であつた。彼はまたたく間に、悉皆私の幼時の輝きを曇らし、愛らしく生き／＼してゐた私の性質を鈍くし、境遇と精神と兩方で、紛れもない徒弟にしてつた。羅旬語も、古代學も、歴史も、長いこと忘れて居た。羅馬人が此の世に居たといふ事すらも思ひ出さなかつた。父に會ひに行つても、彼は最早自分の偶像を私に見出さなかつた。貴女達に對しても、私はもう優男のジャン・ジャアクではなくなつた。ランベルシエ氏兄妹も、私を彼等の教へ子とは思はなからうし、私も顔を合すのが極り悪くて、到頭それなり彼等と會はずに了つた。一ばん陋しい嗜好と、一ばん下卑た惡戯とが、仇氣ない娛樂に取つて替つて、少しもその考を残さなかつた。教育が正しかつたにも拘らず、著しい墮落の傾向が私にあつたものらしい。如何にも急速に、何の苦もなしに墮落して了つたのである。あれ程早熟なセザアルも、斯う早くラ

リドンになり下りはしなかつた。

(一) Abel Ducommun. 一七〇五—一七一。ルソオは、一七二五年四月から五年間この人の處に預けられた。

(二) セザアル及びラリドンは、共にラ・フォンテヌの「教育 / Education」と題する寓話の中に出る兄弟の犬の名。セザアルは勇猛でラリドンは柔弱である。兄弟共に立派な勇猛な犬の子であつたが、ラリドンは教育を誤られて墮落するやうになつた。寓話の終に、一人は必ずしも其の祖先や父を越ふものでない、放任と時とは全く人をして墮落せしめる。本性と天賦とを磨くことを怠るが爲に、悲むべき哉、幾許のセザアルどもがラリドンと成り下ることぞ。」とある。

仕事その物は厭でも無かつた。製圖は大好きであり、鑿を弄るのも面白かつた。時計彫刻の技術は程度の知れたものだから、立派に卒業出来る見込があつた。師匠の亂暴と過度な束縛とが、仕事を厭がらせなかつたら、多分私はその目的を達したらうと思ふ。私は時間を竊んで、同じ仕事でも自分の好きな事をするのに使つた。自分や友達の騎士の勳章にするメダル類を彫刻した。師匠は此の内證の仕事を見附けた。そしてメダルには共和國の徽章が附いてゐたので、貨幣を贗造してゐたのだと言つて、私を打擲した。贗造貨幣などといふ考の無かつたことは言ふまでもない。本物の貨幣といふ考も殆どなかつたのだ。今の三スウ錢よりも、羅馬のアアス錢を拵へるのを知つてゐたぐらゐるものだ。

師匠の壓制は好きになる筈の仕事をも辛く思はせ、嘘や不性や盗みのやうな、元々嫌ひである筈の惡徳に染ませて了つた。子としての依從と奉公人としての隸屬との相違を、此の頃私の上に起つた變化の回想ほど、はつきり教へてくれるものはない。生得臆病で内氣な私は、鐵面皮とい

ふ事には何よりも遠ざかつてゐた。併し正當な自由を保つてゐた。今迄それが少しづつ拘束されてゐた丈だつたが、是に至つて遂に全く消え失せた。私は父の家では放膽であり、ランベルシエ氏の家では自由であり、小父の家では控へ目であつた。今此の師匠の處では物怖れをするやうになつた。そしてそれから後私は墮落兒になつて了つた。今迄の生活の有様では、目上の人達とは全く平等で、自分の關係し得ない娛樂といふものを知らず、分配にあづからない食物を見ず、發表の出来ない欲望は無く、一切の感情を口にする習慣になつてゐたのである。それがこんな家へ來て私は奈何なるだらう。迂闊に口を利く事もならず、飯ももつと喰ひたい處で止めなければならず、用がなくなると直ぐ室を出なければならず、仕事には縛られ通して、樂みは他人ばかりのもの、それが出来ないのは自分ばかり、師匠や仲間の自由さうな様子に、自分の束縛の重味が加はり、誰よりも自分の得意な話題にも口が出せず、何も彼も奪り上げられてゐる許りに、何を見ても羨ましくなるのである。暢氣、快活、頓智は何處へか去つた。此の頓智ゆゑに今まで私に過失があつても、罰を免れたものであつた。思ひ出して笑はずにゐられない話は、或る晩父の家で悪戯をした爲に、夕飯を喰はないで寝て了へたと叱られたことがあつた。情ない麵包一切を搦んで臺所を通つて行くと、金串で焙つてゐる焼肉が鼻を唆つた。皆は爐邊にゐた。通りがかりに皆に挨拶をしなくてはならない。一巡済まして、こんがり然も旨さうな焼肉を眼尼で竊と視ると、これにも敬意を表しない譯に行かなかつた。で、哀れつばい調子で、

「焼肉さん、お寢み。」

此の無邪氣な諧謔が如何にも面白いといふので、その場で私は夕飯を喰べさせて貰へた。此の師匠の家でも、やはり同様の饒倅に有り附けたかも知れない。併し確かにそんな頓智は浮ばなかつたであらう、又そこへ心を向ける勇氣もなかつたであらう。

然ういつた原因から、私は黙つてゐて物を欲しがり、人眼を晦まし、表面を伴り、心にも無い事を言ひ、終には盗みすることまで覺えた。盗みは今迄に思ひつかかなかつた事で、又此の後癒り切らなかつたものである。渴望と無力とは、大抵こんな結果になるものだ。奴僕がすべて猜いは皆これから来る。徒弟とても同様である譯なのだが、此の方は、成長して平等な平穩な境遇に立ち、何事も心に任せるやうになれば、この恥かしい癖は無くなる。然ういふ境遇にも會はなかつた私は、到頭そのやうな好結果をも得ずに了つた。

善い感情を悪く導びくから、子供は大抵悪の方へ踏み出すのである。引き續く不自由と誘惑とに堪へて、一年以上私は物を盗む心になれないでゐた。食物さへその通りであつた。私の最初の盗みは、他人を喜ばす爲にした事であつた。が、それが元で、他の褒むべき理由もない盗みを出すやうになつた。

師匠の家にヴェラといふ雇職工があつた。近所のその男の家には、ずつと離れて畑があつて、見事な石刀柄が出来た。金に不自由してゐるヴェラは、此の初物の石刀柄を母から盗んで、それを賣つて旨い飯を喰はうと企んだ。自分で手を出すのは厭だし、餘り機敏な方でもなかつたので、私を手先に使ふことにした。豫備の追従で、その目的を知らない私を釣り込んで、ふと浮んだ思

ひ附として私にそれを勧めた。私は強く反対したが、肯かない。媚に抵抗の出来ない私は負けた。毎朝私は、ごく良ささうな石刀柄を取りに行つた。それをモラルへ持つて行くと、盗んで来たのだと知つた内儀さんが、廉く買はうと思つて、盗品だらうと言つた。私はぎよつとしながら、向うの呉れる丈の錢を受取つて、ヴェラに渡した。その金は朝飯に早替りした。膳立ては私がして、喰つたのは彼とその友達とであつた。私は残物を貰つて大喜びで、彼等の酒にすら手を附けなかつた。

斯うして四五日もこそ悪い事をしてゐたが、泥棒の泥棒をしてやらうの、ヴェラから石刀柄の儲けの上前を取らうのなどは思ひ附きもしなかつた。私は正直一圖にこそ泥をやつてゐた。それを言ひつけた人を喜ばすのが唯一の目的であつた。だが若し私が捕まつたら、毆打や侮辱や虐待のかずかずを私が受けないで済んだらうか。それに引きかへてあの卑劣漢は雇職工であり、私は徒弟の分際で、彼の言ひ抜けは誰にでも信用されるのに、私は人に罪を捺り附けたといふ廉で、二重の罪を背負はなければならなかつたらう。罪有る強者が罪無き弱者を踏みつけて、自ら免れるといふことは、何れの場合でも斯うしたものだ。

私は斯うして、盗みするといふことが、想つた程怕いものでないといふ事を覚えて了つた。難て私は、自分の経験を十分に利用した爲に、私の渴望する物は一つとして無事でゐなかつた。私は師匠の家で、一概に粗食ばかりさせられはしなかつた。主人が無暗に贅澤するのを眺めた時でない以上、節制を辛いものとは思はなかつた。子供の欲しがりさうな物が食卓に並ぶ時、その子

供を寄せ附けない習慣が、彼等を小盗人にも貧食者にもするものと確かに私には思はれる。間もなく私はその兩方の人間になつて了つた。そして不斷はそれで旨く行つたが、見附かつた時は酷い目に遭つた。

今でも慄然とするが、又可笑しいのは林檎盗みの話だ。中々高價くついたのである。その林檎は貯藏室の下の方にあつた。そこへは高い格子の隙間から、臺所の光線が射し込んでゐた。或る日唯一人家に居た時、私はエスベリッドの園にある、近づく事の出来ない貴い果物を眺めるために、煉盤の上に登つた。金串を探して来て、届かして見たが短か過ぎる。もう一本小さい串をつぎ足して見た、これは師匠が銃獵が好きで、獵つた小禽を刺すのに使つたものである。幾度も突いて見たが成功しなかつた。縄と一つ引つ懸つた時の嬉しさはなかつた。私はそれをそうつと引き上げた。林檎がもう格子に觸つたから掴まうとした。残念々々。林檎は大き過ぎて隙間を通らない。これを引き出すのにどんなに工夫しただらう。この儘で串を支へる物が要る、林檎を割る長い庖丁とそれを受ける板が要る。苦心を重ねた結果、まんまと割ることが出来た。今度は一つづつ引き出すまでである。ところが二つに割れたと思ふと同時に、兩方とも貯藏室へ入り落ちた。同情ある讀者は私の苦みを察して下さい。

(一) エスベリッドはアトラアス神の三女の名。其の園に黄金の林檎が實るのを、百頭の龍に番をさせて置いたところ、エルクニルが来て奪ひ取つたと云ふ話。

私は力を落さなかつた。けれども時間が大分経つたので、見附かつては大變と、嬉しい未遂犯

を翌日まで延ばして置く。そして何をしたかといつた風で、しやあ〜と仕事に取りかかる。私の爲に不利な陳述をする貯藏室の中の不謹慎な二つの證據物の事は考へないで。

翌日好い折を見附けて、また遣り始める。脚榻へ乗つて串を差し延べる。狙ひを付ける。今しも突つ刺さうとすると……生憎龍は眠つてゐなかつた。不意に貯藏室の扉が開く。腕組みしてぬつと出た師匠が、ぎよろりと私を見る。そして私に、

「やい……」

ベンが手から落ちさうになる。

懲て酷な取扱ひが重なるに連れて、私の神経も鈍つて行つた。然うした取扱ひは、盗みに對する一種の代償と思はれた。そして盗みを續ける權利を私に與へた。顧みて罰を考へる代りに、進んで復讐を考へた。竊盜として私を撲つのは、つまり竊盜をしてもいいといふのだと判断した。盗むことと撲たれることは伴つてゐるものだ、謂はば一種の商賣になつてゐるのだ。自分はずかり自分の役目をしてゐれば、師匠は亦勝手に自分の役目を果すだらう。斯う思ひ附いて前よりは一層平氣で盗みに取り掛つた。私は自問自答した。

「後はどうなるだらう。撲たれるだらう。いいさ、どうせおれは撲たれる役廻りなのだ。」

私は大食はしないが喰ふことが好きだ。感覺的だが貪りはしない。いろ／＼の嗜好でその慾が紛らされたのである。心の閑な時の外は、口に氣を奪られることはなかつた。それにその閑な時が、私の生涯に然う多くはなかつたから、旨い食物を思ふやうなことは稀であつた。だから私は

何時までも食物ばかり盗んでゐないで、何でも欲しい物に手を出すことになつた。それで私が本物の盗人にならなかつたのは、餘り金に目が眩れなかつたからである。工場の中に別室が一つあつて、鏡前が下してあつた。私はその戸を竊と開閉する方法を見附けた。其處で主人の上等の道具や、上等の製圖や、製版や、その外私の欲しがらうなもので私に見せまいとしてゐた品物を捲き上げた。結局この盗みは全く無邪氣なものであつた。主人の仕事に使ふために盗んだ譯だつたのだ。唯私は然ういふ物が自分の手に歸した喜びで夢中になつた。私はその製作物と一緒に技術をも盗んだやうな氣がしたのである。別に金や銀の切屑、小さな寶石、貴重品、貨幣などが匣に這入つてゐた。私の衣兜には五錢か十錢もあつたら關の山だ。それにも拘らず、そんな物品に手を觸れたことは勿論、決してそんな物を欲しさうに眺めたこともない。然ういふ物を私は樂みよりも怖れをもつて見てゐたのである。金や、金になる物を盗むことの恐ろしさは、大部分教育から來たことと思ふ。其には、恥辱、牢獄、刑罰、刑具などの念が潜んでゐて、誘惑されると共に、私を顛へさせた。それに私の所業は、ほんの冗談としか自分に思へなかつた、實際亦それに相違なかつたのである。此の事は、師匠からお目玉を戴く位で濟む筈のもので、私も豫ねてその覺悟をしてゐたのである。

併し、もう一度言ふが、私は自制しなくてはならない程にも物を欲しがらなかつた。私は抗爭すべき何物をも感じなかつた。たつた一枚の圖引用紙の私を誘惑することは、その紙の一連を買へる金よりも遙かに勝つたものであつた。斯うした風變りは、全く私の性格の異常な處から來て

ある。これは非常に私の行爲に影響したものであるから、説明して置く必要がある。

私には激しい熱情がある。これに煽られてゐる間は、何物も私の狂暴に比すべきものがない。その時の私は、もう自制も、分別も、恐怖も、禮節も知らない。無恥で、厚顔で、過激で、大膽である。羞恥を物ともせず、危険をも恐れない。思ひ詰めてゐる唯一つの目的物を外にしては、宇宙も私に取つては物のかずでない。併しそれはすべて一瞬間しか續かない、次の瞬間には私は自失に陥る。平穩な時の私はどうか。不性と臆病其の物である。一切の事物が私を驚かせ厭がらせる。蠅が飛んでも怖い。一語言ふのも、一寸身動きするのも私の怠惰を脅かす。世の中の人の眼から、掻き消えて了ひたい程、他人が恐ろしく恥かしい。何事をかしくなくてはならない時は、何をしていいのかわからない。話をしなくてはならない時は、何を言つていいのかわからない。人に顔を見られるとどきまぎする。情が熱すれば、言ふべき詞を見出せないこともないが、座談の場合には、何も浮ばない、まるきり浮ばない。話をしなくてはならないといふその事で、もう座談が堪へられないのである。

附け加へて置きたいのは、私の一番の嗜好は、孰れも金で買はれる物でないことだ。純な享樂でなくては欲しくない、金は一切を濁らせる。例へば私は會食の享樂が好きだ。が併し、上流社會の窮屈さも、料理屋の放逸も私には堪へられない。一人の友人とでなくては會食の味を知ることが出来ない。なぜなら、自分一人ではそれが出来ない、その時は私の想像が外の事に走つて、喰ふことの樂みが解らないからである。燃え立つ血は私に女を要求しても、興奮した感情は、そ

れよりも戀を要求する。金で買へる女は私に取つて魅力が無い。此女を己が役立てるのか、とさへ疑はれる。私の手の届く限りの樂みは皆此の通りで、無代價で無い限り、索然たるものとなる。私は本當に味ひ得る人だけに與へられる物のみを愛するのだ。

金は他人の思ふ程に貴いものとは私に思へなかつた。のみならず大した便利な物とも思へなかつた。金は其の儘では何の役にも立たない、形を變へなければ値打は出て來ない。物を買つたり、値切つたり、時には瞞されたり、貪られたり、莫迦を見たりしなくてはならない。上等の品物が欲しいと思ふ、金を拂へば必と悪い物を掴む。新しい鶏卵を高く買ふ、陳い。良い果物を買ふ、青つたれてゐる。若い女を買ふ、摺れ枯らした。美しい酒が飲みたい、が何處で買はう。酒屋でかどうしたところで毒を飲まされる。是非其上物が欲しいとする。その心配やら面倒やら。それ友人だ、取引店だ、口錢だ、手紙だ、出掛けるわ、來るわ、待つわ、と騒ぎの末が、大抵やつぱり瞞されるのだ。金の爲に何といふ苦勞だ。美しい酒は好きでも、此の苦勞がたまらない。

徒弟の頃も、それから後も、旨い物を買ふ積りで幾度出掛けて行つたか知れない。蒸菓子屋の店先に立ち寄れば、店臺には女が居る。何だか此の喰ひしん坊の小僧を嘲笑し合つてゐるやうに見える。水菓子屋の前を通つて、水の垂るやうな梨子を流眈に視る、その匂が身に沁みる。傍で二三の若者が私を眺めてゐる、見知り越の男が店にゐる。向うから一人の娘が來る、あれは自宅の女中ではないか知ら。近眼の私はいろいと思ひ惑ふ。道行く人々が、みんな自分の相識のやうな氣がする。何處へ行つても私は氣おくれがしたり、何かの邪魔で尻込する。極りが悪いと思

ふ程、欲しさが増さる。そして到頭欲しさに燃えて痴呆のやうになつて歸つて来る。衣兜の中にはそれを充たすべき物を入れてゐながら、何も買ふことが出来ないで。

自身にしる、他人に頼んでしる、何時も自分の金を使ふ際に経験した當惑や、羞恥や、嫌悪や、不便や、不快やを一々述べ立てたら、無趣味極まる話に這入らなければならぬ。自傳が進んで讀者が私の性質を理解するやうになれば、然ういふ事を私がうるさく話さずとも、すつかり分つて来るだらう。

それが分れば、謂はゆる私の自己撞着の一つ、即ちそれ程金錢を卑しみながら、一方でひどいしみつたれだつたことが容易に理解される。金は私に取つて不便千萬なものである。だから、無ければ決して欲しいとも思はないし、有つても使はずに長く仕舞込んで置く、これは好きな様に使ふことを知らないからである。併し、自分の氣に入つた場合に出會せば盛んに使つて、何時の間にか財布が空になつて了つてゐる。だが、見得に金を振り撒く守銭奴の慣用手段と思ひ給ふな。それとはまるで反對に、私は人の見ない處で、享樂の爲に使ふのである。人に見せびらかすところか、隠してするのである。私は、金は自分に用の無いもの、それを持つのも恥づかしい位で、それを自分に役立てるのは更に恥づかしいことだと思つてゐる。若し私に、樂に暮しの出来る丈の収入があつたら、決してけちん坊にはならなかつたらう。収入の有りたけ使ひ切つて殖やさうなどとは思はなかつたらう。ところが不安定な私の身の上は、私に心配させ通しである。私は自由を崇び、束縛、苦勞、屈從を惡む。財布に金のある中は、獨立が保證される。新たに儲ける

心配が無くて済む。その金儲けが私の嫌ひの事なのだ。が、金のなくなるのが恐ろしさにそれを握つてゐるのだ。所有してゐる金は自由の具である。求める金は屈從のそれである。だから、私は金を握り込んでゐて、その外を羨望しないのである。

だから私の無慾はつまり怠惰なのである。金を持つ樂しさは、儲ける苦勞を値しない。私の浪費もやはり怠惰に外ならない、面白く使へる機會に遇へば、幾らでもそれを利用していいのだ。私が物よりも金に目が眩れないのは、金と欲しい物の所有との間には距離があるけれども、物と享樂との間にはそれが無いからである。物を見れば誘惑されるけれど、物を得る媒介物だけを見たとて誘惑はされない。だから私は小盗人だつたのだ。今でも尙詰らない物に誘惑されると、乞ひ求めるよりは盗む方がいいと思つてそれをやる事がある。と言つて、私は小さい時にも大きくなつてからも、他人から一厘の金も盗んだ覚えはない。唯一度、十五年足らず前に金を三圓竊んだ事がある。これは一つ話す價值のある事と思ふ。其の時の厚顔と無智とは、若し他人に關係した事だつたら、私にすら信じられない話だからである。

それは巴里での事であつた。私は五時頃にフランクイユ氏とパレ・ルワヤルを散歩してゐた。彼は時計を出して見て、私に「オペラへ這入りませう。」と言ふ。私も望むところだから、二人で行つた。彼は正面棧敷の切符を二枚買つて、一枚を私に呉れ、一枚を持つて先に行く。私は隨いて行く、彼は這入る。私もその迹から這入らうとすると、木戸口が混雑してゐる。見ると人々は立つてゐる。この群集の中なら私は身を隠すことが出来る、少くともフランクイユ氏に私が紛

れて了つたものと思はせることが出来ると思つた。私は出て来て合札を受け取り、それから切符代を返して貰つて出て了つた。木戸口まで来た時には、既う看客が席に着いて了つたことも、フランクイユ氏が私のもう居ないのを判然知つたことも思はなかつたのである。

(一) ルソオの知己。第七巻以後に詳しく出る。

此の舉動ほど、私の氣質に似合はない事は無いのだから、それを此處に書き附けて、人には誰でも心を取り亂す事があるもので、其の時は行爲に依つて人を判断してはならないといふことを示さうと思ふのである。これは決してその金を盗まうとしたのでなく、金の效用を盗まうとしたのであつた。盗みでなければ無いほど愈々醜惡だつた。

私が徒弟で居た間に、英雄の崇高から無頼漢の陋劣まで、私の通つた道筋を残らず繰り返さうと思へば、こんな話は切りがあるまい。が、私は境遇相應の悪事は働いたけれど、全くそれに染まることは出来なかつた。私は仲間の娯樂が面白くなつた。そして餘り酷い束縛が仕事をいやがらせる時に、私は何物も面白くなつた。斯ういふことから、久しく忘れてゐた讀書の興味が再び還つて来た。此の讀書で仕事がそつち除けになつて、それが新たな罪となり、新たな罰を招いた。禁止の反動で、此の興味は欲望から激情とまでなつた。名高い女の貸本屋のラ・トリビュは、色々な書物を貸してくれた。善いも悪いも言はないで、片端から貪り讀んだ。仕事しながらでも、使ひに行く途中でも、便所の中でも讀んで、長いこと時間を忘れて了つてゐた。これに逆上せて了つて、讀むことより外に何もしなかつた。師匠はこれを嗅ぎ附けて、私を取り押へ

て、私を撲つて、本を取り上げた。どのくらゐの本が壊され、焚かれ、窓から投げ棄てられたか。どのくらゐ汚損してトリビュの手許に戻つたか。彼女に拂ふ金が無くなると、私はシャツやネクタイや、着物を渡した。日曜毎に貰ふ六錢の心付けも極まつて彼女の處へ行つた。

さあ金が入用になつて来たと言ふかも知れない。如何にも然うだ、が、それは讀書がすべての活動を奪つて了つた時のことである。新たな興味に溺れた私は讀書の外の何事もせず、もう盗みもしなかつた。此處にも私の特異性の一つがある。或る生活上の習慣の眞最中に、些末な一事が私の魂を奪ひ、氣を變へ、私を惹き附けて、終には熱中させる。そして然うなれば一切は忘れられてゐる。自分の思ひ入つた其の新奇な目的物の外は考へない。衣兜に持つてゐる新しい本を翻りたさに、胸がわく／＼する。一人になるのを待ち兼ねて本を取り出し、もう師匠の室を掻き捜すことには思はない。一層金のかゝる欲望を持つてゐたからとて、私が盗みをしたらうとは思へない。現在の瞬間に執着する私の心の中には、然ういふ事をして後の準備にしようといふ考は起らなかつた。ラ・トリビュは本を掛金貸にしてくれたし、前金ならば僅かなものであつた。私は書物を衣兜に入れて了へば、もう何事も考へなかつた。自然に這入る金は亦自然にこの女の手に渡つた。催促を受ければ唯自分の持物にだけ手を掛けた。前以て盗んで置かうといふ先見がある筈もなく、支拂の爲に盗むことは誘惑にもならなかつた。

喧嘩と毆打と祕密の濫讀とのために、私は無口に、交際嫌ひになつて了つた。頭は荒んで来て、私は非社交家らしく暮らした。それでも、縦し私には卑俗淺薄な書物を斥ける程の趣味はなかつ

たとしても、僥倖は淫猥放縱な書物から、私を守つてくれた。それはラ・トリビュが何事にも機轉の利く女だから、然ういふ類の書物を貸すことを躊躇した譯ではない、然ういふ書物の値段を高くする爲に、それを祕密らしく名ざすので、私は羞恥と不快を感じて、斷らなければならなかつたのだ。それに、偶然が好い工合に私の内端な性質を助けたので、三十歳以後でなくては、そんな危険な、社交界の美婦人達が片手でしか讀めないで困つてゐるやうな、危険な書物に目を觸れなかつた。

一年経たない間に、貧しいラ・トリビュの書庫を漁り悉した。それから後は仕事が無くて無聊に苦しんだ。讀書の興味乃至は讀書に依つて、腕白小僧の惡戯は治つた。讀書には選擇も加へず、時には不良の物もあつたけれど、それでも私の境遇が與へたよりも、遙かに高尚な感情の方へ私の心を引き戻した。手近の物一切が厭はしくなり、誘惑されさうなすべの物が、自分とは餘り離れてゐるやうな氣がして、もう自分の心を喰るに足るやうな物を一つも認めなくなつた。長らく興奮して居た肉感、對象の何であるかも知れない一種の享樂を要求した。私は性の無い人のやうに、現實の對手とも離れてゐた。早や年頃にもなり、情を解するやうになつた私は、時には持前の癖の事を考へてみたけれど、それ以上の何物をも求めなかつた。斯ういふ奇態な状態である間に、平かならぬ私の空想は一轉して身を全うし、發動し始めた性欲を鎮めた。即ちそれは、讀書の間に興味を覺えた色々な境遇を集め、それを回想し、形を變へ、結び合せて、それを我が物とする事であつた。その結果私は空想中の一人物となり、自分の好みが一番楽しい地位に、自



十六歳のルソオ

分を見出し、今しも我が身を置いてみた小説的の境涯に、不満な現實の境涯を打ち忘れた。此の空想の事物を愛すること、それに没入する容易さとは、一切周囲の物を厭はせ、此の後永く私を孤獨を好む人にして了つた。この性向の奇妙な結果は、後に一度ならず現れて来るだらう。此の性向は表面厭世的な陰氣なものだが、事實は、餘りに情深く、やさしく、しほらしい心から來るもので、唯それに類する實物を見出し得ない爲に、餘儀無く小説を借りたのである。茲では唯此の性癖の起源と第一原因とを示す丈で満足する。この性癖は私の一切の欲情を調節し、又欲情と欲情とで相殺させて、熱望の強過ぎる餘りに、實行に及んで常に私を萎縮させたものなのである。

斯くて私は十六歳になつた。その間何物にも又自分にも、不安不満で、境遇相應の興味が無く、年齢相當の愉快がなく、標的もない欲望に耽り、謂はれなしに啜り泣き、何とは知らず溜息し、終には我が周圍に、然うしてやる程の物も見ないので、自分の幻像を可愛がつてゐたのであつた。日曜日には説教が濟むと、友達と一緒に駈け歩かうと言つて連れ出しに來た。出来る事なら、私はその仲間から脱け出したかつたのである。併し一度遊び仲間に入つて了ふと、私は一番熱心になつて、誰よりも遠くへ行つた。動かすことも、阻めることもむづかしい、それが何時の場合にも私の特質であつた。皆と郊外を歩いて、誰か注意してくれる者がなければ、歸る事を忘れて始終先頭に立つて行つた。私は二度歸れないことがあつた、市の門が私の歸り着かない前に閉まつたのである。翌日私は諸君が想像する通りの罰を受けた。そして二度目の時に酷い罰が豫告

されたので、この次こそもう冒険はすまいと決心した。それ程恐れてゐた其の三度目がやはりやつて来た。私の警戒を無効にしてつたのは、忌々しいミヌトオリといふ隊長で、自分の當番の門をいつも外より三十分も早く閉めたのである。私は友達二人と歸つて来た。市から半里の處で歸市の合圖を聴き附ける。歩調を速める。太鼓が鳴る。脚の限り駈ける。息は苦しく、汗はびつしより、心臓は鼓動する。向うに番兵が見張つてゐる。また駈ける。私は切れかゝる息の下から叫ぶ。もうそれは遅かつた。哨舎から約二十歩の處で私は第一の吊橋の上るのを見る。私はその恐ろしい喇叭——此の時から私に付き始めた避けがたい運命の、不吉で因果な前表——を空に仰いで身顛ひする。

最初の口惜しさ紛れに、私は斜面地に打ち倒れ、地面を齧んだ。友達は、自分達の不運を笑ひながら直ぐに腹を極めた。私も覺悟は極めたが、それは人と異つてゐた。其の場で私は、二度と師匠の家へは歸るまいと心に誓つたのである。翌朝、開門の時刻に、彼等が市に這入つて行く時、私は彼等に永の暇乞をして、唯從兄のベルナルに、自分の決心と、最後にもう一度私に會へる場所とを、竊と知らせて貰ふやうに頼んだ。

徒弟に這入つてから彼とは一層離れて、會ふ折が少なくなつてゐた。それでも暫くは日躍に出會つた事もあつたが、互ひにいつしか別々の習慣がついて了つて、無沙汰がちになつてゐた。此の變り方は多く彼の母親から来たのであらうと思ふ。彼は「山の手」の若檀那だし、みじめな徒弟である私は、サン・ジェルヴェの小僧に過ぎなかつた。生ひ立に拘らず、もう二人は平等でなか

つた。私に接近する事はその品位を墮すやうなものであつた。それにも拘らず、互ひの関係は、全く斷れても了はなかつた。その上性質の善良な少年で、母が何と言つても、時々は自分の良心に従つた。私の決心を聞き知つて、彼は駈け附けて来た。私の決心を翻へさせるのでもなく、共にするのでもなく、私が自分丈の旅費ではあまり遠くへ行けないので、些し許りの餞別を呉れて、私の出奔に承認を與へに來たのであつた。その中に劔が一口あつた。私はこれに目を無くして、トリノまで持つて行つたが、其處で必要に迫られて、身を切られる思ひで人手に渡して了つた。後になつて、此の危機に際しての彼の素振を考へてみれば見る程、益々彼がその母の差金、どうかすると父の差金に従つたのだといふことを考へさせられる。自分自身の考なら、私を引き留めようと骨を折るか、私に隨いて來る氣にならない筈はないのに、そんな事は更になかつたからである。私の氣を轉じさせないで反つて勵ました。そして、私の決心の極まつたのを見た時は、澤山涙を零さずに立ち去つた。其の後二人は文通もせず、再會もせず^(三)に了つた。残念なことだ。性質の本當に良い少年で、私とは愛し合ふやうに出來てゐたのだ。

(一) ジュネエヴの山の手は富豪の住宅區域で、下町は中流以下のそれである。サン・ジェルヴェは其の下町の一區。

(二) ルソオの逃亡は一七二八年三月十四日のこと。

因果な運命に落ちて行く前、一度眼を轉じて、若し私がつと善い師匠の手に入つて居たら、奈何いふ運命に迎へられたであらうかを、見たいものだ。平穩で表立たない或る階級の平凡な技術者の境遇、例へばジュネエヴの彫刻師、と云つたやうな境遇ぐらゐ、私の氣質に相應しい、自分

を幸福にするものはなかつたのである。樂な生計を立てて行く丈のものはあり、かと言つて金満家になれさうもない然うした境遇は、生涯私の野心を制限したであらうし、又適度な趣味を開発するために相當の餘暇を與へて、私をその領分内に引き留め、その外に出る手段を與へなかつたであらう。どんな境遇でも幻影で裝飾することの出来る程豊富な、又謂はば自分の好きなやうに、此の境遇から彼の境遇へと自分を運んで行くことの出来る程力強い想像力を有する以上、實際の境遇が何處だらうと問題ではなかつた。自分の居る地位から第一の蜃氣樓まで容易に移つて行けない程遠い筈はなかつた。その理由だけで、極く簡素な、苦勞心配のごく少ない、ごく自由な心地で居られるやうな境遇が、一番私に相應しいものであつた。そしてそれがまさしく私のものであつたのだ。私はわが宗教、わが祖國、わが家族、わが友達の眞中で、趣味に適した仕事と我が心に合つた社交との一致の裡に、自分の性格が要求する、平和な、樂しい生涯を送つたであらう。私は善良な信者、善良な公民、善良な父、善良な友人、善良な職人、すべての物について善良な人間であつただらう。自分の境遇を愛し、且尊んだであらう。そして表立たない簡素な、併し平等で樂しい生活を送つた後、骨肉の胸に安らかに死んだであらう。疑ひも無く少時の中に忘れられても、少くとも人々の記憶にある間だけは惜しまれたであらう。

それとは似も附かない……何といふ光景を私が見せる事だらう。あゝ自分の生涯の慘狀を見透してしたくはない。私は此の痛ましい題に就いて、今に厭といふ程讀者を煩はすであらう。

第二卷

一七二八—一七三一。【十六歳—十九歳】

恐ろしさに逃亡を思ひ立つた時は悲しく思はれただけ、そのを實行した時は、樂しく思はれた。齡も行かないのに、我が祖國、親族、保護者、頼りも資源も見棄て、暮らして行ける丈の職を覺えない内に徒弟を見限り、抜け出す手段も知らずに恐ろしい不幸の中に飛び込み、軟弱な、無智な齡頃で、惡徳と絶望との誘惑に近づき、災難と過失と陥穽と束縛と死とを遠く求めようとて、とても堪へ切れないやうな頑丈な首枷を背負つて行く。それが私のしかかつてゐた事であり、又私の出會さねばならぬ前途であつたのだ。それに私は何といふ異なつた前途を描いてゐたものだらう。わが物になつたと思つた獨立は、私を動かす唯一の感情であつた。自主自由の私は何事でも出来て、何物でも得られるやうに思つた。飛び立ちさへすれば、大空を翔り得られるのであつた。私は易々と廣漠な世界へ道入つて行つた。自分の才能でその世界を満たすつもりだ。一歩一歩に私は饗宴や、財寶や、僮倖や、自分の爲に盡さうと待ち構へてゐる友人や、自分を喜ばせようと焦心つてゐる愛人を見出さうとした。自分が現れたら、全世界が占領出来るものと思つたが、世界の全部でなくても可い、それは無くても済む、私にはそんなに廣くは要らない。面白い一つの社交界が、それ以外の煩累なしに私を満足させてくれる。私の謙遜は自分が確かに其處の流行

つ兒になれるやうな、狭いけれども氣持よく選擇されたサアタルに私を配當した。唯一と構への別荘が私の大望の頂上であつた。その領主と奥方との寵臣で、姫君の戀人で、その兄弟の友人で、その隣人の擁護者でさへあれば満足なので、それ以上は自分に必要がなかつた。

斯うした謙遜な未來を頼みにして、數日の間、市の周圍を彷徨いた。知合の農家で宿を借りて廻つたが、いづれも市の人達よりも懇ろな待遇をしてくれた。歓迎するにも、宿を貸すにも、飯を喰はせるにも、全く無邪氣で恩には着せなかつた。それは施與をするのだとも言へなかつた。彼等には尊大の風が無かつた。

あちらこちら歩き廻つた末に、私はジュネエヴから二里離れた、サヴワ領のコンフィニオンまでやつて來た。此處の司祭はボンヴェルといふ人であつた。共和國史で有名な此の名前は、少からず私を動かした。「スプウンの士たち」の子孫が奈何なつたかを私は知りたかつた。私はボンヴェル氏に會ひに行つた。彼は親切に私を待遇して、ジュネエヴの邪教や、聖母教會の權威について話して聞かせ、それから御馳走をしてくれた。斯ういふ結論に達した議論に對して、私には彼これいふべきことはなかつた。そして、こんな好い待遇をしてくれる司祭達は、郷里の宣教師達にも劣らないものと思つた。彼は紳士でも、確かに私の方が餘計物を識つてゐた。けれども私は立派な神學者であるには、餘りに如才無い賓客であつた。それに旨く思つたフランジ酒が、主人に代つて文句を言はせないまでに説き伏せて了つたので、私はこんな有難い主人を言ひ負かしては極りが悪い位だつた。で、私は讓歩した。少くとも面と向つては反對しなかつた。此の際

の私の控へ目を見て、虚偽だといふ人があつたら、それは誤りだ。私は唯禮を重んじたただけだ。それに違ひない。迎合、寧ろ謙讓は、必ずしも惡徳ではない。多くの場合、殊に若い人々に在つては一つの美德である。恩惠を施す人には、誰でも惹きつけられる。讓歩するのはその人を欺くのでなくて、その人の氣を損じない爲である、善に對して惡を酬いない爲である。ボンヴェル氏が私を迎へて懇切に待遇し、私を説得しようとしたのは何の爲だ。一に私の爲だ。私の若い心が然う驕いた。私は此の善人に向つて、感謝と尊敬とを禁じ得なかつた。自分の優越を感じつつも、それを振り廻して彼の款待に返禮しようとは思はなかつた。此の行爲に偽善的な考は少しもなかつた。私は信教を改めようと思はなかつた。然ういふ考に親しむどころでなく、無暗にそれを恐ろしいものと見てゐた。その恐ろしさが、此の考を永く私から斥けたかも知れなかつた。ただ私は、其の意見で自分を可愛がつてくれる人の感情を損じないやうにと望んだのだ。私はさういふ人達の好意を育て、そして自分は、實際よりも警戒を弛めたやうに見せかけて、成功の希望を彼等に持たせようとしたのだ。此の點で私の過失は、丁度貞節な女が、自分の目的を果たす爲に、何物をも許さず、何事をも約束しないので、心にもないことを言つて喜ばせる時の媚態に似てゐた。

(一) 昔のサヴワは今日サヴワ縣と、オト・サヴワ縣とに分れて、共に佛蘭西の管轄になつてゐるが、元はサヴワ公國と云つて、シチリヤ島までも含んでゐた。そのシチリヤは、一七二〇年即ちルソオが八歳の時、西班牙領であつたサルヂニヤ島と交換になつて、當時のサヴワ公グイットリオ・アマデオは、同時にサルヂニヤ王と稱することになつた。今の伊

太利亞のトリノ、ノヴァラ、アレツサンドリヤ及びクネオの四州を包括するピエモンテ地方は、即ち此のサルヂニヤ王國の主要部を成すもので、トリノは王國の首府であつた。又、今日のサヴワ縣の首邑はシャンペリで、オト・サヴワ縣の首邑はアマシである。是等の地方はいづれもルソオが漂泊の舞臺である。

(二) Bouché de Pontverre. この時七十五歳位。サヴワ公の家臣である「スプウンの士たち」の後である。「スプウンの士」と云ふのは、サヴワの敵であるジュネエヴ人を、スプウンで食つて了ふのだと壯語してゐたところからいふ。

理性と慈悲と、本分の愛とは、私の無分別を承認するどころか、私を家庭へ送り返し、私の落ちかゝつてゐる破滅へ私を近づけないことを要求したに違ひない。本當に有徳の人なら、誰でもさうしたであらう。若しくはさうしようと努めたであらう。併し、ボンヴェル氏は善良な人ではあつたが、確かに有徳の人ではなかつた。却つて偶像に禮拜し、念珠禱を事とする外に、何等の道義をも知らない盲信者であつた。唯ジュネエヴの宣教師達に對して惡宣傳をすることのみを、信仰のための最善の事と思つてゐるやうな、つまらない傳道者であつた。私を家に送り還すことは考へないで、却つて、私が家に歸りたくなつても歸れないやうに、家から離れたく思つてゐるのを利用した。彼は私を窮地に陥れるか、無頼漢に墮落させるか、二つに一つとなつた。彼の思つてゐたのはそんな事ではなかつた。邪教を脱して公教に歸依した一人の信者を見てゐたのだ。私が彌撒に出さへすれば、それが正直者だらうと無頼漢だらうと構ひはしなかつた。とにかく斯ういつた考へ方を、加特力教徒に特有なものと思つてはならない。すべて、行爲よりも信仰に重きを置く獨斷的宗教の常である。

「神様のお召しだ。」ボンヴェル氏が私に言つた。「アマシへ行きなさい。彼處には善い情深

い夫人がゐられる。その方は王様のお世話で、自分の死れた罪から他の人達をも救つてやらうとしてゐられる。」と言ふのは新たに改宗した、ヴァラン夫人の事であつた。事實は此の夫人がサルヂニヤ王から受けてゐる八百圓の年金を、折ふし信仰を賣つた細民等と分けるやうに、僧達が追つてゐたのである。私は善い情深い夫人といふやうなものに頼るのを屈辱のやうに思つた。必要品を貰ふのは有り難いけれど、慈善を受けるのは厭だ。それに信心者といふのが餘りぞつとした。い。けれどもボンヴェル氏の勧めと言ひ、責め立てる飢渴と言ひ、それに旅行をして何物かを得る樂しさに、強ひて決心してアマシへと發つ。一日で十分行ける處を急がないで三日費した。道の左右に別荘があれば、其處には旨い事が自分を待つてゐるものと信じて、必と搜しに行つた。私は臆病だから、中へ這入る事も、扉を敲く事も出来なかつたが、ここぞと思ふ窓の下で唄を唱つて見た。ところが案外千萬、長い事喉を哽らして、友達に教はつた素敵な唄を素敵に旨く唱つたのに、その美しい聲と洒落れた文句に惹かされねばならぬ筈の奥方も姫君も姿を見せなかつた。到頭アマシに着く。ヴァラン夫人に會ふ。生涯の此の時期が私の性格を決定したのである。それを軽く看過ごすことは出来ない。この時私は十六歳の半ばに在つた。美少年とは言ひにくいが、小柄で恰好が良く、綺麗な足、華奢な脛、暢びりした姿、元氣ある顔、可愛い口、黒々とした眉毛や頭髮、目は小さくて窪んではゐても、私の血を燃す焰を閃めかしてゐた。不幸にも私は、全くそれらのものに氣附かないであつた。生涯自分の容姿を思つて見た事もなかつた、それに氣の附いたのは既う何の役にも立たない時であつた。斯うして私には此の年頃の臆病の上に、始終人

の機嫌を損じることを苦にする情に脆い天性からの臆病もあつた。のみならず、可なりに練れた才智はあつても、未だ世間見ずで全く儀式作法を知らない。而も知識は此の缺點を補はないで、反つてそれを私に自覺させ、更に更に臆病にするのみであつた。

それ故この初対面は有利に終る氣遣ひはないと思つて、別に取り柄をこしらへた。演説口調で一篇の美文を作り、書物の中の佳句やら、徒弟の用語やらを織り込んで、ヴァラン夫人の氣に入られるやうに、自分の文才の有り丈を發揮した。それと一緒に、ボンヴェル氏の手紙を封じ込んで、恐ろしい目見得にと出掛けて行つた。ヴァラン夫人は居なかつた。聞けば今教會へ行かれたといふ。その日は一七二八年、復活祭前の日曜日であつた。私は彼女の跡を追つて行く。彼女を見る。駐け寄る。言葉を掛ける……。私はその場所を憶ひ出さずにはゐられない。それ以來私は幾度となく、其の場所を涙で濡し、接吻で被うたのである。私は此の楽しい場所を、黄金の高欄で取り廻はすことが出来ないのか。此處へあらゆる世の人の禮拜を集め得られないのか。救世の記念物を尊重したい人達は、皆必ず跪いて此處に近寄るべきだ。

それは彼女の家の背後の細徑であつた。右手には小流が家と庭園とを割り、左に中庭の土塀があつて、その門を抜けると、聖フランシス教會への道が續いてゐる。門を潜らうとしかけたヴァラン夫人は、呼ぶ聲を聴きつけて振り返る。一目見た私は、どうなつたであらう。私は整め面をした信心凝りの媼さんを心に描いてゐた。ボンヴェル氏の謂はゆる善い夫人は、私にはそれ以外の何者でもあり得なかつたのである。今見たのは、愛嬌の漲つた容貌、優し味を湛へた美しい

青い眼、眩しい許りの顔色、妖艶な襟頸である。何物も此の年若な改宗婦人の素疾い一瞥を逃れ得なかつた。私は忽ち彼女に擒はれた。こんな傳道者の説く宗教なら、人を天國に導く事疑なしと思つたのである。私が顫へる手で差し出した手紙を、彼女は微笑みながら受け取る、開く。ちよつとボンヴェル氏の手紙に眼をくれた儘、復た私の文に眼を移して讀み終つた。若し下男が入場の時間の來たことを知らせなかつたら、もう一度それを讀み返したところであつた。

「まあ、お前さん。」震へさせるやうな調子で私に、「歸も行かないのに其處らを渡り歩いて。本當に氣の毒だわねえ。」

と言つて、返辭も待たずにまた、「私の處へ行つて待つといで。御飯を喰へさせて貰つてね。お勤行が済めば歸つて、お話をしようからね。」と附け足した。

ルイズ・エレオノール・ド・ヴァランは、ヴォオ州のヴェヴェ市の高貴な舊族、ラ・ツウル・ド・ビル家の令嬢であつた。ロザヌのヴィラルダン氏の嫡男、ルワ家のヴァラン氏と、ごく若くして結婚した。子供が一人も生きず、結婚が不首尾だつたので、幾らか家庭上の煩悶にも促されて折からヴィットリオ・アマデオ王がエヴィヤンに居たのを幸ひ、夫人は湖水を渡つて此の王の足下に身を投じた。斯うして夫をも家をも故郷をも棄てたのは、丁度私と同じ輕擧からで、やはり始終泣いてばかり居た。王は熱心な公教信者を氣取る人で、彼女を自分の保護の下に置いて、八百圓の年金を給した。この金は約しい王に取つては過分な額であつた。それに傍から、此の處置

を、王が彼女に野心があるのだと思はれてゐるのを知つたので、王は親兵一分隊に護衛させて、彼女をアヌシに移した。すると彼女は、ジュネエヴの名義司教ミシエル・ガブリエル・ド・ベルネの指導の下に、ヴィジタシヨンの僧房で新教を棄てる宣誓をした。

(一) 一六九九年三月三十一日ヴェヴエ市に生れ、一七一三年九月二十二日ヴァランに歿した。

(二) 當時のサルヂニヤ王、即サヴワ公。

(三) 一六九七年以後ジュネエヴの司教となり、一七三四年七十七歳でアヌシに歿。

(四) 一七二六年九月八日聖母誕生祭の日。

私が此處へ来た時、彼女は其處に六年居た。其の時夫人は、此の世紀と同年生れの二十八歳であつた。彼女は變らぬ美しさを持つてゐた、この美しさは目鼻立よりも容子の方にあるからだ。而も彼女のそれは、今尙最初の輝きそのままを見せてゐた。懐かしい、優しい風采、温和な眼差、神々しい微笑、私の位な口。無造作に縮ねた、人焦らしな、珍しく美しい灰色の髪。軀は小作りで、背丈が詰つて、胴の邊は肥つてゐたけれど、不恰好ではなかつた。が、頭、胸、手、腕は、此の人よりも美しいのを見ようと云つて見られるものでなかつた。

(一) この六年は事實二年である。夫人がアヌシのヴィジタシヨンの僧房に暫く居て、此處へ定住したのは一七二六年の十月である。

彼女は雑駁な教育を受けた。私と同じやうに、生れるとすぐ母を失つた。そして折につけて、出たら目な知識を無差別に受け入れて、家庭教師や、父や、先生から少しづつを學び、戀人から多くを學んだ。中にもタヴェルといふ男は、趣味も知識も相應に持つてゐたので、それで以て此

の愛人に光彩を與へた。併し斯う種類の異つた色々の知識は互ひに妨害をし合つた。そして彼女は殆どそれらを整理しなかつた爲に、種々の研究も彼女の精神の自然の正しさを伸さなかつた。こんな譯で幾らか哲學や科學の原理は心得てゐても、父の持つてゐた舊式の醫方や、鍊金術の趣味をも亦棄て兼ねた。彼女は長命液、丁幾劑、鎮痛藥、鍊金藥を調製し、その祕傳を鼻に掛けて居た。香具師等は彼女の弱點に附け入つて、彼女の心を奪ひ、うるさく付き纏ひ、彼女を荒ませ、上流社會の花となり得べき其の機智、才藝、艷容を、甯や藥品の間で残らずぶつ壊して了つた。

(1) Etienne-Sigismond de Tavel.

併し、悪く導かれたその教育を利用して、詐欺師どもが彼女の理性の光を晦まさうとしたけれど、其の優れた感情は試練に堪へて、いつも變らずに居た。なつかしく優しいその性格、薄倖者に對する同感、盡きざる慈愛心、快活で眞率な氣質は決して壞れなかつた。而も老年に近づいた頃、窮困、疾病、災厄の直中でも、彼女の美しい魂の清らかさは、彼女の全盛の頃の快活さを、最後の日まで保存させたのである。

彼女の過失は絶えず仕事を求める無限の活動性から來たのである。彼女の求むる所は、女子通有の陰謀ではなくて、事業の計畫や指揮であつた。彼女は大きな仕事をする人であつた。彼女の地位に立つたロングヴィル夫人は離齷屋に過ぎなかつたであらう。ロングヴィル夫人の地位に立てば、彼女は國家を支配したであらう。彼女の手腕はその處を得なかつた。高い地位に居て名譽

を受くべきであつたものが、其の實際の地位に於いて彼女の破滅の本となつた。手の届く事物を捉へて、彼女は何時も頭の中で大業な計畫を立て、何時も目的物を擴大して眺めた。其の結果、實力よりも目算の方に相應する手段を取つたので、實力の不足で失敗した。そして彼女の計畫が敗れると、他の者なら何物をも失はないだらうに、彼女は破滅した。事業の興味はそれ程彼女に禍したけれど、それが爲却つて一生僧院生活に引込まれて了ふのが助かつた。尼僧の單調簡素な生活、パアラアでの下らぬ饒舌、すべて然うしたもの、日毎に新しい計畫を立て、それに没頭むための自由を冀つてゐる活動的の心を喜ばせることが出来なかつた。善良なベルネ司教は、フランスワ・ド・サル程に才分は豊かではなかつたけれど、色々の點で似た處があつた。そして其の人に娘と呼ばれ、且多くの他の點でシャンタル夫人に似てゐたヴァラン夫人は、若しも自分の嗜好の爲に修道院の無聊を避けなかつたら、隱遁といふ事で、又類似の點が増したであらう。此のやさしい婦人が、高僧の下に立つ改宗婦人に相應しく見える、信仰上の雑多な行事に身を委ねなかつたのは、敬虔の不足ではなかつた。改宗の動機が何であつたにしろ、信奉してゐる宗教に對しては誠實であつた。彼女は失策をしたと悔いたかは知らないが、元の信教に復歸しようといふ氣はなかつた。彼女は單に善良な加特力教徒としては死ななかつた、彼女は熱心な加特力教徒として生きた。彼女の魂の奥底まで讀み分けたと信ずる私は、彼女が表に熱信者を装はなかつたのは、偏へに矯飾を厭つたからだと保證してもいい。彼女は信仰を見えにするには餘りに強い信仰を持つてゐた。が、此處は未だ彼女の主義に立ち入る場合でない、いくらも話す機會があら

う。

(一) 大コンデ將軍の妹。路易第十四世王朝の初期に起つた内亂 La Guerre de la Fronde に主要な活動をした人。

(二) ジュネエヴの司教。第十六世紀の末シャンタル夫人と協力してヴィジタシオン教會を創めた。一五六七—一六二二。

心靈の交感といふ事を否定する人達に、出来るなら説明させたい。最初の會見、最初の一語、最初の一瞥で、ヴァラン夫人が最も強い愛着心のみならず、決して裏切らなかつたやうな完全な信頼の念をも私に起させたのは奈何してか。私の彼女に對する感じを實際戀愛であつたと假定しよう——私達二人の關係の物語を讀み行く人には、少くとも疑はしいものと見えて来るだらうが、——それならその情の初發から、戀愛とは殊に縁の遠い、平穩、安靜、安心といふやうな感情が奈何して伴なつてゐたであらうか。愛らしい上品な眩しいやうな婦人、曾て私の接近したことも無い身分の貴い婦人、多少共その配慮で或る程度までわが運命の懸かつてゐる婦人に始めて會つて、彼女の氣に入られる事が十分判つてゐたかのやうに、奈何して直ぐに然う心置なく暢び／＼した心持になられたのであらうか。奈何して私は少しの間も當惑や臆病や束縛を感じなかつたのであらうか。性來の羞恥家で、狼狽者で、世間知らずの私が、奈何して最初の日から、最初の瞬間から、十年後に割なき仲となつて初めて當然の事となつたやうな寛いだ態度、親しい言葉、馴れ／＼しい調子で、彼女に接することが出来たのであらうか。戀は欲情無しに、とは言はない、私にもそれはあつた、が、不安も無しに嫉妬も無しに出来るものだらうか。人は己の愛する對手から、己の愛せられて居るか否かを少くとも知りたくはないだらうか。不思議にも私は、一度と

してそれを彼女に訊かうとしなかつた、それを訊くのは、私が自分に自分を愛してゐるかを訊いて見るのと同じであつた。彼女も亦私について知りたがらなかつた。この愛らしい婦人に對する私の感情の中には、確かに風變りな所があつた。讀者の豫期しない不思議な事が追ひ／＼分つて來るだらう。

私が奈何なるべきかが問題であつた。で、ゆつくり話す積りで、彼女は私を食事に呼んだ。食事の時に食欲がなかつたのは是が初めてであつた。給仕の小間使も、私位の齡で私位の身分で、食欲の無い旅客を見たのは初めてだと言つた。この言葉は、主婦の心に私を悪く思はせなかつたが、一緒に食事してゐて、一人で六人前も喰ひ盡した一人の肥つた田舎者に取つては、少し痛かつた。私は恍惚の裡に居たので、食事をする餘地がなかつた。私の心は全身に漲る全く新たな感情を喰つてゐた。その感情は心のはたらきを一切止めて了つたのである。

ヴァラン夫人は私の身の上の詳細を知らうとした。私はそれを話すにつけて、元の師匠の家で失つた凡ての熱情を再び見出した。此の殊勝な婦人は、私に動かされる程、益々私の今後に出會ふ運命を悲しんだ。彼女のやさしい同情は、様子にも眼附にも身振りにも現れた。彼女は私にジュネエヴへ歸れとは勧めにくかつた。彼女の地位から言へば、然ういふ勸告は背信の罪だつたのだ。そして、自分が厳しい監視を受け、言ふ言葉も取調を受けてゐる事を知らずにゐなかつたらだ。併し彼女が、私の父の悲みに就いて、如何にも痛ましい調子で話をしたので見ると、私が父を慰めに歸るのを喜んでゐたことが明かに分つた。彼女は自ら氣附かずに、どれ程自己に反對

の事を述べてゐたかを知らなかつた。前にも話したと思ふが、私が決心した事は別として、しみじみ彼女に説かれれば説かれる丈、その言葉が胸に沁みれば沁みる丈、益々彼女から離れたくなかつた。ジュネエヴへ歸るのは、前に取つた手段を繰り返さない以上、彼女と自分との間に殆ど越え難い障を結ぶやうなものだ。それなら寧ろ此の儘で居た方が増しだと思つた。で、その儘にした。ヴァラン夫人は、自分の努力を無効と知つて、自ら危くする迄にも主張しなかつた。唯憫みの眼で私に、

「困つた子だね。ぢや神様のお召しになる處へ行くがいい。でも大きくなつたら、必と私の事を思ひ出すでせう。」

此の豫言がそれ程殘酷に實現されようとは、まさか彼女も氣附かなかつたであらう。徒弟の修業を半端で廢した私は、職を覺えるどころでなかつた。縦しそれを覺えてゐたところで、美術を持つには餘りに貧しいサワワで活計の立てられる道理がない。吾々の分まで喰つた田舎者は、少し額を休ませたくなつて、天から授かつた彼の謂ふ一つの意見を提出した、併し結果から判断すれば、寧ろ反對の方から授かつたものであつた。それは私がトリノへ行つて、洗禮志願者の教育の爲に設立された學林で、彼の詞で言へば、僧俗兩様の生活をして、それから公教會に這入れば、慈惠厚い人々の情で私に適した地位が見出せる、といふのであつた。

「旅費のことだが、」とその男が續けた。「夫人の方から司教様へ、此の聖き事業を申し出され

たら、それを喜捨なさるのに否とは仰しやるまい。それに男爵夫人も、慈善好きの方だから、
 …」と言つて皿の上へ伸し懸りながら、「きつとまた若干金かお恵み下さるだらう。」

そんな慈惠は私は厭で堪らなかつた。胸が塞がるやうで、口も利けなかつた。ヴァラン夫人は
 提出者ほど熱心に此の案を取り上げないで、唯誰でも分相應に喜捨すればいいのだといふ事と、
 司教に話して見ようといふ事とを答へた。ところが此の悪魔は、自分の思つた通りに夫人が話し
 込むまいと心配し、それと共に此の事件から役得を取らうとしたので、施主達の方へ先廻りをし、
 そして人の善い司祭達を旨々抱き込んで置いた。で、私の旅行に氣の進まないヴァラン夫人が司
 教へ話し出して見ると、もう何も彼もが決定して了つてゐた。そして司教は早速私の旅費にと宛
 てられた金を彼女に渡した。彼女はそれでもと言つて私を引き留めることは出来なかつた。彼女
 の年頃の女が、憚りなしに若い男を傍に引きつけては置かれぬやうな年頃に私が近づいてゐた
 からである。

この旅行は自分の面倒を見てくれた人達の力で極まつたので、それに従はなければならなかつ
 た。而も私は餘り厭とも思はずに言ふなりになつた。トリノと云へばジュネエヴより遠いけれど、
 首府でもあるから、他の政府も宗教も違ふ市よりは、アヌシとの關係が一層密接だらうと思つた。
 それにヴァラン夫人の言葉に従つて出掛けるのだから、言はば始終夫人の指圖の下に生きるのだ、
 隣に住むよりも以上だ。斯うして大旅行といふ考は、豫ねて頭を擡げ掛けてゐた私の放浪癖を唆
 つた。自分程の年頃で山々を越え、亞爾伯の絶頂から友達を瞰下ろすのは、素晴らしい事と思は

れた。遊歴はジュネエヴ人の抑へ難い誘惑だ。で、私も同意したのである。田舎者は二日の中に、
 妻と連れて發つことになつてゐた。私は二人に委託され、紹介された。夫人の満たしてくれた私
 の財布も預けられた。夫人はその外に、内證で幾らかの貯金と、こま／＼との心得まで添へてく
 れた。そして私達は復活祭前の水曜日に出發した。

私がアヌシを發つた翌日、父はその友人のリヴァルと私を追つ掛けて此處まで來た。この人も
 亦時計屋で、機智があり文才もあつて、詩はラ・モット(二)より巧く、談話も彼程に巧かつた。その
 上誠實な人であつたが、柄がらにない其の文藝趣味は、息子の中から喜劇俳優を一人出した丈に止ま
 った。

(1) Antoine Boudar de La Motte. 四里の詩人、戯曲家、批評家、寓話家。第十八世紀文界先驅者の一人で、後にア
 カデミーに迎へられた。一六七二—一七三一。

此の人達はヴァラン夫人に會つて、彼女と共に私の成行きを憫む丈で満足した。私は徒歩だし、
 その人達は騎馬なのだから、容易に私に追つ着くことが出来た譯なのに、さうはしなかつた。同
 じやうな事が小父おぢのベルナルにもあつた。これはコンフィニョンまで來ながら、私がアヌシに
 居ると聞いてその儘ジュネエヴへ引き返した。近親達は私の運星と腹を合せて、私を待ち受けて
 ゐる運命に引き渡したものと見える。兄も、同じやうな疎略そろりから失はれて、奈何成り果てたかを
 知る者もなかつたのである。

父は徳義の人といふのみでなく、本當に誠實の人でもあつた。又大なる美德を生む剛健な魂を

も持つてゐた。その上良い父で、私に對しては殊に然うであつた。彼は深く私を愛してくれたが、また自分の歡樂をも愛した。そして私が離れて暮らすやうになつてからは、種々な道樂で父としての愛情が薄くなつた。父はニヨンで再婚した。その妻は既う私の弟達を生へる齡でもなかつたが、幾らか骨肉があつた。其處で別の一家が出来、別の目的物が出来、別の世帯が出来て、もう餘り私の事を思ひ出さなかつた。父は齡を取つて行つたが、老後を支へる丈の資産がなかつた。兄と私とは、母の遺産が幾らかあつて、其の利子が私達の不在中は父の物になる譯であつた。この考が直接父の心に浮んだのでもなく、彼の義務を行ふのを妨げたのでもなかつたが、それが彼に知れず暗々の裡に働いて、さなくばもつと強く現れる筈の父の慈愛を時々弱めることがあつた。最初跡を跟けてアヌシまで來ながら、大丈夫私に追つ着けたシャンペリまで追つて來なかつたのはその爲だらうと思ふ。又私は逃亡の後も度々父に會ひに行つたが、何時も父としての愛撫を受けただけで、強つて引き留めてくれなかつたのも、矢張その爲だらう。

(一) 一七二六年三月五日、ジャヌ・フランソワ Jeanne François と云ふ三歳年長の女と再婚した。

愛情と道徳とのあることを私が十分承知してゐた一人の父のこの行爲は、私にわが身を反省させた。此の反省は健全な心を維持する上に、尠からぬ功があつた。私は其の中から次のやうな大教訓を得た、恐らく實際上無二のものだらう。義務と利益との兩立出來ないやうな境遇に居るな、他人の不幸の間に自分の幸福を示すやうな境遇に居るな、といふことである。然うした境遇に居ては、縦しどれ程眞剣に道徳を愛してゐても、早晚氣附かない中に段々弱つて來て、心では正義

善良を失はない積りでも、事實上不義不善の人となる事は確かだといふことである。

この教訓は胸の底に深く刻み込まれ、少し後には一切の行爲にも適用されたが、これが私を衆人の中で、殊に自分の知人の間で、變人か、狂人に見せたものである。人は私を奇抜を好む人間人と異つた事をしたがる人間にしてつた。けれども、私は人と同じ事をしようとも異つた事をしようとも考へてゐたのではなかつた。ただ、良い事をするのが衷心の願ひだつたのだ。他人の利益に反する利益の念を起させ、従つて、縦ひ無意識にもせよ、陰密に他人の不幸を希はせるやうな境遇から、必死に免れようとしたのである。

第 二 卷
今から二年ばかり前に、元帥卿が其の遺言書の中へ、私の名前を書き入れようとした。私は極力それを拒んだ。私は斷じて何人の遺言書にも入れて貰ひたくはない、彼の遺言書には尙更だ、といふことを彼に告げた。彼は承知した。今又彼は私に終身年金をくれようとしてゐる、それは私も辭らない。此の交換で私が埋合せしたと思ふ人もあらう。それならそれで可い。併し、あゝ、我が恩人よ、父よ！ 若し不幸にして私の方が後に生き残つても、閣下を失つては、私は一切を失つて、一物をも得ることはあるまいと思つてゐるのです。

(一) ルソオの晩年の擁護者。詳しく第十二巻に出る。

惟ふに、これがまことの哲學、眞の人の心に適合する唯一の哲學である。私は毎日此の哲學の眞に不易であることを思ひ知る一方である。そして是を色々に言ひ換へて、あらゆる後年の著作に使つた。が、輕薄な世間はそれを注意することを知らなかつた。若しこの仕事が完結して次の

著述に取り掛る丈命が續けば、私は「エミル」の續篇として、この教訓の非常に面白くて奇抜な一例を引いて、注意を讀者に促さうと思つてゐる。併し一個の旅人にしては、此の位考へれば澤山だ。復た旅行に移るべき時だ。

私は想つたよりも愉快に旅行をした。例の田舎者も、見掛け程の意地悪でもなかつた。胡麻鹽の髪を辮髪にした、下士とでも言ひさうな、大聲の、快活な中年の男で、歩く事も善く歩き、喰ふことは尙よく喰つた。どの職業も物にならなかつたので、何にでも手を出した。アヌシで何かの製造所を立てる算段をしてゐたものらしい。ヴァラン夫人はそれに異存のある人ではなかつた。そして彼が十分な旅費を貰つて、トリノへ出掛けるのも、當局の許可を求めざる爲であつたのだ。此の男は始終僧侶達の中に潜り込み、熱心にその御用を勤めるやうな顔をして、取り入つて行くのが巧かつた。其の學校で宗教上の用語を聴き齧り、一應の説教者を氣取つて絶えずそれを口にした。おまけに、羅旬語の聖書の句まで覚えてゐて、日に千度も繰り返すので、千句も知つてゐるかのやうであつた。且、他人の財布に金のあることを知つてゐる時は、減多に金に困らなかつた。それでも猶いよりは伶俐なのだ。彼が壯丁募集人の口調で古臭い説教を語り出すところは、劍を横たへて十字軍を勧誘した隠者彼得の概があつた。

妻のサブラン夫人は、可なり人の良い女で、夜よりは晝の方が靜かであつた。私は毎晩二人の室に寝たので、時々彼女の騒がしい不眠に驚かされた。その不眠の原因が分つてゐたら、もつと目を醒ましたらうと思ふ。併し私はそれに氣付きもしなかつた。そして此の一點については私は

未だ愚かで、他日専ら自然から教へられる時を待つてゐたのだ。

私はこの信心な案内者と、氣爽な妻とに連れられて、面白可笑しく歩いて行つた。頼い事件も起らず、身も心も斯う楽しかつた事は前後に無い。若くて元氣で、健康と安心と自他に對する信頼とで一杯になつてゐる私は、生涯中の短いけれど貴い彼の一時期に居た。此の時期に於いて、膨脹しようとする生の充實は、あらゆる感覺に依つて吾々の存在を擴大し、全自然を人生の美で飾つて見せるのである。私の楽しい不安には一つの目的が立つて、餘り動搖しなくなり、空想も落ち着いた。私は自分をヴァラン夫人の子か、弟子か、友人か、但しは殆ど戀人かのやうに考へた。夫人から聞いた親切な言葉、彼女から受けた媚愛、彼女がしてくれるらしい愛情の籠つた心づかひ、戀に満ちてゐるやうな——といふのは、それが私に戀を催させたから——艶な目づかひ、然ういつたものが皆途中の妄想を育んで、甘い夢を見させてくれた。運命に對する如何なる恐怖も、如何なる危惧も、この夢を掻き亂す事は出来なかつた。自分の見る所では、トリノへ私を送りつけるのは、彼地で暮らしの出来るやうに、然るべき地位に就けるやうにしてくれるのだ。自分の事ではもう心配は要らない。傍の人が引き受けてくれる。で、私は重荷を卸したやうに浮き／＼歩いた。若々しい欲望や、ぞく／＼するやうな希望や、輝やかなしい事業が心を一ぱいにした。眼に入るかぎりの物はすべて、近づきつつある幸福の豫告のやうに見えた。家々には田舎風の饗宴が想像された。牧場では愉快な遊戯、川筋には水浴と逍遙と魚釣り、樹木には甘い果物、その蔭には楽しい密會、山には牛乳やクリームが想像された。心ゆく閑散、平和、純朴、處

定めず歩く楽しさが想像された。結局眼に觸れる物は、一つとしてわが胸に歡喜の誘惑を持ち來さないものはなかつた。風景の雄大と變化と實際の美とが、此の誘惑を理性と合致するものにした。虚榮心も幾分かその中に雜つてゐた。こんな年若な身で伊太利亞に行き、もう色々の國を見、亞爾伯を越えてアニバルの跡を趁ふといふことは、齡には過ぎた榮譽と思はれた。それに加へて、時々の愉快な休泊、盛んな食慾、十分な喰ひ物があつた。實際私は遠慮してゐなくてもよかつた、サブランの食ふ物に比べては、私のは何程でもなかつたからだ。

此の旅行に費した七八日の間位、何の心配も苦勞もなかつたことは、生涯に二度とあつたやうに思はない。内儀の足に合はせて歩くのは、長い散歩のやうなものであつた。此の思ひ出から私は、それに關聯した色々な事、殊に山と徒歩旅行とを無上に好むやうになつた。徒歩の旅をして愉快で堪らなかつたのは若い時だけだ。その後は義務や事件や荷物の爲に、紳士を氣取り、馬車に乗らなくてはならなかつた。激しい心遣ひや當惑や束縛が、私と一緒に乗り込んでゐた。それから、今迄の旅行では歩く愉快丈を感じたに引きかへて、到着の必要丈しか感じなくなつた。私は長い間巴里で、一人前五百圓の金と一年の日子を費け、道連れは荷持ちの小者一人と限つて、徒歩で一緒に伊太利亞廻りをする同好の友人二人を搜した。いろんな人間が現れたが、それは此の計畫の外觀に釣られたので、内心は全くの空想と見做して、談の種にはするが、實行しようといふ者はなかつた。私は熱心にチドロとグリムに勸めて、到頭二人を動かしたことを覺えてゐる。大方話が纏まつたと思つた處が、結局たゞ、書き物の上で旅行をしようといふことになつて了つ

た。グリムの考では、チドロに背信の罪をうんと犯させて、その身替りに私を宗教裁判所へ押し籠めたら、是程面白い事はないといふのであつた。

(一) 事實は二十日許も費したのだといふ。

(二) (三) 共にルソオ後年の交友。詳しく後巻に出る。

トリノへ餘り早く着いた飽氣なさは、大都會を觀る愉快さと、自分に相當した地位が極まるといふ希望とで埋め合はされた。野心の火の手が既々込み上げて居り、最早昔の弟子奉公の境涯よりは遙かに高い處に居るものやうに思つて居た私は、却つてそれよりも遙かに低い處へ落ちて行かうとしてゐたことには氣づかなかつたのである。

話を進める前に私は、今も此の後も述べ立てる、而も讀者に取つて何等の興味も無い無數の些事に對して、諸君の諒解を乞はなくてはならない。公衆の前に自分を丸出しにして見せる此の懺悔で、何事も曖昧にしたり隠して置いたりしてはならない。私は絶えず公衆の目の前に立つてゐなくてはならない。公衆は私の心の端々、私の生活の隅々まで追窮しなくてはならない。一瞬間でも眼を私から離して置きながら、文中に些しの空隙を見つけ出して、「そんな時に彼奴は何をしてゐたのだらう。」などと、包まず話す氣が私に無かつたかのやうな非難は御免を蒙る。私は自分の談話で十分惡評を受ける手がかりを與へてゐるのだ。その上更に沈黙に依つてその上塗をしてはならない。

僅かな貯金もなくなつた。私は口を辻らした。この不謹慎は二人の案内者に取つて無益ではな

かつた。ヴァラン夫人が私の劔の爲にとて呉れた、銀飾のリボンまで、内儀は巧く捲き上げて了つた。私はそれが何よりも惜しかつた。その劔さへ私が頑張らなかつたら、矢張彼等の手に渡るところであつた。旅行中、夫婦は私の爲に忠實に支拂はしてくれたが、私を無一物にしてすつた。トリノへ着いた時には、着物も金もシャツも皆なくなつてゐて、此の先の幸運は、正しく自分の腕一本で仕上げなければならなかつた。

私は持つて来た紹介状を渡した。すると直ぐに世渡りの資本となる可き宗教の教育を受ける爲に、洗禮志願者の學林に案内された。這入つて行くと、鐵格子の大扉がある。通つて了ふと背後から二重に閉め切られた。此の發端は楽しいよりも威嚴に打たれて鬱ぎ込んでゐると、又別の大きな室に連れて行かれた。道具類と言つては、奥の方に大きな受難像の立つた木製の祭壇と、其の周圍にやはり木製の、蠟でも塗つたかと思えるが實は使ひ古して光つてゐる椅子が四五脚ある丈であつた。此の集會室に私の教友の四五人の怕さうな無賴漢が居た。彼等は神の子の志願者よりも、惡魔に隨ふ弓卒のやうに見えた。その中二人はスラヴォニヤ人だつたが、自分達では猶太人やモオル人だと言つてゐた。彼等が告白した通り、何處でも利益にさへなるなら、基督教に入つて洗禮を受けつつ、西班牙や伊太利亞を流れ渡つたのである。又別の鐵門が開いた。それは庭に臨んだ大露臺を二つに仕切る扉であつた。この扉口から、私達の姉妹學友が這入つて來た。彼等も私と同じ様に、洗禮に依つてではなく、正式の背教宣誓に依つて復活しようとするのであつた。彼等は今までに教會を潰して來た仕様の無い賣春婦が、ごく下等な渡り女であつた。唯一人

美しく愛らしいのが居た。私と同年、事によると一つ二つ上かも知れない。猾さうなその視線と私のとが、時々憂ち合つた。それから彼女と知己になつて見たいと思ひ立つた。けれども、彼女が既う三月も居た此の家で、未だ二箇月も留つて居る間に、老女監守に預けられ、その改宗の爲に、勉強以上の熱心で働いてゐる傳道師に付き纏はれてゐたので、全く近づくことが出来なかつた。彼女は見掛けに依らない愚昧だつたに違ひ無い、あれ程教誨に手間の掛る女は無かつたからだ。傳道師は到頭彼女に改宗の心を起させることが出来なかつた。けれども、彼女はその尼院に疲れて來て、信者であらうと無からうと、出て行つて了ひたいと言ひ出した。終に反抗を起して信者にはならぬといふ虞があるので、未だ信者になる氣のある中に、直ぐその申し出を許可しない譯に行かなかつた。

新人者を迎へ入れる爲に、小さい集會が催された。私達は手短かな勸告を聽かされた。私には、神の恩寵に對へるやう、他の者等には、私の爲に祈禱をするやう、彼等の手本で私を導びくやうにとの事であつた。會が終つて處女達は室に引き退つたので、私はこの間に、ゆつくりと自分の居る場所を考へてみる事が出來た。

翌朝また集會で説教を聽かされた。私は此の時始めて自分の踏んで行く道や、私を其處に導びいた徑路を反省して見た。

繰り返して言ふ。前にも言つたし、後にも又繰り返すだらうが、私が日毎に深く思ひ知る一事は、正當で健全な教育を授けられた兒童があつたとすればそれは私だ、といふことである。一般

と違つた道徳的な家で人と爲つた私は、近親の人々から從順の教と徳義の模範のみを受けた。父は歡樂の人であつたにしても、本當に誠實で宗教心も深かつた。世間では禮節ある人、内部では基督信者である彼は、自身に沁み込んでゐる感情を、夙くから私に吹き込んだ。才徳の具はつた三人の小母おははの中、年嵩な二人は信神家であつた。三番目の小母は淑徳と才智と常識とを十分に持つてゐて、見えにこそしなかつたが、信仰は他の二人よりも強かつたらしい。斯ういふちやんとした家庭から私はランベルシエ氏の家に移つた。これは教會に關係し、説教を事とする人だが、心からの信仰家で、言ふ丈の事は行つた。その妹と二人で、私の胸に見出した信仰の芽生を、やさしくて確かな教訓で育ててくれた。斯ういふ立派な人達が、誠實で、周到で、正當な手段を取つてくれた爲に、私は説教に疲れるどころか、何時もそれが濟むと胸を打たれて、正しい道を歩まうと決心しない時はなかつた。此の決心を思ひ出して、滅多に外はらしたことはなかつた。小母のベルナルの家では、信仰が日常の事になつてゐただけ、少し煩く思はれた。師匠の家では思想が變つたといふのでないが、宗教の事は殆ど考へなかつた。私は自分を墮落させるやうな若い友達を見出さなかつた。悪戯つ子にはなつたが放蕩兒にはならなかつた。

で、私は自分位の年頃の少年が、持ち得る丈の宗教心を持つてゐた。隠さずに言つて了へば、未だ／＼それが深かつたのである。私の幼年期は通常の子供のそれではなかつた。感情も思想も大人並おとななみであつた。凡人の仲間入をしたのは大きくなつてからの事で、生れ立ては凡人でなかつた。人は私が乙に神童を氣取つてゐるのを見て嘲笑するだらう。それはいいが、十分私を嘲笑した後

に、わづか六歳位で、小説に惹きつけられて、終に熱い涙を零す程夢中になるやうな子供があつたら見出して貰ひたい。其の時こそ私は、笑ふべき己惚を悟つて、自己の謬りを認めるだらう。だから、子供に宗教心を持たせようと思へば、小さい時から宗教のことを話してはならない、子供が神を知る、而も吾々の様に知るなぞとは、不可能の話だ、と斯う私が言つたとしても、それは觀察からの論であつて、決して私自身の経験からではない。私の経験は、一般の場合に當て嵌めることの出来ないものだと思つてゐる。若し六歳のジャン・ジャク・ルソオが居たならば、七歳で神様の談を聽かして見給へ、何も心配な事がないことを請け合つて置く。

二 子供に取つても大人に取つても、宗教を信ずるといふことは、生れた時からの宗教に従ふこととなつてゐるやうだ。人はその中から或る物を取り去る事はあるが、附加する事は滅多にない。教理上の信仰は教育の結果である。私を祖先の宗教に引きつけた此の一般的な原則は別として、私は加特力教に對する自分の郷里特有の反感を持つてゐた。それは恐ろしい偶像教だと聞いてもゐたし、その派の僧侶が實に陰險極まる者のやうに云はれてゐたからでもあつた。此の感じが深く沁み込んでゐた爲に、最初の間私は教會の中を覗いても、法衣を着けた司祭に遇つても、勤行の鐘を聽いても、始終恐怖と畏縮とで慄へないことはなかつた。それも程なく都會では感じなくなつたが、最初私の経験した教區に一層類似してゐるやうな田舎の小教區では、時々その感じを繰り返した。實際この印象は、ジュネエヴ附近の司祭たちが、喜んで市の子供等に與へた愛撫の記憶と奇妙な對照をなしたのである。臨終の聖餐の鈴が私を脅えさせる傍から、彌撒と晩拜との

鐘は、朝飯や、小晝餐や、鮮食牛酪や、果物や煉乳を私に思ひ浮べさせた。ボンヴェル氏の饗應も、大いに影響があつた。斯うして私は然ういふ事の方へ容易に引き込まれて行つた。加特力教を娛樂や美食と結びつけて見てゐるだけだったので、つい此の宗教の中に居てもいいやうな氣になつて來た。併し正式に此の教に歸依しようといふ考は、閃光的にか、遙か後でなくては私に現れて來なかつた。今になつては、もう退くに退かれない場合、私は自分のした約束と、それから來る必然の結果とを甚だしい恐怖の目で見た。私を取り捲いてゐる未來の新信徒達は、迎も手本を見せて私を勵ます柄ではなかつた。そして自分のしかけてゐる神聖な行動は、實際無頼漢の所業に過ぎないといふことを思はずにゐられなかつた。どんな宗教が眞の宗教であるにしろ、自分は自分の宗教を賣らうとしてゐるのだ、そして、幾ら良いのを選んだところで、心の底では聖靈を欺き、人間の侮蔑を招かうとしてゐるのだ、と、私の若い心にも然う感じた。考へれば考へる程、自分自身が忌々しくなるばかりであつた。そして、此の運命を、自分で造り出したものは無いかのやうに、歎息した。此の反省が餘程強くなつて、若し門口でも開いてゐたら、逃げ出したかも知れないやうな時があつた。が、それは私に出來ない事であり、此の決心も亦本當に強くなつてゐなかつた。

非常に澤山な内密の欲望が、此の決心と戰つて、それを征服して了つた。其の上、ジュネエグへは再び歸らないといふ考の頑固さ、再び山越えをする極り悪さや困難、友人も無く資力も無く故郷から遠く離れた自分を見ることの心細さ、然ういふものが一緒になつて、良心の苛責を手

遅れの悔恨と思はせた。此の先自分のしようとする事を辯解するために、今迄にした事を故らに非難した。過去の過失を大業にして、未來の過失をそれから來る必然の結果だと見做した。私は、「未だ何を仕出來したといふのでもない。無罪で居ようと思へば居られる。」とは自分に言はなかつた。「自分の犯した罪と、未だ此の先もその罪の上塗をしなくてはならなくなつたのが、悲しい。」と自分に言つた。

實際私の齡で、今日までに約束したり望み得た一切を取り消したり、自身を繋ぎ留めて居た鎖を断ち切つたり、何事が起つて來ても構はず、自分はわが祖先の信教に踏み止りたいと斷乎公言したりする爲には、どんなに勇氣が必要だつたらう。そんな勇氣は、私の齡では無いにきまつてゐる。又そんな勇氣から、幸福な結果を得る事も覺束なかつた。最早何事も挽回の出來ないまでに進んで來てゐた。そして私の反抗が強ければ強い程、人々は一層手を替へ品を替へて、それを壓へつけるのを務とするやうになつた。

私を誤らせた僻論は、世の人々のそれと同じで、時機が去つて了つてから力の足りないのを口惜しがるのであつた。道德は吾々の過失の爲にのみ價値があるのだ。不斷に用心してゐさへすれば、殆ど道德的であることの必要はないと思ふ。ところが造作無く自制の出來る性癖も容易に人を誘ふ。是許りのと思ふやうな誘惑にも人は負ける。吾々は知らず識らず危険な場合に陥る。事前には易々と免れ得たものも、事後には驚く程勇豪な努力が無くてはそれを脱することが出來ない。斯うして人は淵に溺れ、そして神を仰いで、「何故私を斯様な弱き者にお造りなされました

か。」と言ふ。が、それには頓着なく、神は吾々の心に、「淵から出られない程弱き者に造つたのは、淵に陥らない程強き者に造つて置いたからだ。」と答へ給ふ。

私はきつぱりと加特力教徒になる決心をしなかつた。併し其の時期が未だ遠いと知つて、緩乎其の考に馴らすやうにして行つた。又その内にも、自分を窮地から救ひ出してくれるやうな不時の出来事をも描いてゐた。私は時日を延ばす爲に、自分に出来る最善の防禦をしようと決心した。すると私の虚榮心は、此の決心を考へなくてもいいやうにしてくれた。私は時々自分を仕込んでくれる教師達をやり込めたことがあつたのを思ふと同時に、全然彼等を頭の上からないやうにしてふのは譯の無い事であつた。此の事で私は莫迦々々しく熱心になつた。彼等が私を説き附けてゐる間に、私が彼等を説き附けようとしたのである。私は愚かにも、彼等を言ひ負かしさへすれば、新教の方へ改宗して来るものと考へたのであつた。

そこで私といふものは、知識の方でも意志の方でも、皆の豫期した程興し易いものでなくなつた。概して新教徒の方が加特力教徒よりもよく教育されてゐる。それはどうかといふのに、新教徒の教義は論議を重んずるけれども、加特力教信者のは盲従を要する。加特力教信者は與へられた決論を採用せねばならぬが、新教徒は自ら決論することを學ばねばならぬ。彼等とても、それを知らないではなかつたが、私の身分からなり離から見ても、経験を積んだ人達を酷く困らせようとは思ひも掛けなかつた。そのみならず、未だ私は最初の聖餐式もせず、それに關する訓誨も受けなかつた。それも彼等は知つてゐたが、併し、私がその代りにランベルシエ氏の宅で、一通

り教育を受けたことと、更に「教會及び帝國の歴史」から、此の人々に取つて餘程不利益な手品函を握つてゐたこととを、彼等は知らなかつた。これは私が父の家で殆ど語記する程に覺えたもので、その後大方忘れてゐたが、議論が喧しくなるにつれて思ひ出したのであつた。

小柄な年寄りの、重々しい一人の僧が、皆を集めて第一の討論會を開いた。それは他の學友達に取つては、討論といふよりは教義問答であつた。彼等の反對意見を解決するよりは、教へて聽かせるのが主もであつた。私丈は然うでなかつた。自分の順番が來ると片端から彼を喰ひ止めた。彼に對して掛けられる丈の難問題は、一つも容赦しなかつた。その爲に恐ろしく會が長引いて、傍へ迷惑を掛けた。老僧は口達者に喋つて、逆上せて、しどろもどろになつた。そして俺には佛蘭西語が善く解らないと言つて、際鏡さいかざい所を斬り抜けた。翌日、私の無茶な反對が學友に悪影響を與へるといふので、私丈を他の一人の僧と共に、別の室に入れた。それは、年若な、長い熟語を引つ張り出すといふ意味で辯舌の巧い、ドクトル然と自分のことを鼻にかける傳道師であつた。けれども、私は其の尊大な風にあまり屈してはゐなかつた。結局自分の課業をやるのだと思つて、ときばきと彼に答へ、自分の奥の手を出して、こゝかしこから彼を攻めつけた。彼は聖アウグスチヌス、聖グレゴリオ、其の他の神父で私を壓迫し得るものと信じてゐた。ところがそんな神父なら、私の方でも彼に劣らず樂たのしみに振り廻すのを見て、ぎよつとした。私とその人達の本を讀んでゐたからではない、彼とても多分は然うだつたらう。唯私はお得意のル・シュウルの拔萃句を澤山覺えてゐて、向うが一句引用すれば、それに就いては争はないで、同じ神父の他の句で彼に言

ひ返した。それがひどく彼を惱ました。それでも到頭二つの理由から、彼の勝利となつた。一つは彼が優者であつたからだ。私は謂はば彼のお情次第の者と感じたので、あのちび老僧が私の知識にも人物にも同情ある人でない事は明かだから、此の若僧を窮地へ陥れる事は宜しくないと、齡には増せた分別をしたのである。もう一つの理由は若僧には學殖があり、私にはそれが無かつた事である。然ういふ事から彼は、私の追隨を許さない論法を用ひ、意外な反問に遇へば、問題外に渉るからと言ひ抜けて、翌日まで延ばした。時には私の引く句を皆嘘だと言ひ捲つて、取り合はない事もあつた。そして私に其の本を取つて来て、出して見せると調戲つたりした。彼は自分の身に別條は無いと思つたのである。それに私の間に合せ學問では、書物を振り廻すことは知らず、心細い羅旬語學者で、縦し書物の何處かに出てゐる筈でも、大部なものの中から一句を見つけて出すことは出来ないといふことも、彼は承知してゐたのである。而も彼は、新教の宣教師の背信を攻撃したが、その背信を彼自身にも犯したのではなかつたか、又、自分に不利益な反問を避ける爲に、時には引用句を捏造したのではなかつたか、と私は疑つてゐる。

斯うした下らない議論が續いて、争つたり、祈禱を唸つたり、あばれたりして暮して行く中、偶と或る不快な、下品な事件が起つた。それから非常な悪影響が私に來るところであつた。

幾ら下司な根性で粗野な心でも、全く愛情に無頓着ではゐられないものだ。自稱モオルの無頼漢の一人が、私を愛するやうになつて來た。いやに近寄つて來たり、解らない片語で話し掛けたり、世話をしたり、時には食卓の物を分けたり、殊に熱烈に不快千萬な接吻をしに來たりした。

一條の長い疵痕を飾つた香味麵包のやうな顔、優しいよりは怒つてゐるやうな輝く目を、私は勿論恐れずにゐなかつたが、「此の哀むべき男は自分に對してごく熱心に友情を注いでゐる。勿ね付けて了つては悪からう。」と思ひながら、その接吻を我慢してゐた。彼は段々粗雑になつて、時には氣が狂つたと思はれるやうな變な注文をして來た。或る晩私の處へ寢に行くと言ひ出した。私は寢臺が狭いからと言つて拒んだ。では自分の方へ來いと迫つた。私は復たことわつた。此奴が不潔で、盛んに嚙煙草を臭はして、胸を催吐かせたからである。

翌朝夙く二人で集會室に居た。彼は復た私に喋け出した。如何にも狂暴な振舞だつたので、彼が恐ろしかつた。やがて彼は次第に不快極まる淫らさに變つて來て、私の手を取つて私にも同じことをさせようとした。私は呀と言つて後へ飛び退ると共に身を振りもぎつた。而も私には其の意味が全く解らなかつたので、腹の立つた顔は見せなかつた。私は力一ぱい驚いたやうな、厭さうな容子をしたので、それ切私を許した。併し、彼が興奮の絶頂に在る間、私は胸の悪くなるやうな物を見た。私は前後に覺え無い程、激して狼狽して恐れまでして、氣分を損じるばかりになつて露臺へ駈け出した。

私は此の見下げ果てた男のした事が理解出来なかつた。癩癩か、それよりも劇しい他の癩癩に陥つたものかと思つた。又實際眞面目な人で、こんな淫らな穢らはしい様子や、獸慾に爛く怕い容貌の者があつたら、是程厭なものはあるまいと思ふ。私は二度とこんな事をする男を見たことがない。併し若し男子が婦人達の傍で然ういふ事をして、彼女達が男を恐ろしいものと思はな

い爲に、十分その目を麻痺させて置かなければならない。

私は何を差し置いても自分の上に起つた事件を人々に話して廻つた。彼の老女幹事は、黙つてゐるやうにと私に言つた。でも此の物語には甚く呆れて、口の中で、「いやな獣だ！」と呟いた。私は黙つてゐる譯が分らないから、口止をも構はず依然喋つてゐると、翌朝早々監督が来て、厳しく私を叱りつけた。聖き家の名譽を汚し、何でも無い事を大袈裟にして、との小言である。

彼は小言序でに色々な事まで説明して了つた。その事は私の曾て知らない事であつたが、彼の方では私がその譯を知つてゐて、唯同意したくなかつたから拒んだのだ、と合點してゐるので、私に教へるといふ積りではなかつたのである。彼はしかつべらしく斯ういふことを話した。あの事は淫樂として禁ぜられたものだ、けれどもその對手となる人に格別侮辱を加へる積りではないのだ、それに可愛がられて怒る道理はないと話した。彼は露骨に斯うも言つた。彼自身も若い頃同じ名譽を荷つた事があつた。それも抵抗する暇もない不意打を喰つたのだが、別に辛いと思ふやうな事もなかつたと言つた。彼はその極、奈何いふ言葉をも憚らず用ひた。私が拒んだのは苦痛を恐れてだと獨りで極めて、そんな事は決してない、何も心配の要らないことだと請け合つた。此の醜漢は自己の爲に話したのでなかつたから、それだけ私は一層聽いて驚いた。私の爲丈はそれを話して聽かせるやうに見えた。その話を彼は有り觸れた事とも思つてゐたのか、内證で竊と話さうとさへしなかつた。現に傍にはもう一人僧が居たけれど、その人もやはり氣を悪くはしなかつた。その平氣なのを見て私は、必とこれは世間一般の習慣なのだ、自分が今まで習ふ折

がなかつたのだと思ひ込むやうになつた。で、私は氣持悪々怒りもせずそれを聞いたのである。私に起つた事件、殊に私を見た事件の思ひ出は、強く腦裏に残つて、それを考へるといつも胸が悪くなつた。私は此の事を深くも知らないでゐて、此の事に對する嫌惡の念を、その辯解者にまで及ぼした。而も彼が、其の教訓の悪影響を氣附かずにもられる位、私は自身を制することが出来なかつた。彼は愛情の無い視線を私に投げた。それ以來彼は、私の學林生活を不快ならしめる爲の何物をも吝しまなかつた。彼は立派に望みを達した。で、私はそれを免れるのに唯一策しかないことを知つて、今までそれを遠ざけるのに骨を折つただけ、その策を取るのに焦心つた。

此の出来事は今後私を漁色の徒の企みから安全に護つた。此の類の手合を見ると、此の恐ろしいモオル人の顔附や身振を思ひ出して、いつも隠し切れない程の恐怖に襲はれた。それと反對に女といふものが、此の對照から私の心の中に幅を利かした。私は柔和な感情と私の身の尊敬とを、男性の侮辱の償ひとして女達から惠まれるやうに思つた。そして如何な醜い賣春婦でも、此の偽亞弗利加人を思ひ出すにつけて、私の目に崇拜の的のやうに映じた。

彼の方とは云へば、私は人が彼に何と言つたらうかを知らない。ロレンツァ幹事の外は、誰も以前より險しい眼で彼を見てゐるとは思へなかつた。でも彼はもう私に近づきもせず、話しかけもしなくなつた。一週間の後、彼は更生したその精靈の潔白を示すために、頭から足の先まで眞つ白に装はれて、盛んな儀式の下に洗禮を受けた。翌朝彼は學林を出て行つた。それきり遇つたことがない。

私の番は一箇月後に来た。困難な私の改宗の名譽を監督の人達に負はせるには、これ丈の時日が必要だつたのだ。そして私の打つて變つた從順に勝ち誇る爲に、彼等は一切の信條を私に復習させた。

十分に教育され、十分に教師たちの意に化せられた私は、到頭聖約翰中央會堂へ行列で連れ込まれ、正式に背教の宣誓をして、洗禮の調度を受け取つた。洗禮は實際は受けなかつたのだが、それと同様の儀式なので、愚民共には新教徒は基督信者でないと思はせるのに役立つた。私は斯うした儀式にお定まりの、灰色に白く縁飾を取つた衣を着せられた。私の前と後に、男が一人づつ銅盤を捧げ持つて、鍵でそれを叩いた。と、人々は信仰のために、又新改宗者への心附けに、各々の喜捨金を投げ入れた。結局、その莊嚴を、公衆には一層感化を與へるものとし、私には一層屈辱を與へるものとする爲に、加特力の虚飾は一つとして省かれなかつた。唯白衣丈は私の役に立つ物であつたけれど、生憎私が猶太人といふ名譽を持たなかつた爲に、モオルに遣つたやうに私には呉れなかつた。

未だそれ丈では濟まない。今度は異教徒密檢所に出て、異教の罪の赦免を受け、それから顯理四世が其の大使に従はせられたと同じやうな儀式で、公教會の懷に歸らなければならなかつた。所長神父親下の風采態度は、此所へ來る際に私を擒へた秘かな恐怖を打ち消すに適當なものではなかつた。私の信仰や、身分や、家族についての問答の後、だしぬけに私の母親は墮罪したか奈何だと訊いた。むら／＼と萌しかけた私の憤激は恐ろしさに鎮められた。私は唯母の然うでな

つたことを望むといふこと、神は母の最後を照し給うたであらうといふことを答へる丈にして置いた。僧は何とも言はなかつたが、その澁面は決して同意の證據とは思へなかつた。

(二) 顯理四世が一五九三年に新教を棄てて舊教に歸依したことをいふ。

何も彼も濟んで、これから自分の望んでゐた地位が貰へると思つてゐると、喜捨で集まつた小錢の八圓強を呉れて表へ出された。彼等は私に、善き信者に生きよ、聖寵に忠信なれと戒め、未來を祝福して、門を鎖めた。そして一切が消え失せた。

で、いろ／＼の大望が、一時に雲隠れした。そして今まで自分の取つて來た自己本位の手數から私に残つたものと云つては、唯私が同時に變節者であり被欺者であつたといふ思ひ出のみであつた。私が輝かしい幸福の目論見から不幸のどん底に陥ちたのを見た時、朝には住むべき宮殿の選擇に餘念もなかつた者が、夕には路傍に眠る外なくなつたのを見た時、私の心中にどんな激變が起らなければならなかつたかは、察するに難くない。私がこの不幸を自分の所爲として身を責めるにつけて、我が過失の悔恨が激する丈、それ丈深い絶望に沈み始めたとは思ふであらう。が、全く然うでなかつた。私が二箇月以上も幽閉を喰つたのは生れて初めての事であつた。第一に私の味はつたのは、取り復した自由の感情であつた。長いこと奴隸の状態であつて、今また自己の支配者となり、思ふまゝに振舞へるやうになつた私は、資力の裕かな大都、高貴の人の多い大都の眞中に自分を見出した。私の技能と功績とがその人々に認められさへすれば、好遇を受ける事は間違ひもなかつた。それを待つには十分の時もあり、八圓といふ衣兜の金は、費ひ切れない

財寶と思はれた。この金は誰に報告もせず、自分の好きなやうに使つていい金だつた。私がこれ程金持だと思つたのは初めてだ。落膽と悲歎とに沈むのでなく、唯希望を變へた丈である。自重の念はその爲に何物をも失はなかつた。私がこんなに自信と安心とを感じた事は曾てないことであつた。早や幸運が成就したものと思つた。そしてそれが自分の獨力で得られたのを大したものだと思つた。

(一) ルソオ此の時十六歳。後四十歳に及んで、人はその生得の宗教を奉ぜねばならぬといふ考から、再び新教に復歸した。

まづ最初に市中を駈け歩いて、好奇心を満足させた。併しそれは自分の自由の一端を試みたに過ぎなかつた。私は兵士の上番を見に行つた。兵器がひどく氣に入つた。行列に追隨して歩いた。僧侶の唱ふ頌歌にも聴き入つた。王宮拜觀にも行つた。こはこは近寄つた。他の人も這入るので後から隨いて行くと、入れてくれた。これは多分私の抱へてゐた小さい荷物のお蔭だらう。それとはかく、王宮の中に這入つたといふのでえらい者の氣になつた。もう自分は其處の人になり済ました。往つたり來たりで到頭疲れて來た。腹は減る、暑くなつたので、牛乳屋へ飛び込んだ。ジュンカとクリムと、何より好物の上等のピエモンテの棒麵包二片を貰つて、十錢ばかりで後先に無い旨い飯を喰つた。

私は宿を見附けなくてはならなかつた。ピエモンテ語が相當に話せるやうになつてゐたから、それを見出すのに困りもしなかつた。そして自分の好みよりも、財布の都合を考へて宿を擇ぶ丈

の心得はあつた。ポオ町の或る軍人の細君が、一泊二錢で奉公口のない傭人を泊めてゐると教へられた。私は其の家で、粗末な寢臺が一つ空いてゐるのを見てそれを取つた。細君は年若で、近頃結婚したのだが、もう子供が五六人もあつた。細君も、子供も、客も、皆一緒に部屋に寝た。私の此の家に居る間は毎晩斯うであつた。併し彼女は人の好い女であつた。車夫のやうな汚い口を叩いたり、いつも扮装は檢束が無かつたが、温か味があつて世話好きで、私に親切にして、役にも立つてくれた。

私は獨立と、好奇心との喜びに夢中になつて日を送つた。市街の内外をぶらついて、新奇な物とさへ見れば、探し出して觀て廻つた。巢立ちしたばかりの、首府を見たこともない若者に取つては、總ての物が新奇に見えた。殊に極まつて私は王宮に行つて、毎朝きつと王の彌撒に出た。一つ會堂で、王や侍臣と一緒にされるのが嬉しかつたのである。が、ぼつ／＼萌しかけてゐた音楽の興味が、王宮の美觀よりも、一層多く此の精勤の原因となつた。王宮は見易くて何時も同じで、長く私を惹き附けないからである。當時サルヂニヤ王は、歐羅巴で最もすぐれた樂團を持つてゐた。ソミイス、デジャルダン、ベヅッチ一家などが、入り替り立ち替り、此處で時めかした。音律が正しくさへあれば、どんな樂器を鳴らしてもすぐに恐悦する一人の少年を惹き附けるのに、こんな大したもの是要らなかつたのだ。それに私は自分の目を射る莊嚴に對しては、ただ愚かに驚歎するのみで、羨む心はなかつた。唯一つ、王宮の有らゆる光彩の中で私の心を惹いたのは、此の内に私の尊敬を値し、互ひの間にロマンスを作り出すに足るやうな、姫君が居ないだらうか

を知る事であつた。

(一) この中最も有名なのはソミイスである。ヴァイオリンのピエモンテ派を創め、又宮廷の樂長にもなつた。非常に設備の豊かな演奏を聴かせたといふことである。

其のロマンスの一つが實現されさうになつてゐたのだ。舞臺はずつと見劣りするが、若し成就しさをしたら、幾倍かまさつて楽しい歡喜を見出したところであつた。

約つましくははるだが、財布は何時しか軽くなつて來た。が、この儉約は、用心から來たのでなくて嗜好の淡泊に由つたのである。この嗜好は、今日の贅澤な習慣にも變らなかつた。田舎料理より旨い物があらうとは、その時分は固より、今でも思ひ寄らない。乳製品、鶏卵、野菜、乾酪、黒麵包、並酒で、私には大御馳走である。料理長や給仕等が、私の周圍からうるさく付き纏はなくても、私の盛んな食欲がそれを補ふのである。その頃私が六スウか七スウで喰つた食事の方が、後に六フラン、七フラン出したより遙かに結構なものだつた。で、私は贅澤がしたいと思はなかつたから、飲食に冷淡であつたのだ。いや、冷淡と言つても語弊がある、私は出来る丈味官を悦ばせたのである。梨子とジュンカと乾酪と棒麵包と、ナイフで切れさうなモンフェルアートの粗酒二三杯とは、私を最も幸福な食道樂にくれたのである。併し然うしたところで、八圓の金は知れてゐる。私は毎日それが氣遣はしくなつて來た。向う見ずな齡でありながら、未來を思ふ不安は、いつか恐怖に變じて行つた。無数の空想の中から、纔かに残つたのは、衣食の道を見出す空想であつた、それすら容易に實現されるものでなかつた。元の職業の事も考へて見た。が、

儲はれて行く程の技術も無く、その儲主すらもトリノには澤山なかつた。で好い事が見つかるまで、方々の舗を廻つて歩いて、向う任せの安い値段で註文が取れる積りで、皿小鉢などに名前の頭字かしらや紋章を彫らせて貰はうとした。これも餘り香ばしい事もなかつた。行く先々で斷られて了つた。偶たまに仕事はあつても、食事の代も十分に得られなかつた。ところが或る朝、コントラ・ノオヴァオヴァを通つて行くと、或る店臺カウチの硝子戸越しに、若い主婦が居た。餘程愛嬌のある惹き附けられるやうな女で、婦人の前では尻込する私も、ずつと這入つて、仕事を求めて見た。彼女は刎ね附けもしないで、私に腰を卸させて身の上話をさせて、氣の毒がつて、力をお落しでない、善き基督の信者達は、お前を見棄てはしなからうと言ひ聞かせた。それから、私の要るといふ道具を近所の金具屋へ取りに遣つてゐる間に、臺所へ行つて朝飯に呼んでくれた。此の序開きは吉よい前兆に見えた。次の幕もそれを裏切らなかつた。彼女は私の仕事に満足したらしかつた。少し私が落ち着いてお饒舌を始めると、それがまた餘計氣に入られた。彼女はげげしく粉飾めかしてゐた。淑やかな容子に似ず、此の派手に私は氣を吞まれてゐたのである。併し、なさけ溢れるやうな待遇、思ひ遣のある聲音こゝろ、やさしくて媚びるやうな舉止とりなしは、程なく私を落ち着かせた。自分は既もち占めたと思つた、然う思つたにつけて一層行く行つた。併し、彼女は伊太利亞女であり、それに如何にも美しく婀娜えなつぽい位だが、不思議に身持が堅く、其處へ私がひどい臆病と來てゐるから、直ぐに話が纏まることは容易でなかつた。此の戀の冒險を物にする時間も私達に無かつた。私は彼女と過ごした僅かな瞬間を思ひ出して、彌増さる魅力を感じないことがない。そしてその

際に、私が言ひ様もなく甘くて清らかな戀の快味を、その出花に味はつたと言ひ得られる。

彼女は甚くきびきびした褐色の女だが、その美しい顔に現れた善良な性質は、その快活さを懐かしいものにした。彼女は名をバジル夫人と言つた。夫は主婦とは齡が差ひ、随分な嫉妬焼きで、自分の旅行中は女に縁の無ささうな無愛想な番頭に見張りをさせて置いた。番頭はそれでも己惚無しにはゐなかつた、それを大抵は不機嫌に依つて見せてゐた。彼は笛が上手で、私はそれを聴くのが好きだつたが、その不機嫌は多く私の方へ來た。この新エジストは、私が主婦の室に這入るたびに必とぶつぶつ言つた。彼は私を蔑視んだ代りに、主婦から旨く復讐された。彼を惱ます爲に、その面前で私を可愛がつて楽しんだものとも思はれた。斯うした復讐も嬉しくなくはなかつたが、主婦と二人切りの時だつたら、どんなに嬉しかつたらう。が、彼女は其處まで深入しなかつた、少くとも同じやうな動作をしなかつた。或は私を若過ぎると思つたのか、思ひ切つて自分から打ち出せなかつたのか、それとも本氣に堅くしてゐる氣であつたのか、彼女は其の時何となく控へ目にしてゐた。私は悲觀はしなかつたが、何故だか妙に氣が怯けた。私はヴァラン夫人に向つた時のやうな、親しい、眞實な尊敬心は彼女に對して感じなかつたが、もつと遠慮があつて、もつと打ち解け悪いやうな感じがした。どきまぎしたり顫へたりした。彼女と顔を合はせることも出來ず、呼吸もしにくかつた。かと言つて彼女の傍を離れる事は死よりも辛かつた。着物の花瓣、綺麗な足先、手套と袖の間から洩れて見えるむつちりと白い腕、頸と襟卷の隙から出た部分、向うに氣取られずに、私は眺め得るだけの部分を、慾深い眼で飽かず眺めた。各々の部

分は他の部分の印象を強めた。眼で見える處は勿論、隠れた部分まで注意してゐると、眼は昏み、胸は壓しつぶされ、刻々に苦しくなる呼吸は、鎮めるのに非常に骨が折れた。私は唯聲を立てずに、溜息を洩らすことしか出來なかつたが、私達の屢々出會した沈黙の時の事として、其の具合の悪さは大抵でなかつた。仕合せと主婦は一心に仕事をしてゐて、そんな事とは氣附かない風に見えた。それでも、幾らかの思ひ遣りから、折々襟卷が擴がつて見えることがあつた。此の危険な見もので私は茫うとなつて、もう無我夢中にならうとすると、彼女は落ちついた調子で何か言ひ出して、忽ち私を我に歸らせた。

(一) 希臘傳説に、ミセエヌ王アガメムノンの従兄弟。王がトロヤに遠征の不在中、王妃クリテムネストルを口説き落して、不義の淫樂を縱にした。王が凱旋の後、其の罪を懼れたのと、王がトロヤから連れて來たプリアム王の息女カサンドルに對する王妃の嫉妬の爲に、共謀して王を浴場で殺した。不義の二人も亦妃の子オレストに殺された。

私はこんな風で唯一人ゐる彼女を幾度も見たが、一語、一舉動、表情の溢れた一瞥にも、二人の間に互ひの情意を通じ合ふことがなかつたのである。私に取つて懊惱の極である此の状態も、尙且私には嬉しかつた。而も私の單純な心に、此の懊惱の譯を考へ附けることは出來なかつた。斯うした下らない密會は、彼女もまんざら厭でなかつたらしい。少くとも彼女は度々その機會を作つた。その時の彼女の舉動と、私に取らせた舉動から考へれば、彼女の方に深い意味のなかつたことは明かである。

或る日、彼女が番頭の馬鹿話に飽きて自分の室に退つた時、私は奥の間で大急ぎに仕事を済ま

してその迹に隨いて行つた。室の扉が半分開け放してあつたので、竊と這入つた。彼女は窓際で、向う向きになつて刺繡をしてゐた。私の來たことは分らず、表で馬車の音が騒々しくて、私が聞えもしなかつた。いつも着附が好いところへ、今日は何となく婀娜つぽい。風情ある姿で、心もち俯首になつて眞つ白い領足を開け放しにしてゐる。品良く結げた髪に花が挿してある。その姿には一種の魅力が漲つてゐた。それを見分けようと思へば見分けられたのだが、氣が茫つとなつて了つた。私は興奮して、兩腕を彼女の方に差し伸べながら、室の入口にべつたりと膝を突いた。大丈夫聞えはしなと思ひ込み、見つかるだらうとも考へなかつたのだ。ところが、燧爐の上の姿見が私を裏切つた。この狂態が彼女にどんな影響を與へたかは知らない。彼女は此方を見もせず、物も言はなかつた。が、半分首を振り向けて、ちよつと指先で其の足元のマットを指した。私が慄つとするのと、呀と言ふのと、マットの處へ飛んで出るのが一緒であつた。その場合、それ以上に奈何しようといふ野心もなく、一言も言はず、女を見上げもせず、窮屈な姿勢ではゐたが、一瞬間その膝に凭り掛る爲に彼女に觸れることさへ得しなかつたのは、不思議とも見えやう。私は黙つて、動かないで居たけれど、實際平靜だつたのではない。興奮や、歡喜や、感謝や、異體の知れない熱烈な欲求が私に現れてゐた。此の欲求は對手の氣を悪くする懸念の爲に抑へられた。私の若い心は、此の懸念に安んずることが出来なかつたのである。

彼女は私より平靜にも、大膽にも見えなかつた。其處に居る私を見て胸を病まし、私を引き寄せたので當惑し、正しく無分別に見せた合圖の成り行を後悔し始めて、私をあしらひもせず、然

ればとて突き放しもしなかつた。眼を仕事から放さずに、足元にゐる私を見ないかのやうな風をしようとした。併し、私の愚かな心にも、彼女も私と同様の惱ましさと、多分欲求をも持つてゐること、彼女も亦私のやうな羞恥に抑へられてゐることを、判斷することが出来た。と云つてそれが爲にその羞恥に打ち克つ丈の勇氣が得られたのでもなかつた。私の考では、五つなり六つなり齡が上なら、思ひ切つた事は向うから仕掛けて來なくてはならない筈だつた。それに私を促さないのを見ると、彼女は私が出すのを好まないのだ、と思つた。今になつて考へて見ても、私の考が正しかつたと思ふ。そして確かに彼女は、私のやうな初心者には、勇氣を與へるだけでなく、教へることも、必要だといふことを知らないやうな女ではなかつた。

若し此處へ邪魔が這入らなかつたら、この熱烈で沈靜した場面がどう終局を告げたか、又此の滑稽で愉快な状態の中に何時まで私が固くなつてゐたか分らない。私が興奮し切つてゐた時、次の臺所の扉の開く音がした。彼女はぎよつとして聲と身振で強く、

「さあお起ち。ロジイナですよ。」

急いで起ち上りさまに、私は彼女が差し出す片手を握つて、二度燃えるやうな接吻をした。二度目の時は、その美しい手が、幾らか私の吻に押し附けられたやうに感じた。曾て私はこんな快い瞬間に會つたことがない。併し失つた機會は又と歸つて來なかつた。そして私達の若い戀は、それ切で終つた。

この愛すべき婦人の姿が、心の底にこれ程懐しい形に彫り付けられて残つたのは、その爲だら

う。しかも私が段々世の中と女とを知つて来る程、この姿は鮮かになり増さるばかりである。若し彼女が、少しでも経験のある女だつたら、その時この小僧を勵ますのに他の方法を擇んだに違ひない。併し、彼女の心は、弱かつたにしても純潔なものであつた。彼女は牽かれる儘に、われ知らず本能に負けたのだ。それを彼女の最初の不貞だつたと言へば言へるところだ。そして私は自分の羞恥より彼女の羞恥を制するのに一層の骨折を要したであらうと思ふ。それ程までにせずとも、私は言ひ知らぬ悦樂を彼女から味はつた。女を我が物にして感じた如何なる快味も、此の女の足元で、その着物に觸れることも得せず過ぎた二分間丈の値もない。否、吾々の愛する純潔な婦人の興へてくれる悦樂に比ぶべきものは斷じて無い。さういふ女の傍では、あらゆる事が有難い。ほんの指先の合圖、軽く私の吻に押し附けた手、唯それ丈がバジル夫人から受けた恩恵だが、それ丈でも思ひ出す度に私は上の空になる。

その後二日の間、私は次の密會を狙つてゐたが駄目だつた。その瞬間を見出すことが出来なかつた。彼女の方にもその機會を作らうとする様子がなかつた。素振さへ、冷淡と云ふのでもないが、何時もよりはつゝましくしてゐた。それに私の視線を避けたのは、自分の目を十分に支配することが出来ないといふ心配からだつたと思ふ。忌ま／＼しい番頭はいよ／＼暴れ出した。人を莫迦にしたり嘲つたりさへした。女に縋つて旨いことをする奴だなどと言つた。私は自分の不謹慎な行を怖れた。そして、自分は早や主婦と默契が出来てゐるやうに思つたので、是まで餘り秘密にする必要の無かつた女好きといふことを秘密にするやうにした。その爲に、此の好みを満たす機會を求めるのに一層用心深くなつた。そして安全な機會ばかり求めたので、全く見出されな

いで了つた。

是も亦私の何時までも癒せなかつた空想病の一つである。それが性來の臆病と結び附いて、ひどく番頭の豫言を裏切つたのである。私は斷言する、私の戀は餘りに眞劍過ぎ眞面目過ぎて、容易に望を達し得なかつたのである。如何な熱情も、私の位激しくて而も潔白なものは決して無い。戀とても私の程熱烈で眞實で無邪氣なのは決して無い。わが愛する女の爲なら、幾度でも自分の幸福を犠牲にしたであらう。對手の名譽は自分の生命よりも私には大切であつた。總ての歡樂に換へても、相手に一分間の不安をも興へなかつたであらう。斯ういふ譯で、戀をするのに心配や氣兼ねや取越苦勞の爲に、一度も成功した例がなかつた。私が女に成功しなかつたのは、いつも餘り女を愛し過ぎることから來たのである。

もう一度笛手のエジストに戻る。不思議にも此の謀叛人が、愈々氣が揉めて來れば來る程、愈々他の機嫌を取るやうになつて來た。主婦は私に眼を懸けてくれた始めから、私を舖で働かせるつもりでゐたのだ。私は算術が一通り出來た。彼女は私に簿記を教へることを番頭に命じた。ところが氣むづかし屋は、自分の地位を奪はれでもするかやうに、その言ひつけを取り合はなかつた。それ故私の仕事といへば、彫刻の後で、計算書や覺書を寫したり、帳簿を清書したり、伊太利亞語の商用文を佛文に翻譯する位のものであつた。すると忽ち此の男は、一旦刎ね附けた主婦の言ひつけを復た取り上げる心になり、私に複式簿記を稽古させて、親方が歸つて來たら、お役

に立てるやうにして遣らうと言ひ出した。その言葉にも様子にも、何となく空々しい、陰險な、皮肉な處があつて信用が措けなかつた。主婦は私の答を待たずに、お前の好意は此の子も喜ぶだらうが、もつと好い運に遇はせてやりたいものだ、是位伶俐な子が、多寡が商人の番頭で果てるのはなさない、膠もなく彼に言つた。

主婦は始終私の利益になる處へ紹介して上げようと言つてゐた。彼女は賢くも、もう私を遠ざけていい時といふことに氣が附いたのだ。二人が無言の訣別は、木曜日に取り交された。日曜日に晩餐會を催した。その席に私も列なり、一人の温厚さうな聖ドメニコ派の僧も出た、私はこの人に紹介された。僧は親切に私を遇らひ、改宗の祝福を述べ、且、主婦から仔細を聞き知つてゐたものと見えて、私の身の上についてこまかくと話してくれた。それから私の頬の上を、手の甲で二度許り叩いて、善い人になれ、確りしなくてはいけない、訪ねて來たらゆつくり話をしようと言つてくれた。家中が此の人を大切にするので、私は名望家だらうと思つた。主婦に對する父親らしい仕打から、それが彼女の懺悔僧だらうとも思つた。彼の禮儀ある親しさの中には、その女弟子に對する敬重の意味さへ交つてゐたことを今思ひ出すが、その時はそれ程の感じを與へなかつた。その時若し私がもう少し鋭敏であつたら、懺悔僧にまで尊敬されるやうな若い婦人の感情を自分が動かし得たといふことを、どんなに嬉しく思つたらう。

食卓は一同が着席出来る丈大きくなかつた。もう一脚小さいのを持ち出して、其處で私は番頭君と二人で楽しい對座を作つた。其處に居ても私は好意と御馳走とは何の損もしなかつた。種

種の皿が小卓に運ばれたが、それは決して番頭の爲にはなかつた。こゝまでは何事も都合がよかつた。女連は嘆き、男客は氣取つてゐた。主婦は滴るばかりの愛嬌を湛へて挨拶をした。この會食の最中に、門前で驛車の停まる音がする。誰か這入つて來る。バジルである。その時から私の厭になつた、金釧鈕の緋色の服で、這入つて來たのが今も見えるやうな氣がする。彼は脊の高い、惻愍な、押し出しの好い男であつた。彼は足音高く、且、其處には自分の友人丈しか居ないので、目下でも不意打を喰はせるやうな風で這入つて來る。妻は彼の頸根つこへ飛び附いて、兩手を執つて無茶に甘える。それを彼は自分が仕返さずに受ける。挨拶をする、料理が出る、食ひ始める。旅行談が始まるか始まらないのに、彼は小卓に眼を着けて、其處にゐる小僧はあれは何だ、と荒々しく訊く。主婦は露骨に言つて了ふ。此家で寢泊するのかと主人が訊く。いゝえと答へる。

「何故だ。」彼は忿々と、「晝間此家にありや夜も泊る譯ぢやないか。」僧が此の話を引き取つた。主婦を眞面目に讀めて、それから言葉少なに私をも讀め、さて附け加へて、細君の奇特な慈悲を咎めないで君もその片腕になるべきではないか、聊かも不謹慎な點がないのだからと言つた。主人は僧侶の前でといふ心から、半ば壓へた瀟灑紛れの聲で返辭した。けれども主人が私の事を聞き知つてゐたことと、番頭がおせつかいをしたのだといふことを私に想像させるには十分であつた。

人々が食卓を離れるや否、主人から遣はされた番頭が、私にたつた今此の家を出て行け、二度

と此處へ足踏みするなといふ命令を、揚々として傳へに來た。番頭は其の口上に輪を掛けて、出來る丈失敬な残酷なものにした。私は何も言はずに出て行つた。其の愛すべき婦人を見棄てて行くことよりも、その婦人をあの亂暴な亭主の犠牲に残して行くといふことが一層堪へられなかつた。妻の不貞を喜ばないといふことは、如何にも尤もと言はなければならぬ。併し、幾ら憤み深く、又素性が良くとも、根が伊太利亞女だ、感じ易くもあり、復讐心もある。で、私は思ふ、彼女への仕打は、何んぞ知らん彼の虞れてゐる不祥事を招くのに恰好のものであつた。

初めての戀の冒険はこんな始末となつた。私は二三度その町を往來して、せめて絶えず惜しまれるその人と、もう一度會ひたいと思つた。ところが、彼女の代りに、亭主と見張りの番頭丈しか見えなかつた。番頭は私を見附けると舗の物差で、引き寄せるのでないもつと意味ありげな手振をして見せた。それ程警戒を怠らないと思つては、私も既う元氣が出ず、其處を通らないうことにした。唯彼女に紹介された僧には會ひたいと思つた。生憎その名前を知らなかつた。どうにかして會はれないものかと、幾度か空しく修道院の周圍を彷徨いて見た。とかくする中他の事件が、バジル夫人の楽しい思ひ出を私から奪つて了つた。そして暫くの間に、すつかり彼女を忘れて了つて、復た元の無邪氣な世間見ずになり、美しい女に動かされる事さへ無くなつた。

それでも主婦の恵みで少し許り着物の用意が出來た。けれども餘程約しくして、見榮よりも清楚を重く見、派手にするよりも不自由さへしなければといふ、女子らしい細心に依つたのであつた。ジュネエヴから持つて來た上衣は、未だしやんとしてゐて着られた。彼女は唯その上へ帽子

とシャツを呉れたのである。カフスが無かつたので、餘程欲しいとは思つてゐたが彼女は與れようとしなかつた。彼女は私に洒然とした風をさせて置けばよかつたのである、それも私が彼女の前にゐる中は、そんな心配も要らなかつたのである。

事件から間もなく、前に言つた通り、私に親切を懸けてくれた宿の細君が、私の地位が見附かつたらしいといふこと、或る貴婦人が私に會つて見たがつてゐるといふことを知らせてくれた。聞くとは何時もの癖で、大きな戀の冒険を始めたやうに思つて了つた。それは私の描いたほど花やかなものでなかつた。私は取り持をしてくれた召使と連れて、その夫人に目見得に行つた。彼女は私に物を訊ね、試験をもした。私は氣に入られないではなかつた。直ぐに住み込んだ。ところが騷人などは思ひも寄らないことで、只の下男としてであつた。他の者等と同じ色の服に着替へたが、肩章を貰はなかつた處だけ皆と違つてゐた。仕着せに縁飾がないから、丁度商人の上衣のやうだつた。これが私の大望の漕ぎ附けた思ひ掛けない最期なのだ。

屋敷の主人ヴェルセリ伯爵夫人は寡婦で子供が無かつた。亡夫はピエモンテの人であつた。私は夫人をば始終サヅワ生れの人と思つてゐた。ピエモンテの人にしては如何にも佛蘭西語が巧過ぎるし、發音が如何にも純粹だつたからである。齡は中年で、姿に品位があり、才識は練れてゐて、佛蘭西文學が好きで、善く通じてゐた。随分物を書いたが、皆佛文で書いた。彼女の書簡にはセヴィニエ夫人の書簡の風と、その雅致とがあつて、その中の或る物では、殆ど二人を識別しがたいだらう。胸部の癰腫で一方ならず苦しんで、自分では書けないので、その口授を筆記す

る事が私の主な、而も厭でない仕事であつた。

(1) Marquise de Sévigné. その娘の Mme de Grignan に與へた書簡で有名な人。一六二六—九六。

ヴェルセリ夫人は才識が豊かな許りでなく、高尚な、強固な精神をも持つてゐた。私は此の人の最後の病氣に付き添つて、苦悶し絶命する彼女を見たが、一刻も弱點を見せたことはなく、自制のために少しの努力もせず、女子の本領を離れる事もなく、且つそれが哲學から來てゐるのだと考へたこともなかつた。哲學といふ語は未だ流行り出さない頃のことと、今日用ひられるやうな意味で彼女は知つてもゐなかつた。斯うした強固な性格は、時として冷酷に流れることもあつた。自身に對すると同様、他人に對しても無神経なやうに見えた。不幸な者を惠むにも、其の事が善事だからするので、心から不憫と思つてするのではなかつた。三箇月彼女の傍に居る中に、私も幾らか此の無神経に出會した。行末の見込があつて始終自分の下に居る若者に目を懸けてやり、自分の死後其の若者が救助と支持の必要に迫られるといふことを考へてやるのは當然の事である。それにも拘らず、私を格別注意するに足る人間と思はなかつたためか、或は彼女を取り巻いてゐる人達が、自分達以外の者の事を考へさせないやうにした爲か、私にいつては何一つしてくれなかつた。

それでも彼女が私を理解したがつてゐたことは善く覺えてゐる。彼女は時々私に物を訊いた。私がヴァラン夫人に出す手紙を見せたり、自分の感情を話したりするのを甚く悦んだ。それでも、彼女が自分の感情を決して見せないで、私の感情を知らうとしたのは、確かに謬つてゐた。私の

心は、他人にも同じ心があると見さへすれば、喜んで展げて見せたいのである。私の答に對して少しも賞讃や非難の證を見せない乾いた冷たい尋問は、毫しも私に氣を許させない。私の饒舌が向うに面白いのか面白くないのか、それが少しも解らない時は氣遣ひで堪らない。そして自分の感想を發表するよりも、自分の不利になりさうな事は何も言ふまいと思ふ。他人を理解しようとして斯ういふ冷淡な態度で物を訊くのは、才智に誇る婦人の通癖だと、その後私は氣が附いた。然ういふ女は、自分達の感情を現さない方が、他人の感情を善く測ることが出来ると思つて、それが却つて感情を見せようとする相手の勇氣を奪ふものである事に氣が附かない。問ひ掛けられた男は、それ丈で用心し始める。そして眞に同情する氣も無しに、唯何事をか口走らせようとするのみだと感づけば、嘘を吐くか、黙つて了ふか、ます／＼用心深くなる。寧ろ間抜けと思はれても、其の手なぞに乗らなくなる。だから、自分の心を包んで置いて他人の心を讀まうとするのは愚な仕方である。

ヴェルセリ夫人は決して私に愛情や、哀憐や、好意を帯びた一語をも話さなかつた。彼女は冷かに私に尋問した。私は隔意を以て答へた。その答が如何にも内端なので、彼女はそれを平凡と思つて厭になつたに違ひない。後には用事の外は私に問ひも語りもしなくなつた。彼女は私の眞價よりも、自分の作り上げた物を本にして判断を下した。私を下男としてのみ見てゐた爲に、私をそれ以外の人間と認めることが出来なかつた。

私は其の時から、この自己隠蔽の惡戯に氣附いたと思ふ。これが生涯私を悩ましたもので、又

さういふことをさせる形式的な秩序といふものに、自然反感を起すやうになつた。ヴェルセリ夫人には子供がなかつたので、ラ・ロック伯爵といふ甥を相續人にした。如才なく夫人の機嫌を取る人であつた。その外、主な側近の人達も、夫人の死期の近いのを見て、自分達を忘れなかつた。彼女の周囲には取り入る者が夥しくあつたので、彼女はとても私の事を考へてゐられなかつた。屋敷の執事は、ロレンチと言ふ世才に長けた人であつた。その細君がまた一倍の慳吝者で、雇女といふよりも、夫人のお友達といふ格でゐた位、夫人の寵を恣にしてゐた。彼女はボンタルといふ姪を、夫人の小間使に付けて置いた。慧敏い間諜で、侍女を氣取り、小母を助けて夫人を丸めて了つたので、夫人は二女の眼で物を視、二女の手で事をするだけであつた。私は、この三人の氣に入られる名譽を持たなかつた。彼等に服従はしたが、その手足にはならなかつた。自分等が俱に戴く主人の外に、更にまたその召使どもの召使であらねばならぬとは思はなかつたのだ。その上、私はその人達に取つて氣の置ける人間でもあつた。彼等は、私といふものが、居るべき地位に居ないといふことを善く知つてゐた。若し主人もそれを知つて私に相當な地位を與へれば、自分達の分け前が縮まるといふ心配があつた。何故なれば、慾に惚けて正義を知らない此の類の人間は、他人の方へ行く遺産を、彼等自身の資産から減られたものと見做すからである。そこで、彼等は一致して私を主人の眼から遠ざけて了はうとした。夫人は書簡を書くことを好んだ。それが病中の慰みであつた。彼等はそれを面白からず思つて、疲勞を來たすからと言つて、醫者からそれを罷めさせて了つた。私では役が勤まらないといふ口實で、代りにごつい擔荷夫を二人夫人

の傍に附けた。斯うして一週間私が夫人の室に入らないでゐた間に、ちやんと遺言書を作らせて了つた。それが濟むと私は復た元の通り出入りしたのは事實だ。そして私は誰よりも忠實に仕へた。此の哀むべき婦人の苦痛が、私の心を掻きむしつたからである。苦痛と闘ふ彼女の健氣さが、非常に尊く懐かしく思はれて、私は人知れぬ眞心からの涙を、したゝか其の室で注いだ。私達は到頭彼女を失つた。私はその息を引き取るのを見た。彼女の一生は、才識ある女子のそれであり、其の死は哲人のそれであつた。彼女は確かに、其の明るい靈に依つて、加特力教を私に慕はしく思はせた。彼女は此の靈を以て、疎略にもせず見えにもせず、克く宗教上の義務を果たしたのである。彼女は本來眞面目であつた。病氣の終り頃から、伴り事とは思へない様な快活さを見せた。それは境遇の悲哀に對して、理性が與へた埋合せに過ぎなかつた。床に就いたのは最後の二日だけで、その間も絶えず誰とでも平氣に物語つた。いよく口も利けなくなり、死苦が迫つた時、彼女は一つ放屁をした。

「よかつたわ。」彼女は寢返りをしながら、「これが出れば、未だ死なない。」
これが彼女の最後の言葉だつた。

彼女は下々の召使共に、一年分の給金を遺してやつた。けれども、私は家人の中に這入らなかつたから、何も貰はなかつた。でもラ・ロック伯は十二圓貰つてくれた。そして着てゐた新しい上衣も呉れた。これはロレンチが剃ぎ取らうとしてゐたものである。尙、私の口を見付けてやらう、遊びにも來いと言つてくれた。二三度訪ねて見たが、話すことが出来なかつた。直ぐに厭に

なつて、もう訪問しなかつた。私が悪かつたことは懸て分る。

ヴェルセリ家に滞在してゐた間の話が、これでお終しまひだといひのだが、外見上私の状態は同一でも、事實此家へ入り込んだ時と同一で出て行つたのではなかつた。私は、或る罪惡の長い追憶おもひと、悔恨の堪へ難い重荷とを背負つて來たのである。その爲に四十年後の今日、良心は尙苦しめられ、苦思は衰へる代りに齡を取る程劇しくなる。一兒童の過失が、こんな痛ましい結果を招かうとは誰が想はう。私の心が定まらないのは、疑も無くその結果の爲である。私は正ましく、素直な、見上げた、可愛い、自分よりは遙かに優れた一人の少女を、恥辱と不幸の裡に陥れたのである。

一家の瓦解に當つて、少しの混雜も起らず、家財も紛失しないといふことは稀である。ところが、召使達の忠實と、ロレンチ夫婦の注意とで何處にも缺陷あなを開けなかつた。唯ひとりボンタル嬢が、使ひ舊した紅べにと銀色とのリボン一筋を失くした。外にもいろ／＼結構なものは私の手近にあつたが、此のリボンだけを出來心で私が盗んだのである。そして別に隠しもしなかつたので、直ぐに見附かつた。何處でそれを盗んだかを詰問された。私はどぎまぎし、口吃くちくもつてゐたが、終に顔を赧かくして、マリオンが自分に呉れたのだと言つて了つた。マリオンはモリエヌの少女で料理人になつてゐた。それは夫人がもう饗應を罷め、珍料理よりもスウプの必要を感じて前の料理人を解雇した時であつた。當にマリオンは美しい許りでなく、山間でなくては見られない清新な色澤いろつやをしてゐた。殊にその謙遜と溫雅の風を見たものは、誰でも彼女を愛せずにはゐられなかつた。善良で、伶俐で、忠實此の上もない少女でもあつた。それが爲に、私が此の娘の名を指したので

皆びつくりした。ところで、私も彼女に劣らず信用があつたから、二人の孰れが泥棒なのかを訊さなくてはならなかつた。マリオンは召び出された。多勢集まつた。ラ・ロック伯爵も見えた。彼女が來る、その前へリボンが出る。私はづう／＼しく彼女を誣うひる。彼女は呆れて黙つてゐる。惡魔も挫くがれるやうな其の一瞥にも、私の殘忍な心は平氣で居る。彼女は終に斷乎として否定する。併し怒りもせずに私に向つて、もう一度思ひ返すやう、曾て私を苦しめた事もない潔白な少女に、恥を搔かせないやうにと説き聽かせる。と、私は鬼を欺く厚顔あつかましさで自分の主張を突つばつて、彼女がリボンをくれたのだといふ事を面と向つて言ひ放つ。憐れな少女は涙に暮れて、唯これ丈言つた。

「まあ、ルソオさん。お前は善い人だと思つてゐたのに。あたし、どんな目に遭はされたつてお前を見做はうとは思ひません。」

唯是だけであつた。彼女は手強く併し無造作に辯明はしたが、少しも私を罵るやうなことはなかつた。私の決然たる調子に比べてこの溫和おとなしさは、彼女の不利となつた。一方には惡魔のやうな大膽さを、又一方には天使のやうな柔和さを、想像するといふ事は無理だつたからだ。的確な判定は出來なかつたらしいが、臆斷は私の方に有利だつた。人々は多忙に紛れて真相を探つてゐる暇がなかつた。ラ・ロック伯爵が二人を出す時に、有罪者の良心は、無罪者のために復讐するだらう、と言ふ丈で済ました。此の豫言は果して空しくなかつた。一日として事實になつて現れない日は無い。

私の誣告の犠牲者がどう成つたか私は知らない。けれども其の後彼女が、容易に好い地位を見つけたとは思へない。彼女はどうせ名譽に對する痛ましい非難を負うてゐた。その盗みは些細の事にもせよ、結局盗みだ。而も一人の少年を挑む爲の方便であつた。つまり虚言と強情とは、それ程までの惡徳を兼ねた彼女の取り柄を全く無くなして了つたのだ。それでも私は、彼女の悲境と抛棄とを、私の陥れた最大の危険とは思はない。潔白を傷けられた落膽から、年若な彼女がどうなつたかを誰が知らう。そして、若しも彼女を不幸にした悔恨が痛烈だとすれば、自分よりもなほ悪い者にして了つたといふ悔恨がどの様なものであるかは察して貰ひたい。

此の痛ましい思ひ出は時々私を惱まし、まさしく昨日犯した罪でもあるやうに、此の哀れな娘がそれを私に責めに來るのが、寢覺めに見えるくらゐ私を顛倒させる。平和である時はそれ程苦しもしないが、風波に揉まれてゐる時には、迫害された無辜者といふ、私の最大の慰藉はそれが爲に奪はれて了ふ。何かの著作で私の言つた、悔恨は得意の間は熟睡し、失意の時に蹶起するといふことを思ひ知るのである。が、まだ私は友人の胸にこの事を告白して、自分の心を軽くしようと決心することが出来なかつた。極く親しい交情すら、未だ誰にもそれを話させてくれなかつた。ヴァラン夫人にさへ然うであつた。或る殘忍な行爲のために身を責めてゐると自白した丈が精一杯で、その行爲が何であるかを説明した事はない。で、この重荷は、今日に至る迄輕くならず私の良心の上に残つて來た。それゆゑ幾分でも此の負擔を卸したいと思ふ心が、此の告白録を書かうといふ決心を大いに促したと云つていいのである。

私は右の話で有り體の事を述べた。そして私が此處で自分の殘忍な罪を飾つて言つたとは誰も思ふまい。併し、この本の目的を貫く爲には、同時に内面の動機をも曝け出さなくてはならない。眞實を眞實として自身を辯明することを恐れてはならない。あの切羽詰つた瞬間ぐらゐ、私に惡意の無かつたことはないのである。私があゝの不幸な少女を誣ひた時、私の彼女に對する愛情が其の誣告の原因であつたといふ事は不思議だが併し事實である。この女が私の心に浮かんではゐた、この最初に浮かんだものを材料として申し譯をしたのである。自分の爲て遣りたかつた事を、彼女が爲たと誣ひたものだ。リボンを彼女に遣りたかつたから、それを彼女が呉れたと誣ひたものだ。後に彼女の出て來たのを見た時、私の心は掻きむしられるやうだつた。併し、多勢の人の列席といふことは、私の悔悟よりも力強かつた。私は罰を恐れたのでなく、唯恥辱のみを恐れた。が、この恥辱の恐ろしさは、私に取つては死よりも、罪よりも、何物よりもまさるものだつた。大地の中心に身を投じて、窒息することをも辭しなかつたらう。因業な恥辱の念は、一切に打克つた。恥辱のみが私を厚顔ならしめた。そして罪が發覺しかかる程、愈々それに服する辛さが、私を強情ならしめた。事實が暴露して、目のあたり大びらに、竊盜だ、虚言者だ、誣告者だと、宣告される恐怖の外は眼に入らなかつた。満身の狼狽は、他の感情を悉く奪ひ去つた。若し、彼等が我に返らせてくれたら、私は一切を白状したに違ひない。若しもラ・ロック氏が、竊と私を呼んで「何も知らない娘を罪に陥すな。覺えのある事なら、包まず私に言ふがいい。」斯う言つてくれさへすれば、私は其の場で恐れ入つて了つたらう、全くそれに違ひない。それだのに皆は、

私に勇氣を附けなくてはならない場合に、唯氣怯れさせて了つた。年齢といふことも當然酌量さるべき一條件である。私は未だ漸つと兒童期を離れたばかりだつた。謂はば未だ子供だ。若い時の眞正の罪惡は、成人後のそれよりも一層罪は重い。併し單に弱味といふことなら、その罪はずつと軽い。そして私の過失は、畢竟それに外ならなかつたのである。従つて此の思ひ出も、其の惡行から來た結果程、惡行その物で私を苦しめはしない。而も唯一度犯した罪の恐ろしい印象のお蔭で、後半生の間、罪になりさうなあらゆる行爲から保障して貰ふことが出來たのは幸だ。又私が虚言を忌むやうになつたのは、主に今度の虚言を悔いる心から來たのだと思ふ。若しもこれが、私の敢へて信ぜんとする如くに、償ひ得られる罪であるなら、私の後半生を悩ました多大の不幸と、窮苦四十年間の正義と名譽とで償はれなければならぬ。一方氣の毒なマリヨンには幾多の復讐者が世の中に居るのだから、私は甚く彼女を侮辱したもの、何時までも私と同じやうに罪科を背負つて行くものとは思はない。此の事で言ふ丈のことは言ひ悉した。二度とこれは話させて貰ひたくない。

(一) ルソオ後半生の迫害者等を指す。その事は第二部に詳しく出る。

(二) この件に關する悔恨は、ルソオの生兒の處置と共に、その終生の呵責となつてゐるのである。

第三卷

一七二八—一七三一。【十六歳—十九歳】

丁度住み込んだと殆ど同じ有様でヴェルセリ夫人の屋敷を出て、私は復た元の細君の宿に歸つた。其處で五六週間滞在したが、その間健康と若さと無聊とに、時々氣分が慄れ出して來た。苛ししたり、うつとりしたり、夢を見たりした。噎り泣をしたり、溜息を吐いたりした。何とも思ひつかないが、それでゐて自分に不足を感じるやうな一つの幸福に憧れた。此の状態は書くにも書けない、又想像し得る者も少い、何故ならば、多くの人は惱ましくて同時に楽しい、此の生の充實を防遏して了ふからである。これは欲望に酔ひ痴れてゐる中に、その享樂の豫感を與ふるものなのだ。私の燃え立つ血は、處女と女とで絶えず頭腦を満してゐた。けれども女を實際何に使用ふものといふことに氣附かないから、自分流儀の空想で、變な風にそれを使つて、それ以上にどうする事も知らなかつた。そしてこれ等の空想は、私の官能に甚だ不快な活動を與へたが、幸ひとその空想は、此の活動から逃れることを私に教へなかつた。私はゴトン嬢のやうな少女と四半時でも居られるなら、全生涯をも投げ出したであらう。けれども、今は既う幼時の嬉戲その物で夢中になれる時でなかつた。不良な事に對する良心と兄弟分の羞恥心は、齡と共に押し掛けて來て、私の生れつきの臆病を高じさせて、遂に抜き難いものにしてしめた。そしてその頃でも其の

後も、女の方から乗り出して来て、私が引き付けられた時の外は、對手が用心深くも無く、承知するに極まつてゐても、決して猥褻な申し出をすることが出来なかつた。

私は段々興奮して、欲望を満たす途が無いので、突飛な手段でそれを煽り立つた。蔭の暗い細道や物影の破ら屋を捜して、女の傍で斯うして居たいと思ふやうな姿を、遠くから彼女達にして見せた。彼女達の見たのは猥褻な物ではなかつた。私はそんな物を思つてもゐなかつた。それは莫迦々々しい物であつた。それを彼女達に見せて喜んで居る愚かさは説明も出来ない。それから唯一歩進みさへすれば、焦れてゐる取扱ひが受けられたのである。そして私に待ち受ける大膽さがあつたならば、誰か思ひ切りの好い女が、通りがかりにその樂しみを私に與へてくれたことを疑はない。此の愚かさも稍それに近い滑稽な幕で終つた。が、私にはそれ程面白いものではなかつた。

或る日私は、時々家の少女達が水汲みに来る井戸のある庭園の隅の方へ来た。此處には幾筋もの抜け道から洞穴に續く坂があつた。私は闇の中で此の地下道を探つた。長くて暗かつた。そこで私は、これは何處迄も果ての無いものだ、若し自分が見附かつたら、此處が安全な隠れ家になると思つた。その腹で私は、水を汲みに来た少女達に、誘惑するといふよりも可笑しな所作をして見せた。惻巧な娘達は見て見ぬ振をした。或る者はくすくす笑つた。或る者は侮辱されたといふので騒ぎ出した。私は隠れ家へ逃げ込んだ。追つ掛けられた。思ひも寄らない男の聲にぎよつとした。迷ひ子になるのを覺悟して地下道に潛り込んだ。物音、人聲、男の聲は何處までも追つ

掛けて来た。闇を頼みにしてゐたのに、ぱつと明るくなつた。私はぶる／＼となつた。益々潛り込んだ。礎と壁にぶつ突かつた。先へは進めず、此の儘運を天に任せる外無かつた。その途端、私は大男に捉まつた。太い髭、大きな帽子、長い劔の男だ。手に手に帚の柄を提げた四五人の嫗がそれに隨いて来た。その中に、私の事を告げ口したお轉婆も交つてゐた。私の顔を見に来たのだ。

劔の男は私の腕を引つ擱んで、先刻の事を荒々しく詰問した。固より私の返辭は準備されてゐなかつた。けれども私は氣を取り直した。そして此の危急の場合、必死と絞り出した小説めいた申譯で、旨々ごまかした。自分の齡と境遇とに同情を仰ぐといふ調子で、私は、自分は外國の少年貴族だが、發狂したのだ、監禁されさうだから父の家を逃げて来たのだ、若し彼が自分の事を表向にすれば私の最後だ、けれども此の儘宥してくれるなら、他日必ず恩誼に報いようと言つた。すべて豫期に反して、私の辯解と様子とは功を奏した。怕い男は哀を催して、手短かに窺めたり、何も訊かないで溫和しく宥してくれた。私を見送つたお轉婆と嫗等の面つきから見て、あれ程心配した男が大きに自分の爲になつたことと、女共ばかりだつたら決して斯う手輕には免してくれなかつたらうといふことを思つた。女共は何かぶつ／＼言つてゐたが、私は氣にもしなかつた。劔と男とさへ交つてゐなければ、輕捷で元氣な私は、棒切や女共を逸すことはきつと出来たからだつた。

四五日經つて近所の若い學僧と街を通つてゐると、例の劔の男とびつたり出會した。彼は私を

認めた。そして調戲たからかふやうに私の聲色こゝろいろを使つて、私に、「僕は貴族だ、僕は貴族だ。それに僕は意氣地無しなんだ。だが殿下には二度とそこへ來給ふな。」

それ以上何も言はなかつた。私は首を低れて彼を避けたが、心に彼の深慮を謝した。思ふに憎い媼共が、此の男の輕信を嘲つたのであつた。それはとにかく、彼はピエモンテ人ではあつたが、性質たぢの良い人であつた。で、私は感謝の念を催さずに彼を考へたことがない。といふのは、單に人を笑はせたい丈の目的だつたのを、若し彼でない男だつたら、きつと私に恥を搔かせたらうと思はれる位面白い話だつたからである。此の事件は心配した程の結果をも持ち來たさないうで、後まで私を憤ましい者にしてくれた。

ヴェルセリ夫人の屋敷にゐる中に、幾らか知己が出來た。自分の利益になることもあらうと思つて交際してゐた。殊にメラレド伯爵の子供の教師で、サヴワの學僧のゲム(二)といふ人を、私はよく訪ねて行つた。まだ齡も若く、あまり世間に知られてゐなかつたが、分別と誠實と聰明とに満ちて、これまで私の識つた最も人格のある一人であつた。彼の處へ牽かれて行つた私の目的に取つて、頼りになる人でもなく、職業を見附けてくれるほどの勢力もなかつたが、私はそれよりももつと貴い、私の一生を通じて役立つたやうな利益、即ち健全な道德の教訓と、正當な理性の主義とを彼に見出した。私の性向、思想の繼ぎ(三)に來る順序を観ると、何時も高過ぎるか、低過ぎるかであつた。アシル(三)かテルシ(三)ットか、英雄か無頼漢かだ。ゲム師は、私の居るべき處

に私を落ち着かせるやう、又私を容赦もせず失望もさせないで、私を私自身に見させるやうに骨を折つてくれた。私の天分や才能を讀たべると共に、その中からまた妨害物が生れて、それ等を利用させまいとするやうにも思ふ、といふことを附け加へた。で、彼に従へば、その天分や才能は、幸福への階梯としてよりも、幸運無しに濟ます爲の元手として役立つだらうといふのであつた。彼は、今まで私の間違つて考へてゐた、人生の眞の状態を見せてくれた。智慧ある人は、逆境に在つて常に幸福を求め、それに到達する爲の風向に乗ずるといふこと、智慧が無ければ眞の幸福もないといふこと、及び智慧は一切の境遇に伴ふべきものであることを言つて聽かせた。他を支配する者が支配される者よりも餘計智慧があるのでも幸福なのでもないといふ事を聽かせて、「偉大」に對する私の讚美を甚だしく殺ころいだ。其の時の話でどうしても忘れられない事が一つある、若し各人が他の凡ゆる人の心を読み得たならば、向上を望むものよりも、降下を望む者の方が多くなるだらうといふ事である。この考察は如何にも眞實で、少しの誇張をも含まない。これは私をして自分の地位に安んじさせた點で、生涯を通じて非常に役立つたものである。私の誇大な天性が、唯極端に解釋するのみであつた道義といふものの眞の觀念を、初めて示してくれた。崇高な道德に熱中することは、社會に在つてそれ程役に立つもので無いこと、餘り高く飛び上るのは墜落する本であること、些細な義務を間斷なしに果たして行くことは、壯大な行爲と比べて勞力の上で劣るものでないといふこと、寧ろそれが、一層の名譽と幸福とを得る所以であること、偶たまに世間を呀あやと言はせるよりも、絶えず人の尊敬を受けてゐる方が、どのくらゐか價値があると

いふことを、私に了解させてくれた。

(一) Abbé Jean-Claude Gaimé, トリノに来て六年目にルソオと相談になつた。一六九二—一七六一。

(二) 希臘のトロヤ包圍軍の勇將。

(三) 希臘の一酋長。よく希臘の君主達を罵罵した。斜視、佝僂、跛足、歪頭、それで大方想像が出来る。その上に、物の作法を知らぬ、大聲の饅舌家で、鄙陋極まる人間であつた。

人間の義務を定めるのには、その根本義に遡つて見なければならぬ。且私の踏んで来た徑路、又私の今の境遇を導びいた徑路は、私達を宗教の談へ連れて行つた。誠實なゲエム師が、少くとも大部分「サヴワの助祭」のモデルである事は、もう讀者に想像が附いたらう。唯彼は慎重の餘り話をするのに遠慮が勝つて、或る事柄ではそれ丈十分に打ち明けなかつた。併しその他の事では、彼の主義も感情も意見も同一であつた、私に郷里に歸れと言つた勸告まで、すべて後に私が世に説いたのと同じものであつた。で、私は既う趣意の誰にも解る話を長たらしくすることは止して、これ丈言つて置かう、最初効果は現れなかつたが、彼の分別ある教訓は、私の胸に道徳と宗教との芽生となつて、何時までも枯れる事が無く、實を結ばんが爲にもつと可愛い手で世話されることのみを待つてゐたのである。

(一) ルソオの教育論「エミール」の第四巻に出る「サヴワ助祭の信仰告白 *Profession de foi du Vicaire saupoyard*」のこと。詳しく後に出る。

その時私の心は、本當に變つて了つた譯ではなかつたが、それでも感動を受けずにはゐなかつた。彼の講話に倦むこともなく、その透徹と、簡素と、殊に話の中に満ちて居る眞心まごころとを嬉しく

思つた。私にはいたいけな心があつて、人が自分に施してくれた利益に依つてよりも、それを圖つてくれたといふことでいつもその人を慕つた。そして此の點について自分の見分けに欺かれた事は殆ど無かつた。で、私は心からゲエム氏を慕つた。言はば彼の二番目の弟子であつた。それが其の時ですら、無聊の餘りに引き入れられようとした邪道から、私を逸よそらすのに大へんな效力があつたのである。

或る日全く思ひ掛けなくラ・ロック伯爵の處から呼びに来た。私とその屋敷を訪ねても、話も出来なかつた所から、厭になつてそれきりになつて了つてゐたのだ。既う自分を忘れたのだらう、でなくば、自分に對する不快な印象があるのだらうと想像してゐたのであつた。それが誤解であつた。私が彼の小母さんの傍で忠實に働いてゐるのを一度ならず彼は見てゐた。彼は小母さんに其の話までしたり、此方こちで忘れて了つた時分にも、私にすら復たそれを話した。彼は善く私を待まち遇してくれた。漠とした約束で嬉しがらせないで、私の地位を探してゐたこと、話が極まつて、私の何者にか成れる途を開いたこと、迹は自分の腕次第といふこと、今度の家は勢力家うごで名望家だから、前途を拓くのに他の保護者を要しないこと、初めの中は依然やはり今まで通り、只の下部扱ひだが、若し私の感情や行爲に依つて此の地位以上の者だと分れば、大丈夫その儘で棄てて置かれはすまいといふことを話した。初めに得た輝やかしい希望が、末一段でめちやめちやにされて了つた。

「なんだ。何處まで行つても従僕か。」

口惜しさに斯う獨言を言つたが、聽てそれは自信に打ち消された。自分は此の儘打ちやつて置かれることを憂ふるには、餘りに此の地位に不適當な者だと感じたのである。

連れて行かれたのは、女王の主馬頭、有名なソラル家の族長であるグヴォン伯爵の屋敷であつた。此の貴い老伯の威容は、その鄭重な待遇を一層嬉しく思はせた。彼は熱心に私のことを訊ねた。私は率直に答へた。彼は此の子は氣持の好い慳巧さうな顔附をしてゐる。必と慳巧だとは思へるが、それ丈で十分とは云へない、その他の點も見分けなくてはならないと、ラ・ロック伯爵に話した。それから私の方を向いて、

「何事も初めは難しいものだ。併し、お前のは然る骨の折れる事でもない。よく氣を付けて、皆の者の氣に入るやうにしてくれ。差し當りお前の仕事はそれ丈だ。その外の事は安心するがい、面倒は見えてやるから。」

と言つた。引き續き彼は、息子ウジの嫁のブレリヨ侯爵夫人や、次男のグヴォン師の處へ行つて私を紹介してくれた。この目見得は良い前兆と思はれた。私には既う下男一人を取り立てるのに是程の手續は要らない筈だと思ふ丈の明があつた。果して私は下男の取扱ひは受けなかつた。食事も配膳室でした。奴僕しもべの仕着せも被なかつた。フヱリヤ伯爵といふ輕率な若様が、私を馬車の背後へ乗せようとしたことがあつたが、その祖父である老伯は私に、馬車の背後になぞ乗つてはいけない、誰の伴をして出てもいけないと止めた。それでも私は家では給仕や、下廻りの仕事はしたが、誰の用といふ極りもなく、言はば氣任せにそれをしたのである。手紙を筆記すること、フ

ヱリヤ伯爵のために、繪を彫ることの外は、一日中大抵自由であつた。私の心附かずにゐた此の氣樂さは、甚だ危険なものであつた。又正當な道でも無かつた。斯うした極端な無聊は、それさへ無くばその虞の無い悪習に親しませるものであつたからだ。

併し幸ひに其の虞は來なかつた。ゲム師の教訓が胸に刻まれてゐて、まだ時々その上のことを聽きに抜け出して行つた程、それに興味を惹かれてゐた。そんなにつつそり屋敷を出掛けるのを見附けた人も、何處へ私が行くものとも分らなかつたらしい。私の行爲に對する彼の忠告ほど、賢明なものは無かつた。私の奉公初めは目ざましいものであつた。精勤と注意と熱心とで家中の人を悦ばせた。ゲム師は、然る初發はつぱらから夢中になる事を控へよ、一時の熱心はやがて醒める、すると人は其處に目を着けると賢く戒めてくれた。

「君の初めの勤振りは、人が君に仕事を要求する尺度だ。段々に仕事を増すやうにして行くがいい、それが反對あひこにならないやうに注意し給へ。」

僅かな私の能力は殆ど試験されず、性來受けたもの以上に値踏ねぶされる事もなかつたから、グヴォン伯爵の言葉はありながら、私を何者にかしようかと考へてゐる風も見えなかつた。種々な事件に紛れてゐる間に、私は殆ど忘れられた。グヴォン伯爵の長男ブレリヨ侯爵は、その頃維因ウイーンの大使であつた。宮廷に事變が起つて、その事が此家まで聞えて來たので、何週間と家中が騒いで、私なぞ見返る暇もなかつた。それでもその時まで、私は勤めを怠るやうなことはなかつた。或る一つの事で私は利と害とを受けることになつた。それは外部の事に氣を奪はれないやうにして

れたが、少し勤務を粗略にさせられたことである。

(1) Joseph-Robert Solaro, marquis de Breglio, ヴェントリオ・アマデオ第二世王の下で、大使や知事をお勤めした。

ブレリヨ嬢は私と同じ地位で、姿の好い、相当美しい女であつた。至つて色が白く、髪は黒々として、暗色の女であるにも拘らず、明色の女の柔か味が顔に現れてゐた。私の心は、これに向つて抵抗が利かなかつた。若い女に似つかはしい禮服は其の優姿を浮き出させ、胸と肩とを露はに見せ、折から身に着けて居た喪服は、また一層その艷容を眩しくした。こんな觀察をするのは、召使の身には不相應だと言はれるかも知れない。固より不都合ではあるが、併し然らう私が見たのであつて、而も私ばかりが然うだつたのではない。料理長でも召使でも、實に聴いてゐられないやうな不躉な批評を食卓でしてゐた。が、私は未だ本氣に戀する程逆上せてはゐなかつた。自己と自分の地位とを忘れなかつた。欲望をも恣にしなかつた。彼女を見たり、その才氣や、分別や、誠意の現れた彼女の言葉を聴いて楽しんでゐた。私の野心は、彼女の用を勤める喜び丈に止まつて、自分の權限外へは出なかつた。食事の時は、熱心に此の權利を役立てる機會を狙つてゐた。彼女の下部が少しでもその傍を離れると、すぐにそのあとへ行つた。さもない時は彼女と向ひ合せになつてゐた。彼女の言ひつけようとする事を眼色に探つた。皿を取り替へる時機を窺つてゐた。何か命じてくれるなら、ちらと振り返つてくれるなら、一言言つてくれるなら、何を私が願つて居ようぞ。併し駄目だつた。なさない哉私は彼女に取つて零だつた。其處にゐると思つてくれなかつた。けれども、食事中時々私に物を言ふ彼女の兄弟が、何か有り難からぬ事を言ひ

掛けたとき、私は如何にも氣の利いた、面白い答をすると、彼女は注意を惹かれて視線を私に投げた。それは瞬間の事であつたが、その一睨みに私はふらくとなつた。翌日復た第二の機會が現れた。私はそれを利用した。その日は大宴會であつた。料理長が帶劍戴帽で出て來たのを初めて見て、私は吃驚した。或る機みから、話は此のソラル家の家訓の事に及んだ、それは紋章とともに壁紋に出てるものであつた。

Tel fert qui ne tue pas.

第一體ビエモンテの人は、佛蘭西語をよく知らないから、或る一人が此の文句に綴字の誤を見出して、fert といふ語の f は要らない文字だと言ひ出した。

三 ガヴォン老伯はそれに答へようとし掛けたが、ふと眼を私の方へ向けると、私が何か言ひたさうにして、にや／＼笑つてゐるので、話して見ると言はれた。で、私が言ふに、その f は無用の文字とは思はない、元來 fert は舊い佛語で、決して fer (傲慢な) 又は menaçant (脅かす) の義を有する羅旬語 ferus から來たものでなく、il frappe (打つ) 又は il blesse (傷つける) といふ意味の動詞 ferit から來たものだ。それゆゑ、此の箴言は Tel menace の意味で無く、Tel frappe qui ne tue pas (殺さざる者は打つ) の意でなくてはならない。

人々は私の顔を眺め、又、互ひに顔を見合せて、一言も言ふ者は無かつた。こんな驚きといふものは又と無い事だ。併し、それよりも私に嬉しかつたのは、ブレリヨ嬢の顔の上に、満足の色が歴々と見えたことであつた。いやにつんとした此の女が、少くとも第一回のものに劣らない二

度目の一瞥を私に奮發してくれた。それから老伯の方へ眼を向けて、私への褒め言葉を催促するやうな顔をした。果して老伯は、手厚く、行き届いた賞詞を、いかにも満足した風で私に掛けてくれたので、一同は擧つてこれに和した。この瞬間はちき經つて了つたが、どの點から見ても愉快であつた。これは、すべての物を順當の位置に置き、運命の虐げに損なはれた眞價の爲に復讐してくれる彼の希有な機會の一つであつた。しばらくして、ブレリヨ嬢は更に眼を私の方へ揚げて、羞かしさうな、やさしい聲で、飲み物が欲しいと言つて頼んだ。彼女を待たせる間もなかつたことは言ふまでもない。が、傍へ行つた時、身體ががた／＼顫へて、コップに水を入れ過ぎた爲、皿から彼女の身にまで水を刎ね飛ばした。彼女の兄弟は、何をそんなに顫へてゐるのだ、と無考へに私に訊いた。此の問は私の氣を落ち着かせる效がなかつた。そしてブレリヨ嬢は顔を眞つ赤にした。

この話は是切だ。バジル夫人との一件を初め全生涯に於いても同様、私の戀の終局がいつも芽出たく行かなかつたことはこれで解らうと思ふ。私はブレリヨ夫人の前室を慕つて行つたけれど無効だつた。令嬢からは、既う少しの注意をも受けられなかつた。出るにも入るにも、彼女が眼を呉れるといふことはなかつた。私も思ひ切つて彼女の上へ眼を向けることが出来なかつた。それに未だ愚鈍な事をやつた。或る時彼女が通りがかりに手套を落したので、自分の接吻を浴せ掛けた位に思つた其の手套の處へ突つ走ることにはしないで、自分の場所を得動かずにある中に、撲り倒しても遣りたい程の下部の野郎に拾はれて了つた。私はブレリヨ夫人の氣に入られないこ

とを知つて、臆病のどん底に落ちた。彼女は用を命じないばかりでなく、私の爲る事を拒んだ。二度ばかり其の前室に私を見附けて、お前は何もしてゐないのかと、冷かな調子で私に訊いた。私は此の懐かしい室を見棄てなければならぬやうになつた。初めの中は殘念で堪らなかつたが、色々な事が出来て来て、纏て私はそれを考へないやうになつた。

ブレリヨ夫人の蔑視も、遂に私を知つてくれた舅の慈愛で埋め合せが出来た。あの大家會のあつた晩、彼は半時ばかり私と談話したが、彼はそれに満足したらしく、私もそれが嬉しかつた。人の善い老伯は、知識はあつても、ヴェルセリ夫人には劣つてゐた。が、夫人以上の同情をもつてゐたので、私は此の人にはあの夫人よりもつと目を掛けられた。私を可愛がつてくれる息子のグヴァン師に親しむがよからう、其の親愛を利用すれば、今後の私の身の振り方を極めて貰ふ上に缺けてゐたものを得させてくれるだらうと言つた。翌日私はすぐグヴァン師の處へ駈けて行つた。下男扱ひにはされなかつた。彼は爐邊に私を坐らせて、物やさしく話し掛けてゐる中に、私の教育が多端に過ぎて、どれ一つ纏まつてゐないことを知つた。中にも羅甸語が駄目なのを見て、もつとしつかり教へようと考へた。私は毎朝來ることにして、翌日から始めた。私の生涯に屢々見出される、自分の身分より高過ぎて同時に低過ぎるといふ妙な工合で、私は同じ家の門下生でもあり奴僕でもあつた。卑い身分の私が、王子の傳たるべき門閥家の教師を戴いたのである。グヴァン師は行く／＼司教にと定められてゐたので、門閥家の息子としては、人一倍深く物を學ばせられた。シエナの大學へ數年間送られてゐて、其處から純粹の伊太利語をどつさり輸入し

て来た。これは云はば、以前巴里でダンジョオ師が取つてゐたやうな地位を、トリノで取るためだつた。彼は神學が嫌ひで文藝に身を投じた。高僧の職に就く人で、斯ういふことは伊太利亞では珍しくない。彼は色々な詩人を讀んだ。羅旬詩や、伊太利亞詩が可なりに書けた。つまり彼は私の趣味を養ひ、且私が自分の頭に詰め込んでゐた難駁な知識に、幾分の選擇を加へるのに必要なだけの趣味を持つてゐた。ところが、私の饒舌が、私の知識を彼に誇大視させたのか、又は羅旬語入門の怠屈さがたまらなかつたのか、彼は最初から私を實力不相應に認めた。で、フェエドルの寓言を二つ三つも翻譯させて了ふと、早速私をヴィルヅルにぶち込んだが、私には皆目譯が解らなかつた。後にも知れるとほり、私には羅旬語は幾度も習ひかけて到底物にならない因縁があつたのである。それでも熱心に讀んでゐると、師は至極親切に導びいてくれた。今思ひ出しても感激する。私は毎朝大方彼の用事と自分の稽古とで暮らした。用と言つても、彼の身の廻りの事でない、そんな事はさせなかつた、つまり口授を筆記したり、寫し物をするのであつた。生徒としてよりも此の書記の仕事の方が、餘計利益になつた。然うしてゐる間に、私は純粹の伊太利亞語を學んだばかりでなく、文藝の味が解り、ラ・トリビユの處で得られなかつた良書の鑑賞も出來た。後に私が獨力で物を書き始めた時に、甚だ役立つたものである。

(1) Charl s-Victor de Gouron. プレリヨ侯爵の弟。宮廷司祭、後告知祭式教師。

(11) Julius Phaedrus. 羅馬の寓話家。前三〇(一)―後四四(一)。

此の時期は私の生涯中、空想的な計畫を去つて、ごく眞面目に前途の希望を考へて居られた時

であつた。師も私を満足に思つて、誰にでも然う話した。ファヴリヤ伯爵の話に、老伯が私を格別可愛い者に思つて、王の耳にも入れたといふ程であつた。プレリヨ夫人までが、私を蔑むやうな風をしなくなつた。結局私は當家の驍臣といつたやうな者になり濟ました。御主人様の若様にお稽古をして戴いてゐる私を見て、長く自分達と背競べをしてはゐないだらうと感じた友達の召使等は、どんなに妬ましがつたらう。

人々は私を何にしようとしたものか、彼等が洩らした言葉の端から、後に初めて想ひ回して見て判斷の出來たことは、ソラアルの家では、外交官の職を續けて、終には多分大臣に成らうといふ考で、誰か一人、専ら此の家と終始して、後には其の信頼を獲て、有用な働きの出來るやうな腕利きの従者を養成して置きたかつたらしい。このグザン伯の計畫は、立派な、分別のある、見事なもので、義心もあり、眼先の利く大貴族には實に恰好なものであつた。けれどもその時分私には、その事の全景が窺へなかつた外に、その事は私の頭腦に取つて餘りに賢明過ぎ、餘りに長い屈從を要した。私の愚かな野心は、戀の冒險の中にのみ幸福を求めてゐた。で、彼等の計畫の中に女の居ないのを見ると、こんな出世の仕方は、まだるこくて、骨が折れて、情ないものと思はれた。女が關係しない丈、それだけ貴く且確實なものと思ふべきであるのに。女に引き立てられるやうな功績は、私に擬せられてゐた功績とは逆も比べ物にはならないのだから。

すべてが物の見事に進んで行つた。私は人々の尊敬を得た。むしろ尊敬を引き寄せた。試験は濟んだ。家中の人は私を最も有望な若者、未だ適當な地位に居ないけれど、早晚其處に到り得る

者と見た。併し私の地位は人間が定めたものでなかつた。全く異なつた路を通つて其處に行き着かなければならなかつた。今私は自分に固有な特質の一つに觸れて來た。これは別に考察を附け加へないで、讀者に示せばそれでよいものである。

トリノには私のやうな新たな改宗者は澤山あつたが、私はその人達を嫌つて、誰かに會はうと思つた事もなかつた。併し、改宗者でないジュネエヴ人の幾人かには會つた。其の中に兎唇と緯號されたミュサアルといふ小肖像畫家は、私の縁續きの人であつた。このミュサアルは、私がグヴォン伯の屋敷に居ることを嗅ぎ出して、バアクルといふ、私が徒弟で居た頃の仲間であつた。ジュネエヴの男を連れて訪ねて來た。このバアクルは面白い快活な少年で、口を衝いて出る道化た頓智も、その年頃のために愉快なものになつた。私は忽ち此の男に心酔した。離れがたい程に心酔して了つた。彼は近々にジュネエヴへ歸らうとしてゐた。何といふ損失だらう。その損失のつらさを私は十分に感じた。この上は、出来るだけ残りの時間を利用して思つて、私はもう彼を離れなかつた。寧ろ彼が私を離れなかつた。初めの間私は、無斷で屋敷を抜け出して彼と遊ばうとする程に逆上せてもゐなかつたからである。すると家ではバアクルが、すつかり私に魅つたと見て、彼の出入りを止めて了つた。私はバアクルの外の事は一切そつち除けにして、グヴォン師をも老伯をも訪ねず、もう大方家に居なかつた程夢中になつて了つた。叱られても聽かなかつた。暇を出すぞと脅かされた。此の脅かしは、私の最期であつた。バアクル一人で出發しなくてもいい、といふ考がそれから私に浮かんだからである。然うなると、もう外の楽しみも、前途も、

幸福も目に入らず、一圖に斯うした旅行を思ふばかりであつた。そしてそこに言ひ知れぬ幸福のみを見てゐた。おまけに此の旅行の末には、遙かに遠い先の方にはあるが、ヴァラン夫人が見えた。私はジュネエヴに歸らうとは少しも思つてゐなかつたからである。連山、平原、森林、細流、村落が果てしもなく、又絶えず新しい魅力を持つて打ち續いた。此の楽しい行程は、我が全生涯を吸ひ盡すことだらうと思はれた。此方へ來る時、此の同じ旅行が、どんなに楽しかつたかを思ひ返して見てぞくぞくした。今度は不羈のあらゆる楽しさに加へて、何の遠慮氣兼ねもないに、歩きたい時に歩き、休みたい時に休みながら、年齢も趣味も同じい好い氣質の一人の友と旅をする楽しさがあるとしたら、どんな旅行が出来るだらう。此の幸福をまだるこくて、むづかしくて、あやふやな希望に換へるのは、莫迦でなくてはならない。それが假に華々しく實現されたところで、眞の享樂と青春の自由との四半時をも値しないのに。

(1) Francis-Robert Musard. 一七二三年ジュネエヴに生れ、後巴黎の畫家となる。

(2) 假髮工。一七二九年に二十一歳であつた。

この慧しい妄想に満たされて、到頭屋敷を出されるまでの振舞をした。それには實際面倒がないでもなかつた。或る晩外から歸ると、料理長が伯爵の名で、私に暇が出たことを言ひ渡した。それは固より望むところであつた。何故ならば、私は自分の不謹慎な行動を我にもあらず感じて、自己を辯解する爲に、不當と忘恩とを重ねた。暇を出したのは彼等の罪で、自分は必要から此の決心をしたのだといふ自己辯明をする積りであつたのだ。フアヴリヤ伯爵から、明日出發前に一

度話しに来るやうにとの事だつた。そして私が本心を無くしてゐて、言ふ事を聴くまいといふので、私の受け取るべき金を、此の訪問の済むまで料理長は渡すことを延ばした。屋敷では私を奴僕にして置きたくなかつたので、給金を極めてゐなかつたから、これは無理な金でもあつた。ファヴリヤ伯爵は年若で輕率な人だつたが、此の場合は、ごく筋の立つた、ごく物優しい、と云つてもいい談話をして聴かせた。小父さんの心盡しや、祖父さんの計畫を、親切にしみじみと私に告げた。終りに、私が自分の最期を急ぐために、犠牲にする一切の物をまざまざと描いて見せて後、私を迷はしたあの悪たれ小僧と手を切る氣にさへなれば、元の身にしてやらうと申し出された。

然ういふ言葉が、此の人から出たものでないことは解り切つてゐるから、さすがに眼の眩んだ私も、我が老伯爵の厚いなさけを感じて胸が込み上げた。けれど、楽しい旅行の事が深く胸に刻まれてゐた爲に、何物もこれと魅力を争ふことは出来なかつた。私は全く分別を失くしてゐた。私は腹を固め、頑固になり、昂然として、横柄に斯う答へた。暇が出たからそれを取つたのだ、取り消すのは最早遅い、どんな事が私の生涯に突つかゝつて來ても、決して同じ屋敷から二度逐つ拂はれる事のないやうな覺悟をした、といふのであつた。少年の伯爵はこれを聞くと、固より嚇となつて口汚い言葉を浴せ掛け、肩を捉へて私を室外へ放り出して扉を敲き附けた。私は晴の勝利を得た心地で、揚々として出て來た。そして此の上又しても喧嘩を始めるやうなことがあつてはと、不義理にもグヴォン師の處へは挨拶にも行かないで立つて了つた。

この場合、私の亂心が何處まで進んだのかを理解するには、是非、私の心が些細な事にもどれ丈狂い易い性のものだと云ふこと、又其の心が、極く空疎な誘惑物の想像にもどれ丈強く溺れるかといふことを知らなければならぬ。ごく風變りな、子供染みた、愚にも附かない企が、得意の私の考に媚び、そして私とその企に没頭することの尤もらしさを見せるのである。十九歳にもなる者が、將來の生計の本を硝子燵の上へ築き上げようなどは、出来ることだらうか。まあ聴き給へ。

(一) 此の十九歳は十七歳でなくてはならぬ。

數週間前に、私は一つの綺麗な、小さいエロンの噴水器をグヴォン師に貰つて喜んでゐた。精巧なバアクルと私が、此器を弄つたり、旅の話をしてゐる間に、噴水器が旅行の役に立つて、それを引き延すことが出来るといふことを考へた。世の中にエロン噴水器ぐらゐる珍しいものがあらうか。この理窟が、二人の幸運を築き上げる土臺であつた。村々で、この噴水器の周圍に農夫達を集める積りだつた。さうすれば御馳走が山のやうに降つて來る譯だつた。食物はそれを取らずる人に取つては、何でもないので、若しそれを旅行家に振舞はないとすれば、それは唯その人達の惡意に依るのだと二人は思ひ込んでゐたのである。吾々の肺の空氣と、噴水器の水だけの資本が、ピエモンテでも、サヴワでも、佛蘭西でも、何處でも、費用を支拂つてくれるものと思つて、到るところに宴會や婚禮のことばかりを想像したのである。二人は果てしもない旅の計畫をした。そしてまづ道筋を北の方へ取ることにしたのは、何處かで又止まらなければならぬとい

ふ豫想よりも、^{アルプ}亞爾伯越えの面白さといふ事からであつた。

(一) 壓縮空氣の作用で噴水させるもの。アレクサンドリヤの理學者エロンの創製に係る。

一七三一—一七三三。【十九歳—二十歳】

眞の放浪者の生涯を始めるために、自分の保護者、教師、研究、希望、それと大方極まりかかつてゐた幸福の期待とを惜し氣もなく打つちやつて、愈々乗り出さうとする計畫がこれであつた。私は首府に別を告げた。宮廷と、大望と、虚榮心と、戀と、美女と、前年中希望を繋いで来たあらゆる大冒険にも別を告げた。私は噴水器とバアクルとを連れて旅に出た。財布は軽かつたが、胸は歡喜に溢れ、色々な輝やかなしい目的を、忽ち煎じ詰めた此の不定な幸福を楽しむ事の外は考へなかつた。

此の突飛な旅行は、大抵思つた通り愉快に行つたが、それでも全く同じやうには行かなかつた。噴水器は果して茶屋の内儀や、女中を暫らく喜ばせたけれど、勘定は勘定で拂つて出なければならなかつたからである。と言つてそれが爲に困りもしなかつた。金が切れさうになつた時でなくては、此の資本を利用しようとは思はなかつた。偶とした事から、その面倒が無くなつた。ブラマンテ近くで噴水器が壊れて了つた。實は口には出さなかつたが、二人ともそろそろ持て餘して来た折からで、丁度いゝ時だつたのだ。此の災難で二人は餘計暢氣になつた。着物や靴のいたんで來るのを忘れてゐて、噴水を觀せさへすれば、新しいのが買へると思つてゐた輕々しさを二

人で大笑ひした。私達は初めと同じやうに氣輕に歩いたが、併し竭きかゝる財布に餘儀なくされて、少し足早に目的地を指して急いだ。

三 第 三 卷

シャンベリへ來て私は思案し出した。今迄の莫迦な眞似を顧みたのではない、私ぐらゐ早くさつぱりと過去の事を思ひ切る者はない。私は唯ヴァラン夫人が、どんな風に自分を迎へるだらうかといふ事が氣になつたのである。私は夫人の家をまさしく親の家のやうに思つてゐたからだ。自分がグヴォン伯爵の屋敷に住み込んだ事は、手紙で知らせて置いた。彼女は私の地位を知つてゐた。それを祝ふ序に、人々の好意に酬いる心得なども、粗漏なく教へてくれた。私が自分の過失で打ち毀しさへしなければ、私の出世は確かなものだと思つてゐた。私の歸つたのを見たら、何と言ふだらう。まさか閉め出しを喰はせもすまいとは思つたが、彼女に心配を掛けるのを恐れた。不幸よりも私に取つて切ない彼女の譴責が恐ろしかつた。何と言はれても自分は沈黙を守つて、出來る丈彼女を安心させるやうにしよう。此の世には彼女の外に誰もいない。彼女の不興の裡に生きるのは不可能の事である。

一番不安に思はれたのは旅の友の事であつた。彼女に餘計な厄介を掛けることは厭なり、手を切ることは容易であるまいと思つた。別れの準備に、最終の日には出來るだけ素氣なく交際つた。剽輕者は私を看破した、彼は莫迦といふよりも氣の早い男だつたのだ。彼は必と私の變心を怨むだらう、斯う思つたのは私の勘違ひで、バアクルは何も氣にしなかつた。アヌシへ來て二人が市に這入ると直ぐ、

「さあ、君は自家へ来た。」

斯う言つて、私を抱いて別れを告げ、くるりと廻つて行つて了つた。それぎり彼の事は耳にしな
い。二人の交際は六週間ばかり續いたが、それにしても其の影響は私の生きる限り續くだらう。
ヴァラン夫人の家に近づくに従つて、私の胸騒ぎはどの様であつたらう。足はがたがた顫へ、
眼は薄絹の懸つたやう、何物も見えず何物も聞えず、何人をも見分け得なかつた。幾度か立ち留
まつて、呼吸と知覺とを取り返さなければならなかつた。こんなに氣が揉めたのは、自分に必要
な救助が得られないとの心遣ひからだつたらうか。私位の年輩で、餓死の恐怖の爲に、こんな心
配をするものだらうか。否、否、私は誇りと眞實とを以て斷言する。生涯の如何なる場合でも、
私は利に勇み、貧に悲しんだ事はなかつた。不規則な浮沈の多かつた一生の中、住居と麵包とに
折々事を缺きながらも、始終同じ眼で豪奢と窮乏とを眺めてゐた。必要に迫れば、人竝に乞食も
し竊盜を働かないにも限らないが、然うした落ち目に遭つたといふことを苦にはしなかつた。誰
とて一生に私ぐらゐる悲歎した者はあるまい、私ぐらゐる涙を絞つた者はあるまい。けれども貧乏や
貧乏になりさうだといふことで、私は吐息を洩らしたり、涙を零した事は曾て無かつた。禍福に
屈しない私の精神は、禍福と關係の無いものでなくては、眞の幸福とも眞の不幸とも認めなかつ
た。そして私が自分を世上の最も不幸な人間だと感じたのは、生活上の必要物に何等の不足もな
かつた時なのである。

ヴァラン夫人の眼の前に立つや否、彼女の様子は私を安心させた。彼女の最初の聲音に、私は

身を顫はせた。すぐ其の足に飛び附く。言ふに言はれない歡喜に恍然となつて、其の手に自分の
物を接ける。彼女は、私の身の上のことを知つてゐたかどうかは解らないけれど、その顔の上
は、驚きの影は無く、心配の色も絶えて無かつた。

「まあ！ よく歸つて来たわね。齡が行かないんだから、あの旅行はどうかと思つてたのに、
でもまあ心配した程のこともなくよかつたわ。」

愛の籠つた聲音で斯う言つた。續いて長くもない身の上話を私に話させた。私は下らない處は
端折つたが、自分を庇ひもせず、言ひ譯もせず、有體に話した。

さて問題は私の宿の事であつた。夫人は女中に相談した。私はその評議の間、息も吐けなかつ
た。が、此の家へ泊めてよからうといふのを聞いた時は、ぢつとしてゐることが容易でなかつた。
荷物が定められた室に運ばれるのを見る心地は、サン・ブルウがヴォルマル夫人の邸内に自分
の馬車を藏はれる時と同じやうだつた。殊に是が一時のなさけで無いと解つた時は、尙有り難く
思つた。私が他の事に氣を取られてゐると思はれた時、夫人の話す聲が耳にはひつた。

「何と言はれたつて構はないわ。神様が此家へお寄越しになつたのだもの、私あの子を見棄て
ないことにするわ。」

(一) サン・ブルウとヴォルマル夫人とは、ルソオの小説「新エロイズ」の主人公で相愛の仲。詳しく後に出る。

斯ういふ譯で、私は到頭此家へ落ち着くやうになつた。けれども此の定着で、私の幸福な生涯
に入つたとは未だ云へなかつた、が、その準備には成つた。眞に自己を享樂させてくれる心の敏

感といふものは、自然の作物であり、若しくは人體の組織の所産であるかは知らないけれども、この敏感を發達させるやうな境遇がなくてはならない。然ういふ偶然の原因が無くては、天性甚だ敏感な人といへども、何物をも感受することがなく、自己を意識せずに死ぬ外はない。それがまさしく私の此の時までの状態であつた。そして私がヴァラン夫人を知らず、縦し知つても永くその傍に居て、彼女の感化で愛情の楽しい習慣を養はなかつたならば、その状態はどこまでも續いたことだらう。私は斷言してもいい、戀だけしか感じない人は、その外に此の人生にもつと楽しいもののあることを感じない。私は一種異つた感情を知つてゐる、強烈は或は戀に及ばない、が、缺きは幾倍優つてゐるか分らない。時には戀とも結び附くが、又しばしば戀と離れてゐる。と云つてこの情は、單なる友情でもない、それよりもつと肉感的で強烈である。この情は、同性の人に對して働き得るものとは思へない。若しも、人は人の友人であるものとすれば、私も一個の「友人」に相違ない、それですら私は自分の友人の誰に對しても、そんな感情を経験したことはなかつた。この話は少し明瞭を缺いてゐる、けれども今にはつきりして來るだらう。感情はその結果によつて説明する外はない。

夫人は舊い家に住んで居たが、綺麗な豫備の一室を持つ丈の廣さはあつた。それは彼女の客室であつて、其處へ私が這入つたのである。此の室は前に話した、初めて私が夫人に會つた小徑に臨んで、細流と庭の向うには、野原が展げられてゐる。この眺望は若い居住者に取つて無意味なものではなかつた。これでボセ以來、初めて窓から青いものを見たのである。それ迄私は、始終

壁を押つ冠せられて、眼の下には屋根か灰色の市街でなくては眺めたことはなかつた。どんなに此の新らし味が、嬉しく樂しかつただらう。それが私の氣持を感激させて了つた。私は此の楽しい景色をも、やはり懐かしい恩人の一つの恩恵と見做した。恩人が特別に斯ういふ眺望をこゝに展げてくれたものと思はれたのである。私は彼女とともに、安らかに其の中へ自分を置いた。花と青草との中で、彼女を其處にも見つけた。彼女の魅力と春のそれとが、私の目に一つに溶け合つた。これまで押つべされて來た胸が、この廣場で暢びりとなり、それらの果樹園の間で溜息が一層自由に吐き出された。

ヴァラン夫人の家では、トリノで見たやうな豪奢は見出されなかつた。併し此處には清らかさと落ちつきと、虚飾に流れない淳朴な豊かさがあつた。彼女は銀器や、磁器を持つてゐなかつた。臺所には鳥獸の肉もなく、酒窖には外國製の酒もなかつたが、どれも客を饗す丈の貯へはしてあつた。陶器の茶碗で上等の珈琲が薦められた。訪ねて來る程の人は、みんな晚餐の饗應を受けた。人足でも、飛脚でも、旅人でも、口を濡さずに出て行く者は一人もなかつた。召使はメルスレといふフリブル出の小綺麗な小間使と、クロオド・アネといふ夫人と同郷の従僕と——此の男の事は後に出る——一人の炊婦と、時たま訪問に出る時の二人の轎夫とであつた。年金の八百圓に對しては随分大へんだ。が經濟が巧く行きさへすれば、土地が豊饒で金の少い土地だから、それでやつて行けないこともなかつたらう。ところが生憎經濟は夫人のお得意ではなかつた。借金を拵へては返済に追はれてゐた。金は杼のやうに、皆出て行つて了つた。

夫人の家政の整理法は、丁度私の註文通りのものであつた。私が面白くそれを利用した事は解るだらう。唯少し面白くなかつたのは、よほど長い間食卓に坐つてゐなければならぬ事であつた。夫人はスウプや肉の出初でいの匂を厭がつて、動ぶもすると、胸を悪くした。そして長い間それが續いた。氣分が復たりかゝる、話を始める。喰べさうにもしない。初めて一片を口にするのは、ものの半時も経つてからだつた。その間に私は三回でも喰べられただらう。彼女の喰べ始めるずつと前に、私の食事は済んでゐた。もう一度お相伴をする。斯うして二人前喰つても別條はなかつた。とにかく私は彼女から得る楽しい幸福の感に浸つた。私の受ける幸福には、これを維持する手段に就いての不安が交つてゐない丈、餘計に楽しかつた。詳しく家計を知らなかつた私は、何時でも收支が巧く立つてゐるものと思つた。その後家の中はいつも愉快ではあつたが、段々實際の狀況を知り、年金が使ひ越こしになつてゐるのを見てからは、もう平氣で楽しんでゐられなくなつた。豫想はいつも私の享樂を傷つけた。私は徒らに未來を見てゐる丈で、それを避けることは出来なかつた。

最初の日からごく温かな親密さが二人の間に成り立つた。これは彼女が生涯の間そのまま續けたものである。「坊や」といふのが私の名で、「母ちゃん」が夫人の名であつた。年月経て、二人の間の隔りが除とれて了つた時でも、始終「坊や」と「母ちゃん」とで押し通した。此の二つの名が、二人の調子、行儀の淡泊さ、殊に二人の心の關係を、いかにも巧く現してゐると思ふ。彼女は私に取つて一ばん優しい母であつた。自分の快樂は求めないで、私の幸福のみを圖つてくれた。

そして私の愛情の中に肉感が加つてゐても、その爲に此の愛情の本質は變りはしなかつた。却つて一層それを微妙なものにし、狎なえるのに楽しい若い美人の母を持つ嬉しさに、私を酔はせたのである。私は讀んで字の如く狎なえると言ふ。それは、彼女が決して母としての接吻や至極優しい愛撫を吝いとまうとしたことがなく、私もそれらを濫用しようなどと思つたこともなかつたからである。でも最後には別な關係になつたではないかと言ふ者もあらう。それはさうだが少し待つて貰はう。一時に皆話す譯には行かない。

初めて會つた時の一瞥は、彼女が私に感じさせた眞に興奮した唯一の瞬間であつた。のみならず、この瞬間は驚異から來たものでもあつた。差出がましい私の視線も、決して夫人の襟卷の下まで覗きには行かなかつた。そこから洩れて見える膨らみは、随分視線を引かないではなかつた。私は彼女の傍で、夢中にもならず、欲情をも起さなかつた。ただ何ものとも知らぬものを樂しんで、靜かに恍然うらやとなつてゐた。斯うして私は一生は更なり、永劫をも、少しの疲れを知らずにに過したことだらう。彼女は私にかの對話の無味を感じさせなかつた唯一の人である。此の對話を續ける義務が、私には拷問に當るのである。二人の對話は對話でなく、喋しゃべり競くらひもいふべきもので、それを止めるには邪魔を入れなくてはならなかつた。口を利かせる命令よりも、口を噤しませる命令が私に必要な位だつた。彼女は計畫を考へ詰めて、時々ぼんやりしてゐることがある。よしよし！ 私は彼女をぼんやりさせて置いて、黙つて彼女を眺めて、それで私くらゐ幸福な人間はなかつた。私にはもう一つ妙な癖があつた。差向ひになつてくれとは言はないで、絶えず對

坐をつくらうとした。そして對坐すれば夢中に喜んだが、邪魔者があると無茶に怒つた。他人がやつて來ると、男でも女でも構はない、私は直ぐとぶつ／＼言ひながら出て行つて了つた。彼女の傍で第三者になり下がるのが堪へられなかつたからである。別室へ退つて時間を數へ、さうした永久の訪問者を呪つた。自分にはその人達よりもつと話したい事のある爲に、その人達にそんなに長い話があるといふことが考へられなかつたのである。

私は彼女を見ない時でなくては、彼女に對する愛着の全力を感じなかつた。顔を見れば、唯満足して居る丈であつた。が、彼女の不在の時の心細さは、苦痛にまでなつた。彼女と一緒に暮らしたい心は、私を激動せしめ、その末は、動もすれば涙と迄なつた。或る大祝祭の日に、彼女は晩拜に行く、私は郊外を散歩する、心の中は、彼女の幻影まぼろしと、彼女の傍で日を送りたい一念で一ぱいになつてゐたことを、私は何時までも思ひ出すだらう。現在ではそれが望めないといふこと、是程楽しんでゐる幸福も暫くのことだらうといふことは私にも察せられた。そのために私の夢想に一味の哀愁を添へたけれど、その哀愁は少しも陰慘なものでもなく、而も一種頼もしげな希望で和げられた。別けて私が心を引かれた鐘の響、鳥の歌、麗かな日ざし、快よい景色、二人が共有の住居として空想したあちこちの田家、すべてそれらが生々した、痛切な、悲しい、胸に沁みるやうな印象で強く私を動かした。で私は彼女に悦ばれさうな一切の至樂を我が物とし、言ひ知れぬ歡喜の中にそれを味ふ幸福な時、幸福な住居の中に恍惚としてゐる者のやうに自分を思つた。肉慾の快は考へもしなかつた。私は此の時ぐらゐる力を籠め、幻想を逞ましくして未來に突進



二十八歳のヴァラン夫人

したことを覺えない。そして此の幻想が實現された時、この夢想の追憶で一番驚かれたのは、私の想像したのと全く同じ事物を見出した事であつた。若しも覺醒時の夢に豫言的幻覺の傾きがあるものとすれば、これが丁度それであつた。唯異つたのは想像の時間の長さ丈であつた。日と言はず年と言はず全生涯までが、幻想では不變の平和の裡に流れて行つたのに、事實はほんの少しの間しか續かなかつたからである。あゝ、私の最も確實な幸福は夢であつた。その夢も結ぶか結ばない内に忽ち破られた。

(一) 一七三六年著者二十四歳の時。詳しく第五卷の末に出る。

この懐かしい母マザーの居ない時、私が彼女を思ひ出して色々な氣狂ひじみた振舞を一々話し出したら際限があるまい。幾度私は彼女の寝てゐたことを思つて、自分の蒲團マツに接吻しただらう。彼女の物であり、その美しい手の觸れた物だと思つては、窓帷カーテンや家具類にも。彼女が歩いたことを思つては、自分の俯伏うつぶしてゐる床板にすらも。又或る時はその眼の前ですら、激しい戀の仕業しわざとしか思へないやうな突飛な事を仕出來した。或る日食事の時、彼女が肉を口へ入れたのを見て、髪の毛が喰つ着いてゐると叫ぶ。彼女は皿の中へ肉を吐き出す。それへ私が飛びついて一口に嚙み下す。つまり私と、熱狂してゐる戀人との間には、唯一點の、しかも本質的の差異がある丈であつた。そしてその差異が、私の地位を理窟では判斷の出來ないものにしたのだ。

私が伊太利亞から歸つて來た時は、其處へ行つた時と全然同一ではなかつたが、併し私ぐらゐの年頃の者が大抵變つて來るやうには變つて來なかつた。童貞は亡くしたが肉體は潔白で歸つて

來た。私は齡の伸長を感じてゐた。惱ましい欲情は遂に現はれた。そしてその最初の、殆ど無意識の爆發は、私の健康を心配させた。此の心配が私の是迄の純潔を、何物よりもよく示してゐる。間もなく安心した私は、自然に背き、又私の氣質に似た青年の健康、元氣、乃至はその生命を犠牲にして、種々な淫蕩から彼等を救ふやうな有害な埋め合せの手段を覺えた。羞恥と臆病に都合の好い此の弊風は、活潑な想像に取つてもう一つ大きな魅力を持つてゐる。それは、謂はば思ふ儘にすべての女性を自由にすることと、その承諾を求めないでも、氣に入つた美人を自己悦樂の具に供し得ることとである。此の痛ましい便法に誘はれて、私は自然に賦與せられ、久しく自分で鍛鍊して來た良い體格を壞すのに骨を折つた。此の傾向に加ふるに私の現在居る場所を考へなければならぬ。美しい女の家に宿り、心でその姿を媚愛し、晝は絶えず彼女を眺め、夜は彼女を偲ばせる品々に圍繞とりまきかれて彼女も寝たらしいベッドに寝る。何といふ刺激だらう。それを想像される讀者は、誰でも私を半分死んだものとして眺めるであらう。ところが反對で、私を破滅させる筈だつたものが、却つて私を保護してくれた、少くとも一時は然うだつた。彼女の傍に住む樂しさ、其處で目を送りたい熱望に酔つて、彼女が居ても居なくても、私は始終優しい母、懐かしい姉、楽しい友を彼女に眺めて、その外を見なかつた。私は常に斯ういふ風に彼女を見、つねに同様の彼女を見て、その外を見なかつた。その面影が私の心に何時でも現れてゐて、他の何物をも容れなかつた。私に取つて彼女は世の中に唯一人の女であつた。彼女に吹き込まれた強度な楽しい感情は、他の女に向つて眼醒めようとする私の肉感に餘裕を與へなかつた爲に、彼女や其

の他の女から私を保護してくれた。つまり私は彼女を愛したから、慎深かつたのである。話し方は不十分だが、此の事實に依つて、私の夫人に對する愛情がどんな種類のものであつたかを判断して貰ひたい。私としては今は唯是丈を言ふに止めて置く、若し是迄の事丈でも餘程變に見えたとしたら、是から後は尙變に見えるだらうと。

私は一番嫌ひな仕事をしながら、此の上もなく愉快に日を送つた。設計の整理、書類の淨書、請取の轉寫、藥草摘み、藥種の粉碎、蒸溜器の使用。その間には、多勢の旅人や、物貰ひや、いろんな客が、混まり合つて來た。軍人、藥種屋、出世僧シキヤク、美しい貴婦人、俗修士フシユシなどを、一緒に接待しなければならなかつた。私は呶鳴つたり眩くらいたり、此の忌々しい群を呪つて退散させたかつた。何事にも快活な夫人には、私の癩癩シヤクシヤクが涙の出る程可笑しかつた。私は笑が抑へられないにつけて、益々癩癩が高じて來るので、尙彼女を笑はせた。私が楽しくぶつ／＼言つてゐるこの瞬間は愉快だつた。若し此の言ひ争ひの最中に、また邪魔な客が來ると、彼女は尙面白づくに故と客に長居をさせ、そして、ちら／＼と、撲なぐつても遣りたいやうな瞥見を私の方へ呉れるのであつた。場所がらと思つて、無理に改まつてはゐながら狂人のやうな視線を送る私を見て、彼女は嘖はなき出さずにはゐられなかつた。その實私の心の裡では、やはり此の光景が面白くて堪らなかつたのである。

斯ういふ事は、それ自身に面白味の無いことだが、自分の好きな暮らし方の一部分を成すものなので、矢張樂しかつた。自分の周圍に起つた事、自分のさせられた事は、いづれも私の趣味に

一致しなかつたが、気分とは一致した。醫術が嫌ひな爲に、始終莫迦げた光景を演じて笑ひ草になつたが、それが無かつたら、私は此の學問が好きになつただらうと思ふ。この學問がこんな結果を生み出したのは、恐らくこれが初めである。私は句で醫書を嗅ぎ分けると言ひ張つて、それで不思議に、しくじつたことは滅多になかつた。彼女はいやな藥を私に舐ならせた。遁はげても拒んでも効かがなかつた。いくら抵抗しても顔を顰しめても、頑張つても、齒を喰かひ縛つても、藥を塗つたその美しい指が私の唇のところへ來れば、もう口を開いて舐ならない譯に行かなかつた。彼女の道具一式を同じ室に集めた時、二人がきやつ／＼言つて騒さわぎまはるのを聞いた者は、茶番でもやつてゐると思つて、鴉片劑や強壯藥を調合してゐることは知らなかつたであらう。

けれども私は時間の全部を莫迦さわざばかりで過したのではなかつた。私は自分の室でいろいろな書物を見出した。「スベクタツウル」^(一)、ブッフエンドルフ^(二)、サン・テヴルモン^(三)、「顯理物語」^(四)など。讀書の熱狂はもう、以前ほどではなかつたが、暇にはその中の幾分を讀んだ。「スベクタツウル」が一番面白くて利益にもなつた。グヴォン師の教に、讀書はそんなに貪つてしないで省察を多くせよとあつた。それで讀書が一層役に立つた。私はいつも語法や修辭法を考へたり、純粹の佛蘭西語と自分の方言とを比べたりした。例へば、ジュネエヴ人の一般に陥る正字學上の一の誤謬を、次の「顯理物語」の二句で訂正することが出來た。

Soit qu'un ancien respect pour le sang de leurs maîtres

Parlât encor pour lui dans le cœur de ces traîtres.

恩主の血に對するその昔昔の尊崇の、
尙これ等叛逆者の胸臆に彼がため語りけん。

此の *Parlât* といふ語に氣が附いて、接續法の第三人稱には語尾の *t* が要ることを知つた。今まで自分は、直説法の過去と同じやうに *Parla* と書きもし、發音もしてゐたのである。

(一) *Le spectateur* (*The Spectator*) は一七一一年英國の作家アザソンの發刊した雜誌で、其の中には論説、諷刺、譬諭等雜多の文章が包括せられて居る。

(二) *Samuel Puffendorf*. 獨逸の政論家。「自然及び人間の權利につきて *De jure naturae et gentium*」等の著書で、神權説に對して自由な立場から法の概念を明かにした。一六二二—一六四四。

(三) *Saint-Evremond*. 佛蘭西の戯曲家、評論家。一六一〇—一七〇三。

(四) *La Henriade*. 一七三三年ヴォルテール作の敘事詩。神聖同盟及び顯理第四世王を主題としたもの。
時々母マヤンと讀み物の事で話し合つた。時には彼女の傍でも讀んで、大へん愉快に思つた。私は巧く讀まうと努めたので、それが又有効だつた。前にも言つた通り、彼女には才藝があつた。丁度この時は、その全盛の折からであつた。いろ／＼の文藝家が進んで彼女の意を迎へに來て、優れた作物を味はふことを教へた。強ひて云へば、彼女の趣味は多少新教的で、ベエルの事ばかり話してゐた。又佛蘭西では夙もとに葬ひたられたサン・テヴルモンを甚く崇拜した。と云つて、それは彼

女にいい文學を理解させ、巧みにその感想を發表させることを妨げなかつた。彼女は固より優れた社會で人と爲つた。若い頃ザヴワに来て、其處の貴人達との楽しい交際で、ヴォオ州邊の臭味ある調子が脱けて了つた。その州では、女は一般に才と云へばすぐ世才の意味に取り、警句を言ふことより知らないのである。

(一) Pierre Bayle. 佛蘭西の評論家。「歴史的批評的辭典 *Dictionnaire historique et critique*」の著者。その懷疑説は、第十八世紀の新思想を豫示するものであり、此の「辭典」は十八世紀の「百科辭典」の先驅をなすものであつた。一六四七—一七〇六。

彼女はほんのざつと宮廷を觀た丈だが、敏捷い一睨みですつかりそれを見抜いて了つた。其處に彼女はいつでも友人を持つてゐた。そして彼女は其の行爲や借金から招いた陰密な嫉妬や物議にもかゝらず、決してその年金を失はなかつた。彼女は實世間の經驗と、この經驗を有用ならしめる反省の才を持つてゐた。これが彼女の得意の話題でもあり、又空想狂の私に取つては丁度一番必要な教訓でもあつた。私達は共にラ・ブリュイエールを讀んだ。この作家は、ロシユフコオよりも彼女に喜ばれた。これは陰鬱なむしやくしやする本で、殊に有りのまゝの人間を見ることが好まない若い時分では、尙更然う感ぜられるからだ。彼女は道德談をして脇道へ迷ひ込む事があつた。けれども私は彼女の口や手にちよいと接吻して辛抱してゐたので、長談義にも疲れなかつた。

(一) La Rochefoucauld. 佛蘭西の諷刺作者。Maximes に依つて文壇に知られて居る。一六一三—一八〇。

この生活は樂し過ぎて永續が氣遣はれた。私はそれに氣附いた。そして此の生活の最後を見る不安だけが、その享樂を妨げた。莫迦騒ぎの間でも、母は私を研究し、觀察し、試験して、私の幸運の爲にと、有らずもがなの澤山な計畫を立ててくれた。幸ひと私の性向や、嗜好や、些細な技能を知つた丈では足りなかつた。それらのものを役立たせる機會を見出すか、生み出すかしなければならなかつた。が併し、それは一朝一夕の仕事ではなかつた。のみならず、氣の毒な母は、私の力量を買ひ冠つたために、方法の選擇が一層困難となつて、それを活かせる時期を遅らせた。斯うして何事も私の望む通りになつたのは、彼女の鼻頂のお蔭である。併しそれは割引されなければならなかつた。そしてそれから後は平和でなくなつた。夫人の親戚のオボヌといふ人が會ひに来た。才子で猾くて、失敗を知らないで彼女のやうに計畫の巧い、山師のやうな男であつた。巧く仕組んだ富籤の案をフルリイ宰相へ申請したけれど、認可が取れなかつた。彼はそれをトリノ政府の方へ願ひ出ようとする處であつた。此處で認可されて實行の運びとなつた。暫くアマシで滞在してゐる中に、地方官の妻といふ仲になつた。その婦人は大へん私の好みに合つた可愛い人で、母の家で會つた唯一の好きな女であつた。オボヌは私を見た。母は私の事を話した。彼は私を試験し、私の柄を見て、役に立ちさうだつたら世話することを引き受けた。

(一) Paul-Bernard d'Aubonne. ニョンの人。初普魯士に勤仕し、後にベルヌ民兵の隊長となつた。
(二) フレジュウスの大司教。當時の佛蘭西王路易第十五世の首相。

夫人は二朝三朝續けて或る用を口實にして、何事も私に知らせず、その男の處へ私を出した。

彼は私に巧く打ち明け話をさせるやうに仕向け、私に親しみ、なる丈安心させて、色々な事を滑稽交りに話し掛けて、少しも私を試験する様子は無く、氣取りもせず、唯私が氣に入つて氣がねなしに話がついたのだといふ風であつた。私は彼に釣り込まれて了つた。この試験の結果に據れば、私はまるく莫迦でもないが、惻巧さうな、元氣さうな外観には似ず、才能は乏しく思慮は足らず、知識は殆ど皆無で、凡べての點で貧弱だ、で、他日田舎の司祭にでもなれたら、それこそ私の望み得る幸福の頂上だといふのであつた。これが彼のヴァラン夫人にした報告であつた。斯ういふ鑒定を受けたのは、これで二度目か三度目であつた。これが最後でもなかつた。そしてマスロンの判定が毎々中つて來たのだ。

斯ういふ判断の原因は、多く私の性格に因るのであるから、これを説明しない譯に行かない。眞實私が心から然ういふ判断に服することが出來ず、マスロンやオボヌやその他の人達が何と言はうとも私は精々公平に考へて、その言葉を承認することが出來ないのはいふまでもないからである。

殆ど連合の出來さうもない二つの物が、どういふ工合でか、私に在つては結び附いてゐる。熱烈な氣質、活潑で猛烈な激情と、生れ方の鈍い、混亂した而も時過ぎて後に初めて現れる思想とがそれである。私の感情と理智とは同一人に屬すべきものでないかも知れない。電光よりも尙迅速な感情が心を満たすのに、それが私を照らしはしないで、却つて私を焚き、私を眩めかす。私は有らゆる物を感じるけれど、何物をも見ない。奮激はするけれど、痴鈍である。冷靜にならない

くては物が考へられない。併し猶豫してくれるならば、鑑別力も洞察力も機智までもが活くとは驚く。氣が向けば巧い即興詩も作る、が、咄嗟には値打のある何事をすることも言ふことも出來ない。西班牙人の將基も然うだといふが、手紙でなら随分旨い談話も出來よう。サヴワ公が巴里からの歸途に後を振り向いて、「巴里の商人め、忌々しい奴だ。」と歎鳴つたといふ話を讀んだ時に、私は「それは自分の事だ」と思つた。

(一) サヴワ公が巴里へ旅行した時、或る店で物を買はうとすると、商人が値が廉過ぎるといつて、口の中でぶつく零しながら、その品を元の通りにしまつた。公は、その時はこの無作法な挨拶に氣附かなかつたが、里昂まで來てそれを思ひ出し、急に巴里の方を向つて、A votre gorge, marchand de Paris! と叫んだといふ話。一説に、サヴワ公カルロ・エムマヌエーレ第一世が、一五九九年に領地の談判について顯理第四世王と巴里で會見したが、幾度も議論に言ひ負かされて返す言葉が出なかつた。還る途中、巴里から餘程遠くまで來た處で、くやしきの餘りに發したのが此の言葉で、「巴里の商人」といふのは公が王を罵つて呼んだのであるといふ。

こんな風に、感じの活潑に考への緩慢が結びついてゐるのは、對話の時ばかりでなく、獨りである時も物を書く時も同様だつた。私の思想はなかく容易なことで頭の中で纏まらない。色々な思想ががさごそと循環し、私を興奮させ、熱狂させ、心悸を起させるくらゐに醗酵する。斯うした激動の最中には、何物をも明かに見ることが出來ない。一語をも書き下せない。靜と待つてゐるより仕方がない。すると何時の間にか此の動亂は鎮まり、混沌は晴れ渡り、各々の物はその位置に就き始める、それは併し徐々としたもので、而も大騒動の後のことである。諸君は伊太利亞でオペラを見物したことがあらう。舞臺替りの時、あの大きな舞臺の上に、不快な亂調が持ち

上つて容易に静まらない。裝飾は一切ごつちやになつて、痛々しい痙攣が此處彼處に見えて、今にも一切が滅茶苦茶になるかと思はれる。それなのに段々と配置が定まつて何の手落ちも無く、あの長いどさくさの後に、素晴らしい新舞臺面の現はれるのを見て人々は全く驚いて了ふ。私が物を書かうとする場合に頭腦の中に起る段取は、丁度此の通りである。若し私が先づゆつくり待つて、それから其處に描かれる事物を本當に美しく現すことが出来たならば、私を凌ぐ作者は殆どあるまいと思ふ。

私が物を書くのに非常な困難を感じるのは斯うした譯からである。棒だらけ塗抹だらけ、顛倒だらけで、読み分けることも出来ない私の原稿は、私の拂つた苦心の證據である。原稿は大抵四五回書き直してでなければ、印刷所へ渡したことがなかつた。ペンを手にして卓子と紙に向つては、決して何も書けなかつた。岩間や森の中を散歩の時、夜寢床で眠れない時、然ういふ時に頭の中で物を書いた。殊に全く言語の記憶に缺けて、生涯一聯の詩も諳記出来なかつた私では、どんなに書き滲つたかは察し難くない。五晩六晩頭の中で捏ねまはした揚句、漸く紙面に移されるやうになつた文句さへあつた。私が、書簡のやうにさら／＼と遣つて退ける物よりも、努力を要する著作の方に成功したのも矢張此の原因からである。書簡は到頭私の物にすることの出来なかつたもの、それを書くのは私には責苦となつたものである。極々些細な用件の手紙でも、必と數時間の疲勞を要した。若し思ひ付き次第直ぐに書くことになれば、私は始めることも了ふことも知らない。私の手紙はだらしない無駄言で、讀んでもなかく／＼分らない。

思想を現すのが困難ばかりでない、それを受け容れるのも困難なのだ。私は人間を研究して來て、一廉の觀察家だと思つてゐる。それでゐて、自分の今見てゐる物を少しも理解することが出来ない。自分の回想する事でなくては十分に理解しない。追憶の際に初めて思考が働く。今ここで人の言つてゐることや人のしてゐることや、又は起つてゐることに就いては、何も氣附かず、何も見抜かない。唯その外觀が私の注意を惹くだけである。併し時が經つに従つて、すべてそれ等の物が甦つて來る。その場所、時、聲音、眼附、身振、環境を想ひ出す。何一つ洩れない。その時、人のしたこと、言つたことに依つて、その人の考へたことを見出す。殆ど思ひ違ひが無い。自分一人の時でも意の如く思考し得ない私が、對話の時、即ち巧みに話すため、一時に而も即座に百千の事物を考へなくてはならない時の有様を察して貰ひたい。色々な禮儀を考へた丈で、からだ縮まる。きつと自分はその中のどれかを忘れるのだから。私は世間の人達が、どうして多勢の中で喋れるのか合點が行かないくらゐだ。何故ならば、一語毎に其處に居合はす凡べての人を點檢し、その人々の性質を見分け、身の上を知らなくては、ならないだらう。決して聴き手の意を損ずるやうなことを話さないためである。此の點では世間に出てゐる人々は甚だ都合が好い。沈黙すべき事柄を一層よく知つてゐる彼等は、口に出す事柄に就いても一層の自信を持つて居る。それでも動もすると襤褸が出るものだ。況して雲の上から墜ちて來たやうな人間だ、一分間も無難に話するのは不可能に近い。二人對坐の場合には、もつといけない別の不便がある。のべつに話さなくてはならないことである。話し掛けられれば返辭をしなければならず、對手が

黙れば話を盛り返さなければならぬ。この辛い束縛だけで、私に社交を厭はせる事が出来る。即座に、又のべつに話さなくてはならないぐらゐ厄介な責苦は無い。此の事は私のあらゆる屈從に對する極度の反感に因るのかどうかは解らない。が、いよ／＼話さなければならぬとなれば、それ丈で莫迦を言ふに極まつてゐた。

尙それよりもいけないのは、言ふべきことがなければ黙つてゐればいいものを、そんな時に限つて少しも早く負債を返す氣で、話してみたいといふ熱望を起すことである。私は焦慮つて、内容の無い話を急に喋り出す。その話が全く何物をも意味してゐなければ、未だしも仕合せである。自分の無能に打ち克つか或は隠さうとして、却つてそれを見せ附けなかつた例が殆どない。話をすれば色々あるが、中に一つ斯ういふ事があつた。若い時分の事でもなく、もう幾年か社會を渡つて來て、事情が許せばその呼吸を呑み込んだ筈の頃のことであつた。或る晩私は二人の貴婦人と、有名な一人の貴族と一緒に居た。それはゴントオ公爵であつた。外には誰もゐなかつた。で、私は四人の間の對話へ、と言つても外の三人は確かに私の加勢を望んでもゐないのに、何事か口を挿まうと力んだ。主婦の夫人は毎日二回づつ胃病で服んでゐる鴉片劑を取り寄せた。もう一人の夫人は、主婦が顔を顰めるのを見て、

「トロンシャン先生のお薬？」

と、笑つて訊いた。

「どうですか。」

と、同じやうな調子で主婦が答へた。

「此の方にそんな薬は勿體な過ぎますよ。」

と、氣取つて口を入れたのが機轉の利くルソオであつた。人々は呆氣に取られた。一語を發する者もなく、笑ふ者もなかつた。そして、直ぐに話は別の事へ移つて行つた。他の女と對坐の時なら、野卑な言葉も或は座興になつたかも知れない。が、何か言つて見たくて堪らない程可愛く、又私が少しも辱かしめる氣でなかつた一人の婦人に對しては、その言葉は亂暴であつた。そして、傍に居た公爵と夫人とが、噴き出したところを堪へるのに随分骨が折れたことと思ふ。言ふべき事も無いのに口を出して見たがつては、こんな氣の利いたことをやるのだ。私は此の話を忘れはすまい、話その物が忘れられない事であると共に、絶えず思ひ出されるやうな影響がそれから來たと思ふからである。

第三卷

- (一) リュクサンブル夫人とミルプロ夫人のこと。服藥してゐたのは前者である。詳しく第十卷一七六〇年の條に出る。
 (二) Théodor Tronchin. 名醫。ジュネエヴ、巴里等に居住した。佛國攝政フィリップ・ドルレヤンの主治醫で、ヴォルテール、ルソオ、ダドロ等とも友誼があつた。一七〇九—八一。鴉片劑即ち opiate は marmelade de Tronchin とも云つて緩下劑である。
 (三) リメケサンブル夫人の不興を買ふに至つたことをいふ。第十卷に詳しい。

莫迦でもない自分が時々莫迦と思はれ、相當眼のある人達にすら然う思はれた譯は、この話で大よそ解ると思ふ。私の顔立や眼差が、もつと優れた人間らしく思はせるだけ、又然ういふ期待

が無効となれば一層私の愚鈍が際立つて見えるだけ、それ丈餘計に割が悪かつた。これは或る格段な機會から起つた話だが、以下の條に對しても無用ではない。これが人々が見て、私の持つて居ない非社交性に基くものとする多くの奇行を解く鍵になる。私とても人並に社交を好まないのではない。唯社交界では自分が不利な地位に立つのみならず、全く自分と異つた別人と思はせる事を恐れたのである。物を書いて隠遁してゐようとするのは、丁度私に相應しい考である。顔を出せば、誰も私の價値を知るものがあるまい。否それを考へる者すらあるまい。才女であり、數年間一緒に居たヂュパン夫人もそれであつた、彼女はそれから幾度も私に然う話した。が、それでも幾らか例外はあつた。後に話をする事もあらう。

(一) ルソオの擁護者の一人。詳しく第七卷一七四二年の條以下に出る。

(二) コランセ(後出)の傳へた話といふのに、ルソオの「科學藝術論」が發表された時、其の世評が高かつたので、ヂュパン夫人は「これがあなたの御作だと誰が思ふでせう。」と言つたといふことがある。

斯うして私の能力の程度も極まり、身に合つた境涯も定まつた以上、自分の天分を果すこと丈が第二の問題であつた。困つた事は、修養の足りないことと、宗教家になるだけの羅旬語が出来ないこととであつた。ヴァラン夫人は暫く私を神學校に入れる積りで、その事を校長に話した。それはラザアル派傳道者のグロと云つて、人の善い、小柄な、半めつかちの、瘠せばちの、半白の頭をした人だつた。私の知つてゐるこの派の傳道者では一番才氣があつて、一番學者振らない人と云つても、決して過言でない。

彼は時々母の家へ來た。母は好く待遇して可愛がり、調戲ひもし、時には自分の紐を締めさせたりすることもあつた。彼も甘んじてそれを引き受けた。その役目を勤めてゐる中、彼女は、室の中をあちこちと動き廻つて、あれこれと仕事をした。紐に引き摺られながら、校長先生ぶつぷつこぼしながら夫人に隨いて歩いて、

「まあ奥さん、靜と〜。」

と、言ひつゞけた。晝にも描けさうな恰好だつた。

グロ氏は母の提案を快く聽き入れた。少しの月謝で我慢して、教育を引き受けてくれた。問題は司教の許可だけだつたが、司教はそれを許した上に、月謝まで拂つてやらうといふ。且試験の末、定期通りの結果が認められるまで、俗人の服を着てゐることをも許した。

何たる變化だ。私はそれに忍従する外はなかつた。刑場に牽かれる思ひで神學校に行つた。神學校とは何といふ陰慘な處だらう、殊に可愛い女の家から出て來た者に取つて！ 私は母に哀請つて本を一冊借りて來た。これが非常な慰めになつた。どんな本か分るまい、音樂の本だ。彼女は磨いた技藝の中で、音樂を忘れてゐなかつた。彼女は聲はよし、相當に歌ひもし、クラヴサンも少しは弾けた。親切にも私に唱歌を授けてくれたが、私は碌に讚美歌すら唱へなかつたので、餘程手前から始めなくてはならなかつた。八九回の女子の稽古、それも切れ〜で、音階が解る段でなく、記號の幾らかも覺えられなかつた。それにも拘らず、私の音樂に對する執心は非常で、獨力で練習してみようとさへ思ひ立つた。而も今私の持つて來たのは一ばんやさしい曲の

本でなく、クレランボオの歌謡曲であつた。未だ移調法も歴時^{カシヤク}も知らないで、「アルフェとアレチ
ユウズ」の歌謡曲の第一宣叙調と第一詠歎調とを、正確に讀んで唱へるやうになつたといへば、
その時の勉強と忍耐とは思ひ遣られるだらう。尤も此の曲の句格が甚だ正しいので、曲の律を極
めるには、唯歌詞の格さへ追つて行けばよかつたのである。

神學校に蟲の好かないラザアル派の僧が居た。その人が私を受持つたが、私に教へようとする
羅甸語を私に厭がらせて了つた。それは、すべつこい脂染^{あぶら}みた黒い髪、生姜餅のやうな面構へ、
水牛のやうな聲音、鼻のやうな眼附、野猪の毛のやうな口髭の男で、鼻の先で笑ひ、機關人形の
やうに手足を動かした。私はそのいやな名前は忘れたが、恐ろしい、そしてでれつとした相好は、
はつきり記憶に留まつて、身慄ひせず^こにそれを思ひ出すことが出来ない。廊下で出會すと汚れた
角帽を鷹揚に振つて、私には牢獄以上と思はれる彼の室に這入れと合圖をするのが今も眼に見え
るやうに思ふ。宮廷の法師の門下生に對して、こんな師匠とは何たる對照だらう。

(一) 前に出たグヴォン師を指す。

この怪物に二箇月も世話になつてゐるやうものなら、私の頭はその儘では居なかつたらうと思は
れる。だが氣の利いたグロ氏は、私が鬱いで、物を喰はないで、瘦せて行くのを見て、私の心痛
の原因を突き留めた。勿論それはむづかしい事ではなかつた。彼は此の畜生の爪から私を救ひ出し、
もつと際立つた別の對照として、世にも優しい人の手へ渡してくれた。それは年若な、フォシニ
出のガチエといふ修業中の學僧であつた。グロ氏への好意と、多分人情とから、快く自分の研究

の時間を割いて、私を指導してくれた。私はガチエ氏ほど氣持の好い顔つきを見たことがない。
髪は淺褐色で、鬚は鹹味^{あかみ}を帯びてゐた。彼も一般のフォシニ人同様、鈍重な見掛けの裏に、豊か
な才智を隠してゐたが、彼の眞の特徴は、敏感な、愛情に富んだ、可憐な心であつた。大きな碧
い眼の中には、優しさと親しみと悲しみが雜つてゐて、それに惹きつけられない者はなかつた。
この氣の毒な若人の眼差や調子から考へると、彼は自分の運命を豫知して居り、又不遇に生れた
ことを悟つてゐたとも云へないことはない。

彼の性格はその外貌を欺かなかつた。彼は忍耐と好意とに溢れてゐて、私を教へるといふより
は、私と共に研究すると云つた風だつた。それ程にしなくとも、私は彼が好きになれた。前の教
師が既に然う仕向けてゐたのである。それにも拘らず、長い時間を費やさせ、互ひに善意を取り
交し、巧みな指導を受けながら、私は非常に勉強して僅かな効果をしか得なかつた。不思議にも
私は相應の思考力がありながら、父とランベルシエ氏と丈は別として、教師からは何物をも收得
することが出来なかつたのである。その上後に解るとほり、それ以上私の知つてゐる少々の事は、
獨學で覺えたものだつた。どんな種類の羈絆にも堪へられない私の心は、時の法則に従ふことが
出来ない。記えられないといふ心配丈で既う注意を奪はれて了ふ。教へる人を懐らすまいと思つ
て、解つたやうな顔附をする。教師はずん／＼進む、私は何も解らない。私の心はそれ自身の時
間に働くことを望む。他人の時間に屈従することが出来ないのである。

僧職授與の時が來て、ガチエ氏は郷里の方の助祭となつて歸つて行つた。彼は、私の哀惜と愛

着と感謝とを持つて行つた。私は彼の爲に祝福したが、それは自分のためにした祝福より、もつと願ねがが無かつた。幾年か経つて、或る教區の助任司祭で居た時、彼は、或る娘に子供を生ませたと聞いた。愛情の濃やかな彼としては、それが生涯で戀をした唯一の女であつた。管理の厳しい教管區内では、これは恐ろしい墮落罪であつた。法規に據れば、僧侶は結婚した女との間にでなくは子供をこしらへてはならないのである。破戒の名に依つて、彼は牢舎の身となり、名譽も職も奪たり上げられた。後に元々通りになれたかどうかは知らない。が、彼の不仕合の印象が深く私の心に刻まれてゐて、私が、「エミル」を書く時に浮かんで來た。で、此の人とゲム師とを結び合せて、此の尊ぶべき兩師を「サヴワ助祭」のモデルにした。私は此の模造品が、二人の本尊を辱しめるものでなかつたことを喜んでゐる。

私が神學校に居た間に、オボヌはアマシを立ち去らなくてはならなくなつた。地方官(二)は自分の妻に彼の戀してゐるのをいけなと思つたからだ。丁度「園丁の犬」といふ形であつた。といふ譯は、妻のコルヴェチ夫人が美人だのに夫は仲よくしなかつた。伊太利亞趣味の彼女は、夫に取つて無用なものになつてゐたのだ。そこで細君を虐待して、遂には離別談(三)にもなつた。主人は質の悪い、鼯鼠もぐらのやうに腹黒く梟のやうに猜い男だつた。そして壓制の結果到頭自分が逐ひ出されるやうになつた。プロヴァンス人は歌を作つて敵に復讐すると聞いたが、オボヌは喜劇を作つてコルヴェチに復讐した。彼がヴァラン夫人に送つて來たその作を私は見せて貰つた。それが面白かつたので、自分も喜劇を書いて、果して此の作者に宣告されたやうな莫迦かどうかを試さう

と思ひ立つた。が、この考を實行して私が「彼自身の愛人」(三)を書いたのは、シャンベリへ行つてからであつた。だから、その序文に十八歳の作としたのは、幾らか年を割引したのである。

(一) 名は Luczere Corvezi.

(二) 西班牙カスチリヤ古語。Le chien du jardinier ne vent pas de sa patée, et grogne si les bouffis le mangent. 「園丁の犬は自分の餅を喰はうともしないに、それを牛が喰ふと吠え立てる。」自分の嫌ひなものも、他人が取らうとすると遣りたくなくなる意。

(三) Narcisse, ou l'Amant de lui-même. 一七五二年十二月宮廷俳優に演ぜられた喜劇。

第 三 卷

かれ是此の頃に一事件が起つた。大した事ではないが、私の上に影響もし、自分が忘れて了つた時分に、世間を騒がしたのである。私は毎週一回づつ外出を許されてゐた。その時に何をしたらかは言ふ必要がない。或る日曜日、私が母の家に居ると、軒並びの聖フランシス教會の建物から火が出た。竈のあるその家には、燥いた薪が一ぱい詰め込んであつた。見る見る中に凡べてが燃え出した。家は危なくなり、風に追はれた焰に包まれた。皆は引越し騒ぎを始めて、家財を庭へ運び出した。庭は私の馴染の窓と向き合つて、前に話した細流(二)の向うにあつた。私はひどく迷つて、手當り任せに道具を窓から放り出した。外の時なら持ち上げることとも出來ない大石臼(三)まで放り出した。立派な姿見まで手は掛けたが、それは傍はたから留められた。此の日母(四)に會ひに來た人の善い司教も靜(五)としてゐなかつた。彼女を庭へ連れ出し、其處で皆と一緒に祈禱を始めた。で、少し遅れて來た私も人々の跪いてゐるのを見て、同じことを始めた。此の僧の祈禱の間に、忽ち際鋭(六)いところで風が變つた。家を包んで窓口から吹き込んでゐた火焰は、中庭の反對の方角へ行

つて了つて、家には何の別條もなかつた。二年経つてベルネ司教が死んだので、生前の教友である還俗僧達は、彼の宣福(二)の材料になるやうな逸話を蒐めた。私はブデ神父(三)に乞はれる儘に、前の話を證明の一つにして加へた。それはよかつたのだが、この事實を奇蹟としたのがよくなかつた。私は司教が祈禱してゐるのを見た、また彼の祈禱の間に風が、而も際鋭(四)いところで變つたのを見た。それだけが私の言へもし證明もし得たことである。けれども此の二者の一つが一方の原因だつたとは、私の證明してはならないことであつた、それは私の知り得ないことであるからだ。けれども、私の心持を回想し得る限り、當時私は心からの加特力教徒で、深い信仰を持つてゐた。怪異を喜ぶ普通の人情と、有徳な聖僧に對する敬虔の心と、自分も恐らくその奇蹟を助けたと思ふ秘かな誇りとが、相集つて私を誘惑したのである。そして若しも此の奇蹟が確かに最も熱心な祈禱の結果だつたとするならば、その一部は私の功だとしてもよかつたのだらう。

(一) 其の人の死後に、聖者としての種々の資格のあることが證明されれば、それで宣福式 Beatification を受ける。

(二) Grande Bondat. 一七五一年にベルネ司教の傳記を書いた人。

それから三十年餘の後、私が「山より」(一)を刊行した時に、どうして見出したか知らないが、フレロン氏が此の私の證明を、自分の冊子の中に引用した。好い鹽梅に見附かつたものだ。その時機の好かつたことは私にも面白く思はれた。

(一) 第十二卷一七六四年の條。

私は有らゆる境遇の廢物となる運命を持つてゐた。ガチエ氏は私の進歩について、出来る丈私

の不利にならないやうな報告をしてくれたけれど、勉強丈の進歩が見えないとは誰にも思はれた。従つてそれが私に研究を続けさせる刺激にはならなかつた。司教も、校長もがっかりして、到底司祭にすら成る見込のない者として、復た私をヴァラン夫人の方へ送り還した。それでも悪氣の無い正直な青年だと言はれた爲に、色々ななさけない鑑定が下されたにも拘らず、彼女に見棄てられなかつた。

大層役に立つた樂譜の本を、私は揚々として彼女の家へ持ち歸つた。「アルフェとアレチュウズ」の詠歎調だけが、神學校で學んだものの總計と云つてよかつた。それ程音楽が好きならといふので、彼女は私を音楽家に仕立てようと思ひついた。好い折であつた。家では毎週少くも一回音楽會が開かれた。この會の指揮者たる教會堂の音楽教師は、始終家へ出入りしてゐた。巴里つ兒のル・メエトル(一)といふ相當の作曲家で、活潑で快活で未だ若く、押し出しは立派で、氣が利かないがとにかく質(二)の良い人だつた。母は私をその人に紹介してくれた。私は彼を慕ひ、向うも憎く思はなかつた。謝儀の相談も極まつた。遂に私は彼の處へ入り込んだ。樂長の家は母の家から二十歩にも過ぎないので、吾々はおいそれと彼女の處へ來られて始終一緒に晚餐を喰つた、それ丈尙樂しく彼の家でその冬を過した。

(一) ル・メエトルの本名は Jacques-Louis Nicoloz とす。稅務官の息子で此の時二十八歳。

音楽家や、唱歌班の子供達と唱ひくらす賑やかな稽古所の生活が、ラザアル派の神父達と神學校でゐるより、遙かに樂しかつたことは想像し難くはあるまい。併し、この生活が一層自由であ

るからと云つて、平等と規律とが一層缺けてゐるのではなかつた。私は固より不羈を好み、又決してそれを濫用しない人間であつた。まる六箇月の間、母の家か、教會へ行く外は、一度も外へ出掛けず、然ういふ考すら起らなかつた。この間は私の生涯中一番悠然とした、思ひ出しても一ばん楽しい時期の一つである。私の居た色々の境遇の中の或るものは、想ひ回す度に、今も自分が其處に居るかの如く感ぜられるくらゐ幸福の感を留めて居る。密にその時、その場所、その人を喚び起すばかりでなく、周囲のあらゆる事物、氣温、香氣、色彩、其處でなくては感じられないやうな局部的の印象を喚び起す。そしてその生々した追憶が、再び私を其處へ引き戻すのである。例へば音楽練習所で練習された物、合唱で唱はれた曲、様々の動作、出世僧達の立派な、氣高い衣、司祭達の飾り衣、詠歌者達の冠帽、樂人達の容態、コントラ・バスを演つた跛の老人の大工、ヴィオロンを弾いた小柄な褐色毛の學僧、ル・メートルが劔を脱した平服の上に襲ねたぼろぼろの上衣、唱歌班に加はるとして其の襪を隠した薄い長袈裟、特にル・メートルの作つてくれた宣敎調の一片を吹奏する爲に小さいフリユウトを手にして、講壇のオルケストラへ入つて行く時の私の誇り、その後吾々を待ち受けてゐる旨い晚餐、其處へ行く時のひもじさ加減。すべてが一緒に潑刺と心に再現して、實際と同じ程に、或は以上に楽しませられたことは幾度といふ數を知らない。短長格で旅行する「惠みある星の造主」の讚美歌の一節を、いつも身に沁みて愛せずにはゐられなかつたのは、會堂の習はして、降臨節主日の曉け方に石段の上で唱はれるのを私が床の中で聴いたからである。母の小間使のメルスレも少し音楽が解つた。ル・メートルが、こ

の娘と私とに合唱させた「アフェルト」といふ短い經文歌が忘れられない。母は實に聞き惚れてゐた。何から何まで、ペリヌといふ人の好い下女を唱歌班の子供達が散々窘めたことまで、あの幸福と無邪氣との時代の思ひ出の中に屢々立ち返つて、私を悦ばせたり悲しませたりする。

私はアヌシで彼是一年も暮したが、少しも非難されなかつた。人々は私に満足してゐた。トリノ出發以來私は決して莫迦なことはせず、又母の下に居る限りそれをしなかつた。彼女は私を導びいた、常に善く導びいた。彼女に對する愛着が私の唯一の熱情となつた。而もそれがたはけた熱情でなかつた證據は、私の感情が理性を造り上げた事である。實際たゞ一つの感情が、云はばあらゆる私の心の働きを奪つて了つて、何物をも覺えられないやうにして了つた。あれ程努力した音樂さへ然うだつた。けれどもそれは私の過ちではなかつた。私は十分の執着もあり、勉強もした。私は氣が散つて、夢を見るやうで、溜息を吐いてゐた。その中で何が出來よう。私の進歩に就いては、自分の方には何の手落ちもなかつたのである。けれども、對手があつて私を咬りさへすれば、又しても私は莫迦をやり出さうとしてゐた。その對手が現れた。機會はすべてを纏めた。で、後に分る通り、私の薄弱な頭が、その機會を利用した。

二月のひどく寒い晩の事、吾々は煖爐を圍んでゐると、表の扉を敲く者があつた。ペリヌは手燭を執つて開けに降りて行く。一人の若い男が案内に連れて上つて來て、打ち解けた風で顔を出す。簡単に氣の利いた挨拶をル・メートルにして、自分は佛蘭西の音樂家だが、家計の困難から、口すぎをするのに、人の助手をしなければならなくなつたのだと言ふのであつた。此の「佛蘭西

の音楽家」といふ言葉に、正直なル・メエトルの胸は跳つた。彼はその祖國とその技術とを熱愛してゐたのである。彼は若い旅人を款待して、宿をも貸さうと言つた。旅人も固より望む所らしかつたが、いやに辭退せずに受け容れた。彼が身を暖めながら晚餐の出来るまで喋りつゞけるのを私はつくづく見成つた。背は矮いが、背幅は濶い。何處か畸形といふのでもないが、何となく不恰好なところがあつた。その平らな肩が侷儻になつてゐたのだ。心持片足が短かつたらしい。ぼろ／＼の、古いといふより擦り切れた黒の上衣、物は良いが垢染みたシャツ、飾り總のある綺麗なカフス、脚の二本も這入るゲエトル、雪除けの爲の脇に挟む小さな帽子。然うした異様な打扮の中にも、何處となく高貴なところが見える。彼の風采が又それと矛盾しなかつた。彼の顔には華奢なところと優雅なところがあつた。話し振りは軽くて上手だが、愼ましいところが殆どなかつた。それらの點は、この人の教育があつて世の常の物質ひとならず、一個の醉興者として放浪する若い遊蕩兒であることを語つてゐた。その話に據るとヴィルヌウヴのヴァンチュウルといふ人で、巴里から来る途中道に紛れたのであつた。そして是から高等法院にゐる親戚を訪ねにグルノブルへ行くのだと、少し音楽家の役目を忘れて附け加へた。

食事の間に音楽の話が始まつた。彼はなか／＼話せた。樂界の名家、著名な樂曲、男女俳優、美人、貴族を残らず知つてゐた。話に出る物は、彼は皆熟く知つてゐるらしかつた。併し、新しい話題が出掛かると直ぐ、彼は何か冗談を言つてその話を混ぜ返し、人々を笑はせて、その言ひ掛けた事を忘れさせて了つた。それは土曜日であつた。習日は會堂に音楽のある日だつた。ル・

メエトルは彼にその折唱ふことを勧める。

「願つてもないことで。」

又その役を訊く。

「中音部。」

と、言つたきり、また話を逸らせる。會堂へ行く前に、豫習するものを彼に渡す。彼はそれに眼も呉れなかつた。この高慢はル・メエトルを驚かした。

「今に見ろ、」と私に囁いて、「彼奴は音符さへ讀めやしないから。」

「私も然う思つてゐるんです。」

と、答へた。私は不安ながら彼等に隨いて行つた。いよいよ始まつた時には、その男の事が氣にかゝつて、胸がわくわく鼓動した。

漸くほつと落ち着けた。彼は二齣の宣敘調を、想像し得る限りの正確と情趣とを以て、しかも素晴らしい好い聲で唱つた。私はこれ程快い驚きを感じたことはなかつた。彌撒の後でヴァンチュウルは出世僧や音楽家連から、果てしもなく讀め囁かれた。それを彼は冗談に受け流しつつも、さすがに品位は失はなかつた。ル・メエトルは心から彼を抱き締めた。私もその通りにした。彼は私の安心したのを見て、喜んだらしかつた。

私がどう見ても田舎者に過ぎないバアクルに熱中した後で、教育があり、才能があり、機智があり、世馴れて、程の好い遊蕩兒で通れるヴァンチュウルに熱中したらうとは、何人も認める事

と、言つたきり、また話を逸らせる。會堂へ行く前に、豫習するものを彼に渡す。彼はそれに眼も呉れなかつた。この高慢はル・メエトルを驚かした。

「今に見ろ、」と私に囁いて、「彼奴は音符さへ讀めやしないから。」

「私も然う思つてゐるんです。」

と、答へた。私は不安ながら彼等に隨いて行つた。いよいよ始まつた時には、その男の事が氣にかゝつて、胸がわくわく鼓動した。

漸くほつと落ち着けた。彼は二齣の宣敘調を、想像し得る限りの正確と情趣とを以て、しかも素晴らしい好い聲で唱つた。私はこれ程快い驚きを感じたことはなかつた。彌撒の後でヴァンチュウルは出世僧や音楽家連から、果てしもなく讀め囁かれた。それを彼は冗談に受け流しつつも、さすがに品位は失はなかつた。ル・メエトルは心から彼を抱き締めた。私もその通りにした。彼は私の安心したのを見て、喜んだらしかつた。

私がどう見ても田舎者に過ぎないバアクルに熱中した後で、教育があり、才能があり、機智があり、世馴れて、程の好い遊蕩兒で通れるヴァンチュウルに熱中したらうとは、何人も認める事

と信ずる。それが亦私の上に在つた事なのだ。又私の地位に居る凡べての青年に通じての事と思ふ。而も他人の長所を見て取る眼があり、又それを慕ひ得る程の趣味があればある丈、尙その事は容易である。疑ひも無く、ヴァンチュウルにその長所があつた。殊に彼には無暗に知識を誇示しないといふ、齡から云つて珍しい美點があつた。固より彼は自身の知らない多くの事物について自慢した。けれどもよく知つてゐる、而も澤山な事物については何も言はなかつた。それを見せる機會を待つてゐた。その時は焦躁らずに機會を利用した。そしてそれが最大の効果を奏した。何事も後を言はずに差し控へるので、人は彼の言ひ盡して了ふ時を知らなかつた。剽輕で、快活な、果てしのない、人を唆るやうな話をして、始終微笑丈で、大聲で笑ふことがなく、ごく下卑たことをごく上品に言つて退けた。餘程愼ましい女でも、よく自分達が黙つてその話を聴いてゐられたものと不思議に思つた。彼女達は立腹しなくてはならないと思つても駄目だつた。彼女達にそれが出来なかつたのである。彼には支人の女の外は用は無かつた。で私は思ふに、彼は艷福の得られる身ではなくて、それを持つてゐる人達の社會を限りなく愉快にする人だつた。それ程の才藝を有する彼が、その才藝の持て囃される國に居ながら、何時までも音楽家の園内に止まつてゐたのは氣の毒だつた。

ヴァンチュウルに對する私の心酔は、バアクルへのそれと比べて、理由は一層當然であり、結果もあれ程突飛でなかつたが、あれよりも強く且永く續いた。私は彼に會つて話を聴くことを好んだ。彼のする事は皆私には快く、彼の言ふことは皆神託のやうに思はれた。併し彼と離れられ

ない程に熱中はしなかつた。私の身邊には、その深入りを喰ひ止めるものがあつた。それに、彼の處世訓は彼には餘程適當でも、私には役立たないことを感じた。私の好む悦樂は、彼の思ひも寄らない別種のものであつた。彼に話しても冷笑されると思つて口へは出さなかつた。けれども私はこの愛着を、自分を支配してゐる愛着に結び附けたくは思つた。私は夢中になつて彼のことを母に話した。ル・メートルも母に彼を讚め立てた。母は家へ連れて來ることに同意した。併しこの會見は全く失敗に終つた。彼は母を氣取屋だと思ひ、母は彼を遊蕩兒だと思つた。そして私にからした不良な交際のことを警告して、二度と家へ連れ込むことを禁めたばかりでなく、この若者の爲に陥る危険を強く述べ立てたので、私もそれに打込むのを少々用心するやうになつた。そして私の身持や考へ方に取つて都合のよいことに、二人は間も無く別れて了つた。

ル・メートルは、彼の藝術に伴なふ嗜好を持つてゐた。彼は酒が好きだつた。食卓では、それでも控へてゐたが、室で仕事をする時には、飲まないではゐられなかつた。女中はそれをよく呑み込んでゐるので、彼が五線紙を引つ張り出したり、セロを持ち出すと、酒饅と蓋とがすぐに出て來た。そして酒饅はのべつに取り替へられた。酔ひ潰れて了ふやうな事はなかつたけれど、始終いゝ心持になつてゐた。そして實際それがいけなかつた。なぜなら、彼はもと／＼善良で、母が「小猫」としか呼ばなかつた位快活な人であつたからだ。不幸にも彼は、自分の職業を愛してしつかり勉強し、そしてしつかり飲んだ。それが健康と、遂には性質をも害した。時々疑ひ深かつたり、氣むづかしかつたりした。不作法も出來ず、人の氣に逆らふことも出來ない彼は、誰に

對しても、唱歌班の子供に對してすらも、憎まれ口を利かなかつた。その代り彼の氣に逆らつてもいけなかつた。それは道理の事だ。困つた事には目はしが利かないので、人の外面と本心との區別が出来ず、時々何でもない事に癩癩を起した。

舊のジュネエヴの教務會は、以前無數の貴族や司教達がそこへ入會するのを誇りとしたものであつたが、その流浪の中に、昔の非常な名譽を失くしてしまつた。けれども會の特權はそのまゝ有つてゐた。此會へ這入れる者は、何時もソルボヌの貴族か、ドクトルかでなくてはならない。そして、個人の功徳に由る誇りに次いで認めらるべきものは、家柄に由る誇りである。のみならずどの司祭も、自分の使用する俗人は、随分横柄に取り扱つてゐる。そんな風に出世僧等も屢々氣の毒なル・メートルを取り扱つた。中にもヴィドヌ師といふ唱歌手は、他の事では優しい人だつたが、身分を鼻に懸けて、何時もル・メートルの伎倆に相當する敬意を拂はなかつた。一方も黙つて斯ういふ輕侮を忍んではゐられなかつた。此の年大齋節の第五週に、司教が出世僧達を請待し、ル・メートルも始終招かれる慣例の正餐會で、二人は平常よりも激しく争つた。ヴィドヌは彼に不當なことをして暴言を吐いた。それを一方は我慢することが出来なかつた。彼は即座に、次の晩逃走しようと決心した。何物も彼を思ひ止まらせることが出来なかつた。ヴァラン夫人も、その暇乞に來た時、力限り彼を鎮めようとしたけれど。此の人の一ばん必要な復活祭の祝に、暴主達を困らせて腹癩せする痛快さが、彼には思ひ切れなかつたのだ。ところが、彼自身困らされたのは樂譜である。それを運んで行きたいにも、手輕に行かない。抱へて行かれない程の大きな

重たい函に成つて居たのだ。

母は、私が彼女の立場に居たらしたであらうと思ふやうな、又今でもするだらうと思ふやうな事をした。彼を引き留める爲に無益な骨折をしたが、どうしても出掛けるといふ決心を見抜いて、母は自分出来る限りの便宜を圖ることにした。それが母には至當の事でもあつた。云はばル・メートルは一身を獻げて母に奉仕してゐた。技藝に關した事にしろ、母の世話にしろ、彼は始終母の命のままに動いた。そしてそれをする時の眞心は、彼の從順の値打を高めた。それ故三四年の間細々しい事で彼のしてくれたことを、彼女は一度の急場に臨んで友人に仕返した丈のことであつた。固より彼女は、斯ういふ義務を果すのに然うするのが自分の義務だと考へるまでもないやうな心は持つてゐたのだ。母は私を呼んで、少くとも里昂まではお伴をせよ、御用のある間は何時までもお側を離れるなど言ひつけた。此の計畫の中には、私をヴァンチュウルから引き放さうといふ考が尠からずあつたのだといふことを、後に母は私に打ち明けた。彼女は忠實な僕のクロード・アネに樂譜函の運搬の事を相談した。彼の意見では、アマシで馱馬を僦へばつきり見附かるから、夜に入つて或る地點まで函を提げて行き、どこかの村で馱馬を僦つてセイセルまで運ばせれば、其處はもう佛蘭西領だから占めたものだといふ。その意見の通りになつた。私達はその晩の七時に發つた。母は私の費用にと託けて、この哀れな「小猫」に取つて無用ではない餘分の金を、其の財布に詰めてやつた。アネと園丁と私とが、一番近い村までどうかかから荷物を擔いで行つて、其處で馱馬と交代した。そしてその夜の中にセイセルに行き着いた。

(一) アンヌの小都會で、里昂の馬車が出る。

私には時折自分とは似も附かない、まるで反對の性格を持つ別人と見えるやうな場合のあることを前にも話したと思ふ。その實例がこゝにある。セイセルの主任司祭レドレ氏は、サン・ピエールの出世僧だつたので、自然ル・メエトルとは相識の仲で、一ばん隠れて行かなければならぬ一人であつた。私の意見は反對で、教務會の許可を得て來たのだとか何とか口實を拵へて、頭からぶつかつて行つて、宿も貸して貰はうといふのであつた。ル・メエトルは此の思ひ附を面白がつた。皮肉で小氣味の好い復讐になるからだ。で、づう／＼しくレドレ氏の家へ押し掛けて行くと、好く款待された。ル・メエトルは司教の希望でベレに行つて、復活祭の祝の演奏を指揮するのだといふ事、日ならず歸つて來る積りだといふ事を告げた。私の此の作り事を支へるのに、尤もらしい口上を並べ立てたので、レドレ氏は私を可愛い奴と見て親切にしてくれ、無上に可愛がつてくれた。私達はたらふく御馳走になつて、心持よく寝た。レドレ氏はどう吾々を待遇していいかを知らなかつた。歸路にはもつと緩り滞在する約束で、世にも親しい友達の如くに別れた。吾々は自分達だけになるのを待ちかねて、どつと噴き出した。實際今でも思ひ出すと笑はせられる。化の皮を斯う巧く包み果せて、斯う巧い目を見ようとは、思ひも寄らないことであるからだ。此の事は、若しも酒を飲み續けて管を巻いてゐたル・メエトルが、二三回或る發作に襲はれなかつたならば、此の旅行中吾々を面白がらせたに違ひなかつたのだ。此の發作は彼の持病になつてゐて癲癇によく似たものであつた。それが私を恐ろしい當惑に沈めた。で、私は何とかしてそれを免れたいものと考へ出した。

(一) Louis-Emmanuel Reydet. 一七九九年から一七四二年までセイセルの司祭であつた。

レドレ氏に話した通り、私達は復活祭の祝を過しにベレへ行つた。別に待ち受けられてゐた譯でもないのに、樂師に迎へられ、人々には心から待遇された。ル・メエトルはその技術で尊敬されてゐた、又それ丈の眞價もあつた。ベレの樂師は誇り貌に自分の最上の腕前を見せて、この優れた批評家の賞讃を博しようとなつた。ル・メエトルは鑑賞家としての外に、嫉妬と阿諛とを持たない公平な人であつたからである。彼はその地方のあらゆる樂師より遙かに優れ、彼等自身も堅く然う信じてゐたので、彼等は同僚としてよりも、自分達の樂長として彼を見たのだ。

(一) 一七三〇年四月九日。

四五日ベレで楽しく過ごして復た出掛けしたが、今話した外に別に變つた事もなかつた。里昂に着いてノオトル・ダム・ド・ピチエに泊つた。荷物は亦別の計略のお蔭で、有難い保護者のレドレ氏の世話でロオヌ河を下すことにしたので、それを待つ間にル・メエトルは知る邊を訪ねて行つた。その中に、後に話す聖フランシス派の神父カトンや、里昂の伯爵ドルタン師がある。二人とも親切に彼を迎へたが、すぐあとで分る通り、彼を裏切つた。彼の幸運はレドレ氏の家で盡きてゐたのである。

(一) L'abbé François de Gruel de Dortan. アメン人の一七〇六年生。

里昂へ來て二日の後、宿から遠くもない小さい町を通つて行くと、ル・メエトルは突然持病を

起した。如何にも激しいので私は吃驚した。聲を揚げて救ひを求め、宿の名を言つて誰か彼を連れ込んでくれるやうに頼んだ。さて往來の眞ん中へ、人事不省に泡を噴いて卒倒してゐる者を、多勢の人が取り捲いて騒いでゐる最中に、彼はその一番頼りにしてゐたであらう唯一人の友に置き去られた。誰も私の事を考へてゐない隙に、私は街の角を曲つて姿を隠した。やれやれ私は此の苦しい三つ日の告白を済ました。まだこの上に斯うした告白が澤山残つてゐるのだつたら、私は始め掛けた此の著作を抛棄つて了つたであらう。

今まで話した事では、私の居た場所々々に何かの痕跡が残つてゐる。が、次の巻で話さうとする事は、殆ど全く曖昧である。それらは私の生涯中での極めて狂妄なもので、未だしも一層悪い結果に陥らなかつたのが仕合であつた。併し私の頭脳は、馴れない樂器の調子に乗つてその諧調を失つた。その頭脳が獨り手に又元に復すると、その時は私も莫迦をしなくなつた。少くとも自分の性質にもつと相應するやうなことをした。私の青年時代の此の時期は、一番記憶の混亂してゐる部分である。生き生きと回想するに足るやうな、私の心を惹くやうな事は殆どその頃に起らなかつた。それに頻繁な流離變遷の間で、時期や場所を取り違へないやうにすることはむづかしい。私は記憶を呼び起すやうな遺物も材料も無しに、全く記憶のみから書く。私の生涯の出來事には、たつた今起つたもののやうに思はれる事件がある、併し又私の記憶同様に、混亂した話の補助を借りなくては填められないやうな空隙もある。だから私は、時々間違ひを仕出來したかも知れない。又自分に就いて一層確實な資料を得るまでは、些事に關してやはり間違ひを仕出來す

かも知れない。併し、本題に對して眞に重要なもの、正確であり眞實であることは間違ひない。それは私が、何事に就いても常に然うしようと思つてゐる通りだ。それは信用していいことだ。

私はル・メートルを置き去りにすると、直ぐに決心して、復たアマシへと引つ返した、二人の出發の理由と云ひ、人知れずといふので、安全に立ち退けるかといふことが私には氣遣はしくて堪らなかつた。此の不安に氣を取られて、幾日かの間、私は自分をあとに引戻さうとしてゐるものをも忘れてゐた。併し、私が安心して氣が靜まるや否や、例の力強い感情が復た元の位置に還つた。何物も私を樂しませ誘はなかつた。私は母の傍に歸りたい一心の外に何の望みもなかつた。彼女に對する眞剣な私の愛着は、あらゆる空想的な計畫と痴愚な野心とを私の心から抜き去つた。彼女と一緒に住むより外に、何の幸福をも見なかつた。そして私は一步進むごとに、自分がその幸福から離れてゆくことを感じないではゐられなかつた。で、私は出来る丈早くそこへ歸つた。私の歸りが餘り急で、又私の心もひどく亂れてゐた爲に、他の旅行なら面白く思ひ出せるのに、此の旅行ばかりは少しの記憶も無い。あるのは里昂を發つたこととアマシに着いたことだけである。しかもこのアマシへ着いた時の事が、どうして私の記憶から脱けよう。歸つて來て見るとアマシ夫人はもう居なかつた。彼女はバリへ出かけたのであつた。

母のバリ行きの秘密は、私には終までよく分らなかつた。強ひて彼女に訊けば話したらうとは思ふ、けれども友人の秘密を知りたがらないこと、私の如きは稀である。私の心は、偏へに現在に執着して、その全部が現在で満たされて居り、且今後の唯一の享樂となる過去の歡樂の外には、